

米光萬福寺遺跡

1987

石川県立埋蔵文化財センター

米光萬福寺遺跡

石川県立埋蔵文化財センター





(1) 掘立柱建物跡



(2) 井戸跡

序 文

加賀が日本歴史の中に登場し、強烈な印象を今に止どめるのは、やはり15世紀後半に起きた一向一揆であろう。この一揆は、長享元年(1487)12月に始まり、翌年6月には守護富樫政親が敗死している。米光の村名が初めて文献に現れるのは、この動乱の直後といえる延徳2年(1490)のことであった。すなわち、この年の12月に、竹田法印定盛が祈禱によって後土御門天皇の病を治療したことに対して、恩賞として皇室領日蝕料所米光村西方の代官職に任命されたという。また、萬福寺の名についても、天文8年(1539)の記録に「東福寺(京都五山の一つ)末寺加州萬福寺領石川郡米光……」として見えている。

松任市米光町に住まわれる室野清氏は、「米光の萬福寺」の旧跡を明らかにされようとした郷土史研究家である。同氏は、古記録・地名・伝承の外、出土品や遺構にも注目されて、西米光町(美川町)に近い水田の一角こそ萬福寺跡だと推定され、そのことは「幻の萬福寺一室町時代の天台宗寺院一」として新聞紙上(北陸中日新聞・昭和59年8月18日付)でも紹介されている。当埋文センターが米光町付近に遺跡があると知ったのも、実はこの記事によってのことであった。室野氏によって一つの遺跡が世に出され、また救われることになった。

ここ数年、松任市内における県営圃場整備の進行振りは目覚ましいものがある。そして工事に先立っての発掘調査も際立って多い。室野氏が想定された萬福寺跡でも圃場整備が実施されつつあり、氏が柱穴群の存在に着目されたのもその際のことであった。センターが、発掘を行ったのは昭和60年夏のことであり、室野氏から数々のご教示を頂いている。遺跡名も米光萬福寺遺跡と命名された。調査の結果、当遺跡は平安時代後期から室町時代にわたるものと判明している。また、その面積は1万平方メートルをこえる広大な遺跡だと確認された。検出した遺構・遺物については本報告に詳しく述べているが、寺院跡と断定するには至らなかった。しかし、萬福寺とは年代的に矛盾するものでなく、五輪塔や宝篋印塔など仏教的色彩の濃い遺物も出土しており、寺院とそれに関連する施設や集落が存在した可能性は極めて高いと考えられる。それだけに、室野氏の想定も確度の高いものとして、今も生きているのであり、いつの日か確実なものとして承認されるものと考えたい。

発掘調査は、地味な作業の連続であるが、雨季や猛暑の中でもおこなわれる。それだけに、作業を助けられた方々も大変な御苦労をされたことと思う。心からお礼を申し上げたい。また、当遺跡調査の端緒を開かれ終始ご協力下された室野氏にも、とくに敬意と感謝の意を申し述べておきます。

石川県立埋蔵文化財センター

所長 橋本 澄夫

米光萬福寺遺跡

目 次

	頁
序 文	i
例 言	ix
第1章 序 説	1
第2章 米光萬福寺遺跡の環境	3
第1節 位置と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3章 遺構と遺物	7
第1節 概 要	7
第2節 各 説	10
1 掘立柱建物跡	10
2 井戸跡	12
3 土坑・溝状遺構・ピット・集石	14
4 包含層出土遺物	21
5 テラノヤブ地区採集遺物	26
第3節 調査の成果と課題	29
1 掘立柱建物跡	29
2 井戸跡	30
3 有頭石錘	30
4 出土土器について	31
第4章 考 察	35
第1節 石川県内出土の井戸について	35
1 はじめに	35
2 弥生時代の井戸	35
3 古墳時代の井戸	36

4	奈良・平安時代の井戸	36
5	中世の井戸	40
6	おわりに	43
第2節	石川県内出土の石硯について	48
第3節	中世米光の検証	49
1	はじめに	49
2	周辺地域の様相	49
3	文献史料からみた米光萬福寺遺跡	56
付 章	幻の寺院萬福寺遺跡について	67

図 版 目 次

本文参照頁

卷首図版第1 遺跡全景	3・4
卷首図版第2 遺 構	
(1) 掘立柱建物跡	8~10
(2) 井戸跡	10~12
図版第1 空中写真 米光萬福寺遺跡の位置(昭和22年11月撮影 縮尺25,000分の1)	4
図版第2 空中写真 米光萬福寺遺跡と周辺地域(昭和44年10月14日撮影 縮尺10,000分の1)	
.....	1・4
図版第3 遺 跡	
(1) 遺跡遠景(南から)	1
(2) 遺跡遠景(東から)	1
図版第4 遺 跡	
(1) 調査前の遺跡(東から)	7
(2) 表土除去中の遺跡(西から)	7
図版第5 遺 跡	
(1) 調査風景(東から)	7・8
(2) 調査風景(西から)	7・8
図版第6 遺 構	
(1) 掘立柱建物跡(東から)	8~10
(2) 掘立柱建物跡(西から)	8~10
図版第7 遺 構	
(1) 井戸跡	10~12
(2) 第1号井戸跡	10~12
図版第8 遺 構	
(1) 第2号井戸跡	10~12
(2) 第2号井戸跡完掘状況	10~12
図版第9 遺 構	
(1) 第1号溝と第1号・第2号土坑	13~16
(2) 第2号溝(北から)	13~16
図版第10 遺 構	
(1) 第3号土坑・第3号溝(北から)	13・15・16・19・20
(2) 第4号溝・第4号土坑	13・15・16・19・20
図版第11 遺 構	
(1) 第5号土坑(東から)	13・15・16・21
(2) 集石(西から)	13・15・16・21
図版第12 遺 構	
(1) P21の柱根(左)とP22の礎板	12・20・21
(2) 掘立柱建物跡P9の礎板	12・20・21
図版第13 遺 跡 遺跡全景(東から)	8

図版第14	遺物	遺構内出土遺物	17
図版第15	遺物			
	(1)	第1号井戸内枠		
	(2)	第1号井戸内枠内面	18
図版第16	遺物			
	(1)	第1号井戸中枠		
	(2)	第1号井戸中枠内面	18
図版第17	遺物			
	(1)	第2号井戸内枠		
	(2)	第2号井戸内枠内面	18
図版第18	遺物	包含層出土遺物(1)	23~25
図版第19	遺物	包含層出土遺物(2)	23~25
図版第20	遺物	テラノヤブ地区採集遺物	27
図版第21	遺物			
	(1)	テラノヤブ地区採集石硯の硯面	(2) 石硯の底面 28・29
	(3)	石硯の硯面および側面	28・29
図版第22	遺物	テラノヤブ地区採集石造遺物	51
図版第23	石立の立石			
	(1)	立石全景(南から)	(2) 立石全景(東から) 49・50
図版第24	石立の立石		49・50

挿 図 目 次

	頁
第1図 米光萬福寺遺跡の範囲と調査箇所（縮尺5,000分の1）	1
第2図 調査風景	2
第3図 松任市位置図（縮尺300,000分の1）	3
第4図 米光萬福寺遺跡と周辺の遺跡分布図（縮尺25,000分の1）	4
第5図 米光萬福寺遺跡周辺の地形図（縮尺20,000分の1、明治42年大日本帝国陸地測量部作成）	6
第6図 調査区区割図（縮尺1,000分の1）	7
第7図 調査区全体図（縮尺200分の1）	8
第8図 調査区土層図（縮尺60分の1）	9
第9図 遺構実測図(1)（縮尺60分の1）	11
第10図 遺構実測図(2)（縮尺60分の1）	13
第11図 遺構実測図(3)（縮尺60分の1）	15
第12図 遺構出土遺物実測図（縮尺3分の1）	17
第13図 井戸枳実測図（縮尺9分の1）	18
第14図 包含層出土遺物実測図(1)（縮尺3分の1）	23
第15図 包含層出土遺物実測図(2)（縮尺3分の1）	24
第16図 包含層出土遺物実測図(3)（縮尺3分の1）	25
第17図 テラノヤブ地区採集遺物実測図（縮尺3分の1）	27
第18図 テラノヤブ地区採集石硯実測図（縮尺3分の1）	28
第19図 石硯の線刻（縮尺4分の1）	29
第20図 石川県内出土の有頭石錘（縮尺6分の1）	30
第21図 石川県内出土の井戸(1)（縮尺60分の1）	37
第22図 石川県内出土の井戸(2)（縮尺60分の1）	39
第23図 石川県内出土の井戸(3)（縮尺60分の1）	41
第24図 石川県内出土の井戸(4)（縮尺60分の1）	43
第25図 石立の立石配置図（略図）	50
第26図 第3号立石の割り込み	50
第27図 手取川扇状地を中心とする中世の主要遺跡および集落分布図（縮尺140,000分の1）	57・58
第28図 遺跡周辺の小字名（縮尺5,000分の1）	63

表 目 次

	頁
第1表 周辺遺跡地名表	5
第2表 井戸側曲物法量一覧	19
第3表 石川県内における中世の総柱建物	30
第4表 米光萬福寺遺跡出土土器種別一覧	32
第5表 石川県内出土の井戸一覧	44~47
第6表 石川県内出土の石硯一覧	48
第7表 今湊・元吉の時衆一覧	55
第8表 遺跡と集落の変遷	56
第9表 萬福寺および米光関係主要年表	61

文献史料目次

	頁
文献史料第1 『遊行上人縁起絵』第四段・第五段詞書	53
文献史料第2 萬福寺および米光関係史料	59

例 言

- 1 本書は石川県松任市米光町に所在する米光萬福寺遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は石川県農林水産部耕地整備課施行の県営圃場整備事業（笠間地区米光工区）に起因し、同課の依頼をうけた石川県立埋蔵文化財センターが、石川県松任土地改良事務所と協議して実施した。調査に係る費用は同課および文化庁の負担による。
- 3 現地調査は昭和61年6月27日から同年8月6日まで行なった。
- 4 調査の実施にあたっては米光町を中心とする遺跡周辺地区の有志の参加・協力を得た。
- 5 挿図中で指示した方位はすべて磁北である。また、指示のないものは天地の軸を真北にとっている。断面図の水準線に付した数字はすべて標高で、単位はメートルである。
- 6 写真図版の遺物に付した番号は挿図の番号に一致する。遺物写真の縮尺は、明記したもの以外は不同である。
- 7 発掘調査および本書の作成にあたって次の各位よりご教示・ご協力をいただいた。芳名を記して深甚の謝意を表したい。
 東四柳史明（石川県立中島高等学校教諭） 戸潤幹夫（石川県立歴史博物館学藝員） 松本義博（文真堂専務取締役） 宮本直哉（石川考古学研究会会員） 室野 清（笠間郷土史編さん委員） 室野清隆（米光工区長） 竹内ユキ（美川町蓮池） 石川県立図書館加能史料編纂室
- 8 本書の執筆は石川県立埋蔵文化財センター主事久田正弘、同三浦純夫が担当し、編集は三浦が行った。執筆分担は次のとおりである。また、室野 清氏より「幻の寺院萬福寺遺跡について」と題する玉稿を頂いており、これを付章として収載した。
 第1章、第2章、第3章第2節4・5、同第3節4、第4章第2節・第3節… 三浦 純夫
 第3章第1節、同第2節1～3、同第3節1～3、第4章第1節…………… 久田 正弘
- 9 調査によって得られた資料（遺物・スライド等）は石川県立埋蔵文化財センターが保管している。貸出しを行っているので学校教育ならびに社会教育資料として利用していただきたい。

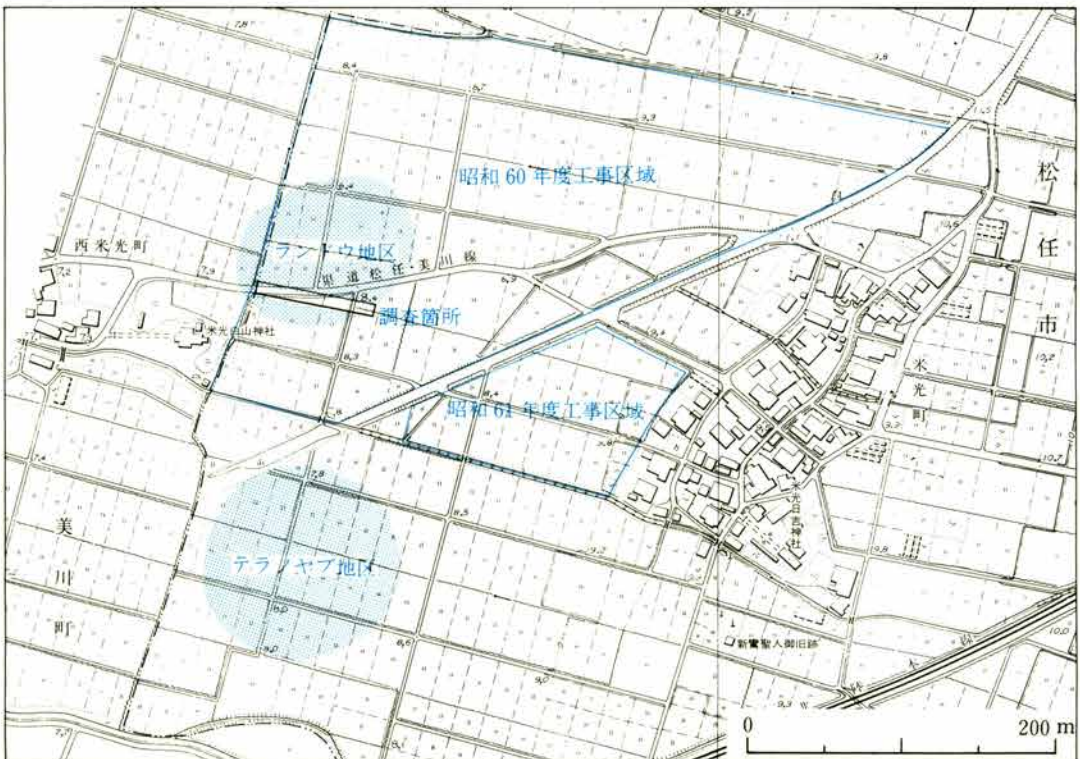
第1章 序 説

松任平野は現在こそ肥沃な穀倉地帯となっているが、かつては河川の氾濫によって随所に水たまりや堤防跡、川原石の山があり、耕作に多くの困難をきたしていた。

遺跡の所在する米光町において耕地整理が実施されたのは明治時代にさかのぼる。周知のように、日本で最初に耕地整理が実施されたのは石川県で、明治21年に石川郡安原村(現在の金沢市安原地区)で土地の豪農高田久兵衛が行なったのを嚆矢とする。米光の耕地整理は明治43年に始まり、大正14年に終了している。この際、五輪塔や寶篋印塔が出土している。大型重機を中心とする現在と異なり、当時はもっこや天秤棒、トロッコと、もっぱら人力に頼る事業であったから、その労苦には想像を絶するものがあったと思われる。

この第1次整理に続き、第2次整理が松任平野で始まったのは昭和50年代に入ってからである。本遺跡の周辺においても昭和59年度より開始され、1筆が30アール(100m×30m)の大型圃場への転換をめざしている。

昭和59年度は、本遺跡を構成するランドウとテラノヤブの2地区のうちテラノヤブ地区周辺において工事が実施された。この時点では本遺跡の存在は知られておらず、工事ともななって遺跡の一部が損なわれたのは遺憾なことであった。しかしながら、米光町在住の郷土史研究者室野清氏の熱心な遺物採集によって遺跡の一端を知ることができたのは不幸中の幸いであった。



第1図 米光萬福寺遺跡の範囲と調査箇所

1/5,000



第2図 調査風景

昭和60年度の施工予定区域5.7ヘクタールについては、昭和59年9月19日付耕整収第386号の調査依頼をうけて昭和59年10月3日から同4日にかけて分布調査を実施した。その結果、遺跡は米光白山神社の東側に東西約240m、南北約180mの広がりをもつことが判明し、その旨の回答を行なった。

発掘調査は昭和60年6月27日より開始した。7月1日には松任土地改良事務所、日本

電信電話株式会社、施工業者が立ち会って調査区にかかる電話ケーブルの埋設位置を確認する。梅雨の最中とあって天候に恵まれず7月5日より表土はぎを実施する。7月12日は梅雨の晴れ間で、仕事がかどる。包含層より青磁、白磁をはじめ中世陶器、木製品が出土する。7月16日には遺構面の調査にかかり、井戸跡を2基検出する。7月22日より調査の最終的なつめに入り、写真撮影の準備を行なう。7月26日より実測図の作成にかかり8月3日に遺物および器材を埋蔵文化財センターに搬入する。8月6日には現地

で松任土地改良事務所の担当者に現地調査の終了を伝える。

昭和61年度施工区域にかかる分布調査は、昭和60年10月7日から同8日にかけて実施し、この区域まで遺跡の広がりはないことを確認した。

現地調査においては地元米光町、美川町西米光町の有志を中心とした多くの方々にご協力をいただいた。そして、米光町の室野清氏には調査期間中随時有益なご助言を得た。以下に各位のご芳名を記して深甚の謝意を表したい。

遺跡整理は、土器、木製品、石器の記名・接合・復元・実測・浄書を社団法人石川県埋蔵文化財整理協会に委託した。調査関係者は次の通りである。

調査担当者 石川県立埋蔵文化財センター主事三浦 純夫、同久田 正弘
 調査協力者 中本 幹夫 西野喜代志 室野 準嗣 川上 せき 苗代 佳子 西野とく子
 宮本 豊子 (以上米光町) 池田 義久 中江 和子 西向 京子 (以上北島町)
 笠森 与作 北山 直輝 (以上笠間町) 東 洋子 (石立町) 大津 良子
 川口 明子 川口千代子 中川 幸江 堀 一子 (以上美川町西米光町)

第2章 米光萬福寺遺跡の環境

第1節 位置と地理的環境（第1・3・4・5図、図版第1・第2）

米光萬福寺遺跡は石川県松任市米光町に所在する。ただし、その一部は石川県美川町西米光町に及んでいる。遺跡は第1図に示したように堂尻川をはさんで2ヶ所に分かれる。本書では各地区の通称名をとって北側にランドウ地区、南側をテラノヤブ地区と呼称する。今回発掘を行なったのはランドウ地区の一部である。

松任市は、南北に細長い石川県の中央部よりやや南側に位置し、手取川^{てとりがわ}の北に広がる平野部を占める。米光町は市南西部の端にあり石川県美川町に接している。所帯数は21を数え、兼業農家が大多数である。昭和45年に松任市が発足する以前は、米光町は石川県笠間村東米光と称していた。西接する美川町の米光は西米光であり、もとは一つの村であつたらしい。美川町の米光は「西^{にし}方^{がた}」と呼ばれている。

さて、明治前期の米光のようすを『皇國地誌』によって窺ってみよう。

地勢 全土平坦 村落中央ニアリ 北方海ヲ距ル一十三町許 村中木曾街道貫通スルヲ以テ運輸稍々便ナリ

地味 土色東北青シ 西南淡赤 乾湿相半ス 概ネ稲田ニ宜シ 然レトモ渠水流末ナルヲ以テ旱ニ苦ム

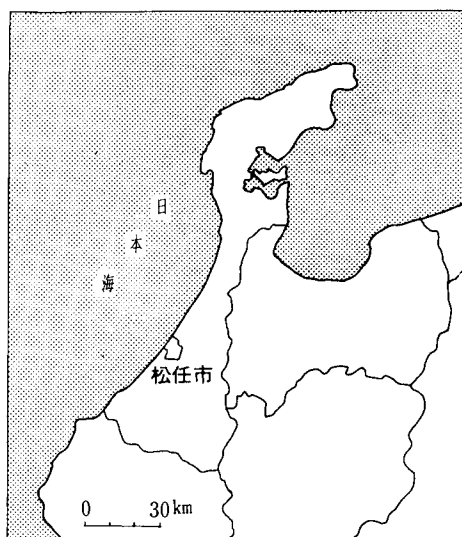
米光の村が、手取川扇状地扇端部に宿命的な水不足に苦しんでいた状況がうかがえる。

本遺跡周辺の地形は明治42年作製の2万分の1地図によって旧状を知ることができる。これは、第1次の耕地整理直前の状況を示す地形図として貴重である。第5図において西から東へ筋状に走るのは水路である。これによると水の流れは西からやや東北に向いて走っている。福留の北から北嶋の北に流れるのは七ヶ用水用のひとつ大慶寺用水である。また、東米光と西米光の南にも流れがあったことが複雑な水路の状況より窺える。室野清氏の調査によると、この美川町との境界付近は「ババガワラ」「ウラガワラ」「ナカジマ」などの字地となっており、地名からも証明されるのである。

本遺跡は県下最長の河川手取川によって形成された手取川扇状地の扇端部に位置し、標高約8mを測る。

手取川は流程約70kmを測り、その源を「白き神々の座」

白山に発する。大日、尾添、直海谷の各水系を集めて北流する手取川は、石川県鶴来町で流れを大きく西にとり、日本海に注いでいる。手取川扇状地は扇径約13km、扇開角度約110度を測り、扇



第3図 松任市位置図 1/300,000

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺 跡 名	現 在 地	現 況	種 別	時 代	備 考
1	鹿 島 町 遺 跡	美川町鹿島町	畑地・水田	包 含 地	中 世	珠洲焼出土 石立城跡とも伝えられる
2	石 ノ 木 塚	松任市石立町	平 地	祭祀遺跡	不 詳	5基の立石よりなる室町時代以前の建立か
3	賢 徳 寺 跡	" 笠間町	水 田	寺 院 跡	"	『加賀志徴』に記載あるも実体は不明
4	笠間兵衛家次館跡	" "	"	館 跡	"	『加賀志徴』に記載あるも実体は不明

端は海岸砂丘に続いている。南は能美山地、東は富樫山地に接し、北東部扇端は犀川扇状地と複合している。

古来「手取川はその水路を七度変えた」と言われ、その流れの跡が今は扇状地を潤す七ヶ用水であると伝えられている。七ヶ用水とは、北から富樫、郷、中村、山島、大慶寺、中島、新砂川の各用水をさす。このうち富樫、郷、中村の各用水と山島用水の北川、中川は北方に流れをとり、山島用水の南川と大慶寺、中島、新砂川の各用水は西に流れをとっている。両用水群の中央で扇頂部と徳光町を結んだラインを扇央稜線といい、この線を境に遺跡の分布は大きく変わる。手取川扇状地は扇状地礫層を主とする洪積世末期層よりなる。土壌は、扇端部の南側にグライ土壌が広がり、扇央稜線を境にして北側に黒色—黄褐色土壌および灰色—灰褐色土壌が多く見られ、南側では礫質土壌が広く分布し、そのなかに黒色—黄褐色土壌が見られる。これを遺跡の分布と照合すると、礫質土壌にはほとんど形成されていないのがわかる。本遺跡は灰色—灰褐色土壌のうえに形成されている。

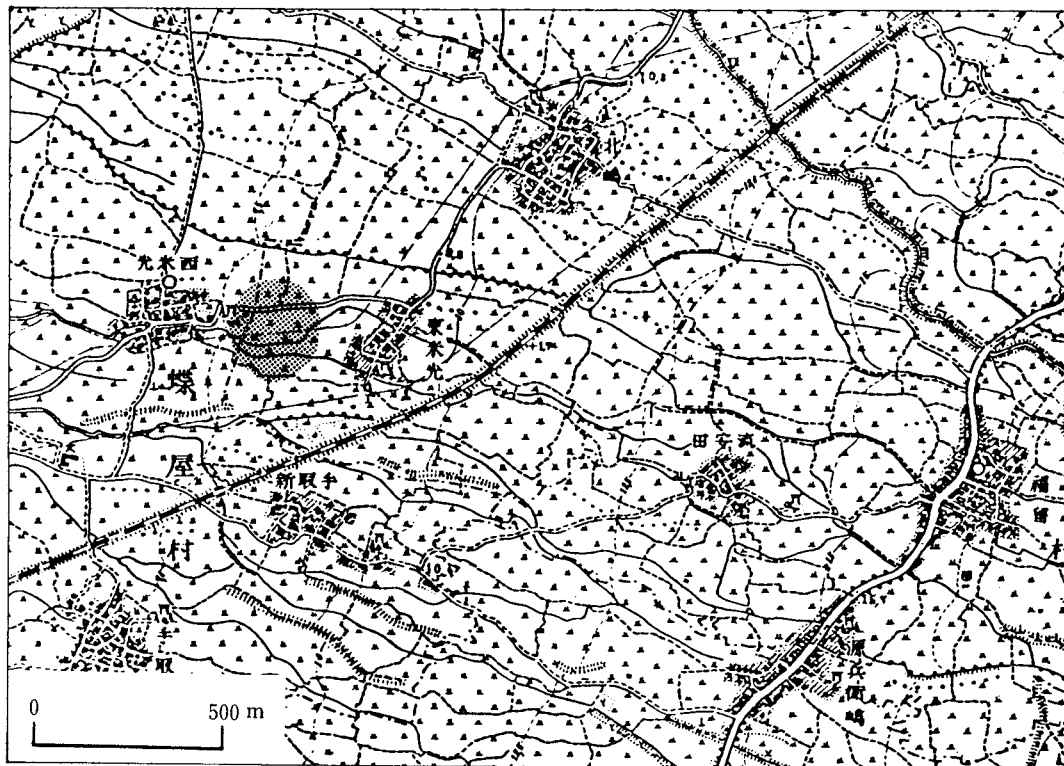
また、礫層上部の堆積層の厚さをみると、礫質土壌の範囲はいうまでもなく浅く、30 cm以下である。これに対して扇央稜線より北では90 cm以上に達している。これも遺跡の分布と密接に関連している。

地下水に関しては、本遺跡周辺は季節的自噴地帯である。米光町地内においても「清水池」として伏流水が確保されている状況を見ることができる。

第2節 歴史的環境

手取川扇状地における開発の前につねに立ちはだかっていたのは、それを形成した手取川そのものである。「暴れ川」「荒廃河川」と呼ばれるこの川の存在により、扇状地は開発の遅延をよぎなくされた。前節でも述べたように扇央稜線の南は、近世に入って治水事業が進むまで、殆んど荒廃地の様相を呈していたといっても過言ではない。したがって、現在の寺井・辰口両町から松任市中心部の間は実に大きな生産の空白地域であった。

さて、如上の状況をふまえたうえで本遺跡周辺の歴史的環境を一瞥してみよう。第4図に示したように遺跡は少ない。このうち最も早く形成をみるものは本遺跡で、平安時代後期にまず占地する。これに続くものとして美川町の鹿島町遺跡があげられる。珠洲焼を出土している。石立町



第5図 米光萬福寺遺跡周辺の地形図

1/20,000

の立石群も中世にまでさかのぼりうる遺跡として著名である。笠間の賢徳寺跡と笠間兵衛家次館跡は『加賀志徴』に記載があるのみで、考古学的な実体は不明である。参考にとどめておきたい。

参考文献（五十音順）

浅香年木『古代地域史の研究』 法政大学出版局 1978 東京。

川北村史編さん委員会編『川北村史』 川北村役場 1970 石川県川北村。

手取川七ヶ用水史編纂委員会『手取川七ヶ用水史』上巻 手取川七ヶ用水土地改良区 1982 松任。

松任市史編さん委員会編『松任市史』現代編・上巻 松任市役所 1981 松任。

中井安治『笠間郷土史』 松任市笠間公民館 1986 松任。

第3章 遺構と遺物

第1節 概要

米光萬福寺遺跡は松任市米光町の北西約 600 m、美川町西米光町の北東約 300 m に位置している。付近の水田は明治末期から大正年間に行われた耕地整理により旧地形が明らかではないが、基本的に北西から北東方向にかけて地形が低くなっている。標高は約 8 m を前後する。

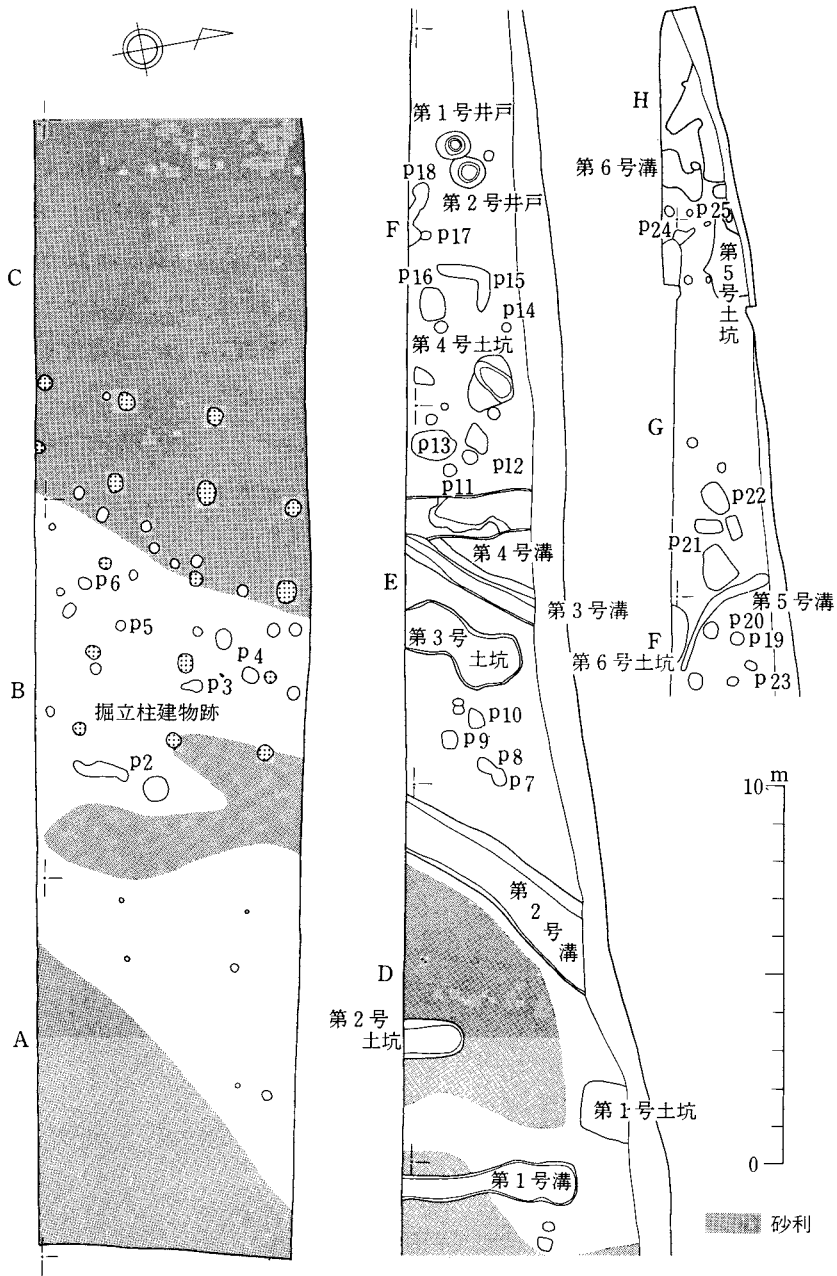
遺跡は堂尻川によってランドウ地区とテラノヤブ地区に分かれている。ランドウ地区は堂尻川の河道跡の北側に存在する微高地上に立地する。ランドウ地区の範囲は東西約 240 m、南北約 190 m の楕円形を呈している。今回の調査はその南側に位置し、対象面積は約 400 m²、調査面積は約 340 m² である。面積が減じたのは、市道部分が存在したのと、その下には日本電信電話株式会社の電話回線が設置されていたために対象とすることができなかったことによる。

調査区の割付は、第 6 図に示したように 10×10 m のグリッドとし、東西方向にアルファベット



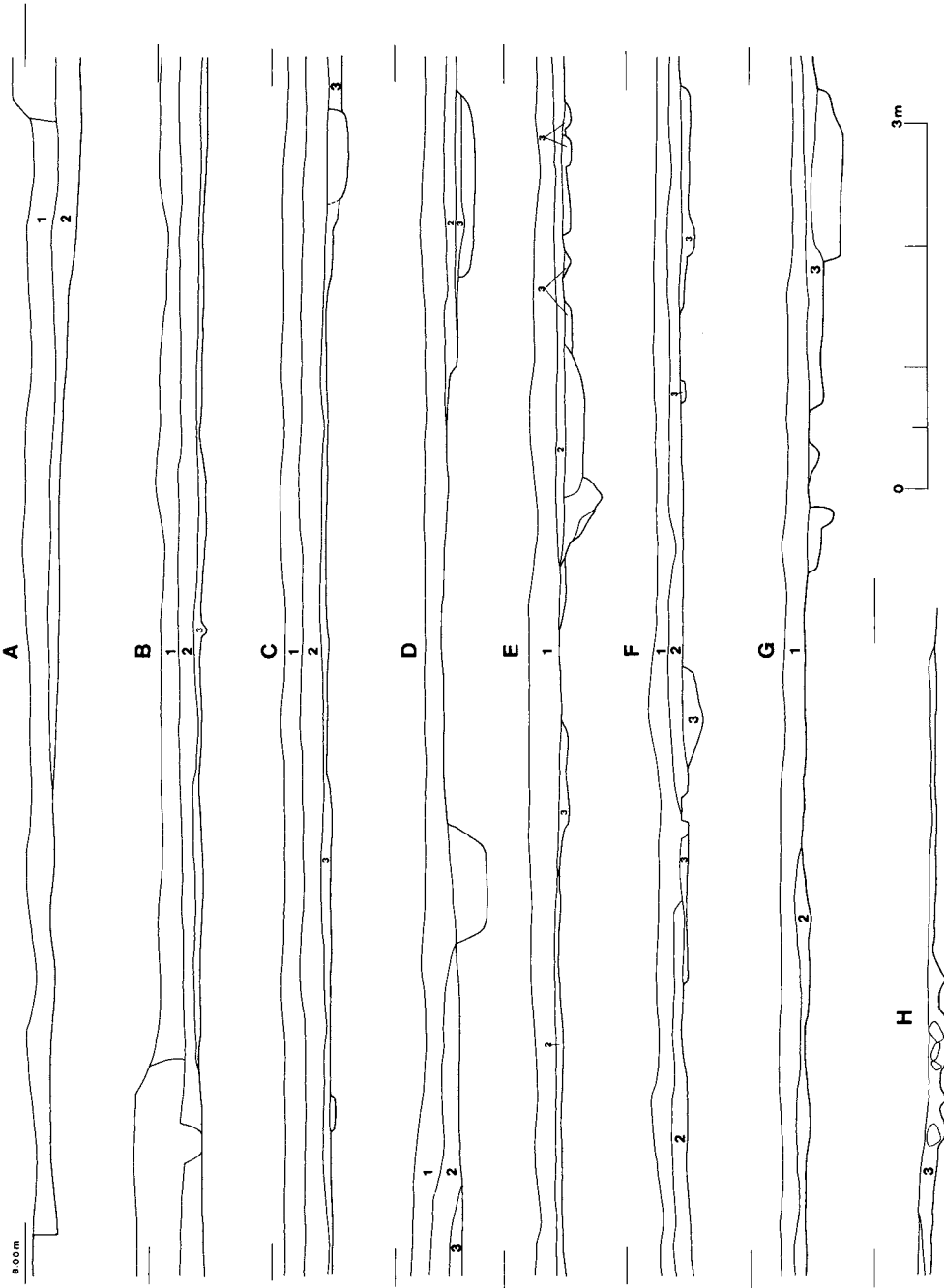
1/1,000

第 6 図 調査区割図



第7図 調査区全体図

1/200



第8図 調査区土層図

を付して呼称した。東西軸は市道のセンターラインに並行し、真北に対しては72度30分西にふれている。

つぎに遺構の分布および土層の概要について述べる。(第7・8図)田面より遺構面までの深さは約30~40cmを測り、遺構面の標高は全体的に7.5m前後である。

土層は大きく3層に分けられる：第1層は耕土層、第2層は灰色砂層、第3層は黒灰色土層(弱粘性)で包含層である。地山は灰白色砂層である。礫はA区東側は耕土直下に厚く堆積している。B~C区には遺構面で礫層がみられ、遺構が礫層を掘り込んでいるものもある。礫はA~D区に分布しており各々北北西方向に延びているものと思われ、これらは堂尻川の流路跡と思われる。包含層はB~C区・D区東隅に存在し、以西は散発的に存在する。

遺構は礫層が厚く堆積するA区東側以外の調査区で掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝状遺構、ピットを検出した。検出した遺構は上面が削平されたためか比較的浅いものが多い。調査区は遺跡の南東部隅に位置すること、また市道や近代の排水路等によって遺構が破壊されたところも多く、遺構全体を把握するには至っていない。

第2節 各 説

1 掘立柱建物跡

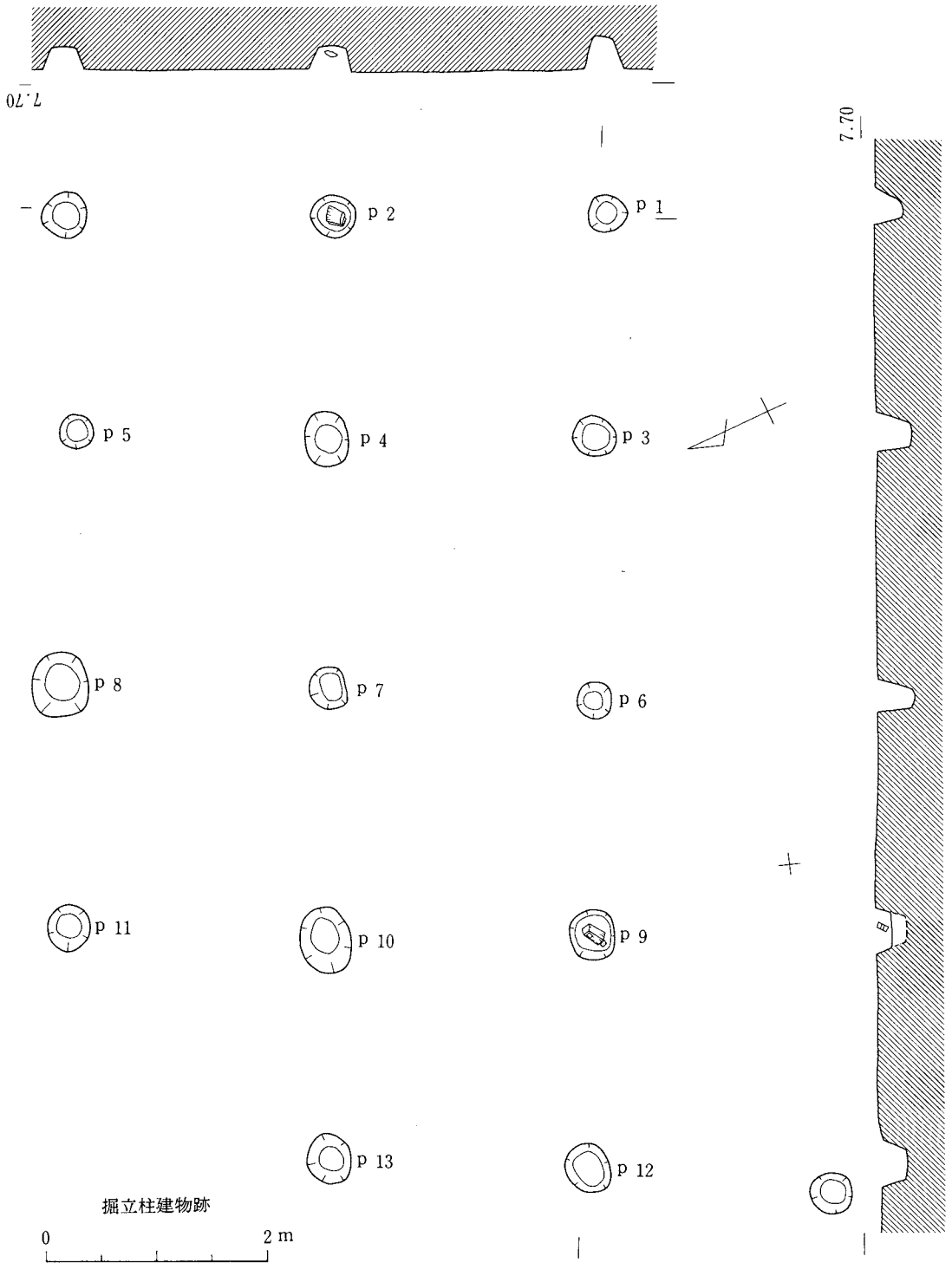
遺 構 (第9図、巻首図版第2、図版第6・第12)

B区~C区東半に位置する。東西4間(8.80m)×南北3間(7.10m)以上の総柱建物である。主軸方向は真北に対して64度西にふれている。柱間は桁行が2.20m、最東端は2.10mであり、梁行は2.30mを測る。柱穴掘方は径40~50cmのほぼ円形を呈するが、径60cmの楕円形を呈するものもある。検出面からの深さは25~35cmを測り、覆土は黒灰色である。P2、P9は礎板を持っており、建築部材が転用されたものである。

遺 物

土器質土器 (第12図1~3、図版第14)

出土したのは全て皿形態である。1はP13から出土しており、口径15.4cm、器高2.2cm、底部厚3mmを測る。底部・体部下半外面に指頭によるオサエが施されている。口縁部には強い横ナデが施され、口唇部は強く横ナデが施され、内面が上につまみあげられている。胎土には0.5mm前後の砂粒を多く含み、外面には気泡や接合痕が多く見られ、外面の調整は雑である。焼成は良く、色調は灰白色である。2はP1から出土しており、口径15.4cm、器高2.8cm、底部厚4mmを測る。底部と体部下半は指オサエで作られ、口縁部と口唇部には強い横ナデが施され、口唇部内面をつまみ上げている。胎土には0.5mm前後の砂粒を多く含み、気泡を少し含むが作りは丁寧である。焼成は良く、色調は灰白色である。3はP6から出土しており、口径13.6cm、現存高2.2cmを測る。体部下半は指オサエ、口縁部と口唇部には横ナデが施されているが、口唇部



第9図 遺構実測図(1)

内面のつまみ上げはあまり顕著でない。胎土には1mmの砂粒も含むが、0.5mm前後が多い。焼成は良く、内面下半には黒斑が見られる。色調は灰白色である。

1～3は法量、技法、胎土、色調などに共通性がみとめられ、同一時期であろう。その特徴から田嶋明人氏の編年試案のX₁期⁽¹⁾に該当し、所属時期は12世紀末～13世期に位置付けられよう。

礎板 (第12図21、図版第14)

21はP9から出土している。長さ16.2cm、最大幅9cm、厚さ5cmを測り、下部にはほぞ穴が穿たれている。ほぞ穴の表面には縦5.7cm、横5cm、裏面は縦5.5cm、横4.6cmを測り、表裏面とも図の下から上に向けて穿たれており、貫通した穴は縦2.7cm、横3.5cmを測る。裏面以外は全て面とりされている。上の木口面はノミ状の工具で、下の木口面は鋸で切断されている。木取りは板目材I⁽²⁾であり、針葉樹と思われる。もう一例(図版第14)はP2から出土しており、直径約14cmの丸木の一部で、芯の部分と半分を欠いている。長さは約13cmを測り、下の木口面は水平に切断されているが、上の木口面はノミ状の工具により乱雑に切断されている。広葉樹と思われる。

木製品 (図版第14)

P10から横櫛が出土している。現存値は長さ2.2cm、幅6.1cm、歯の長さ1.7cmを測る。厚さは0.78mmであり、歯は1cm間に16本存在する。木取りは木目が不明瞭なためにさだかではないが真征材と思われる。

2 井戸跡

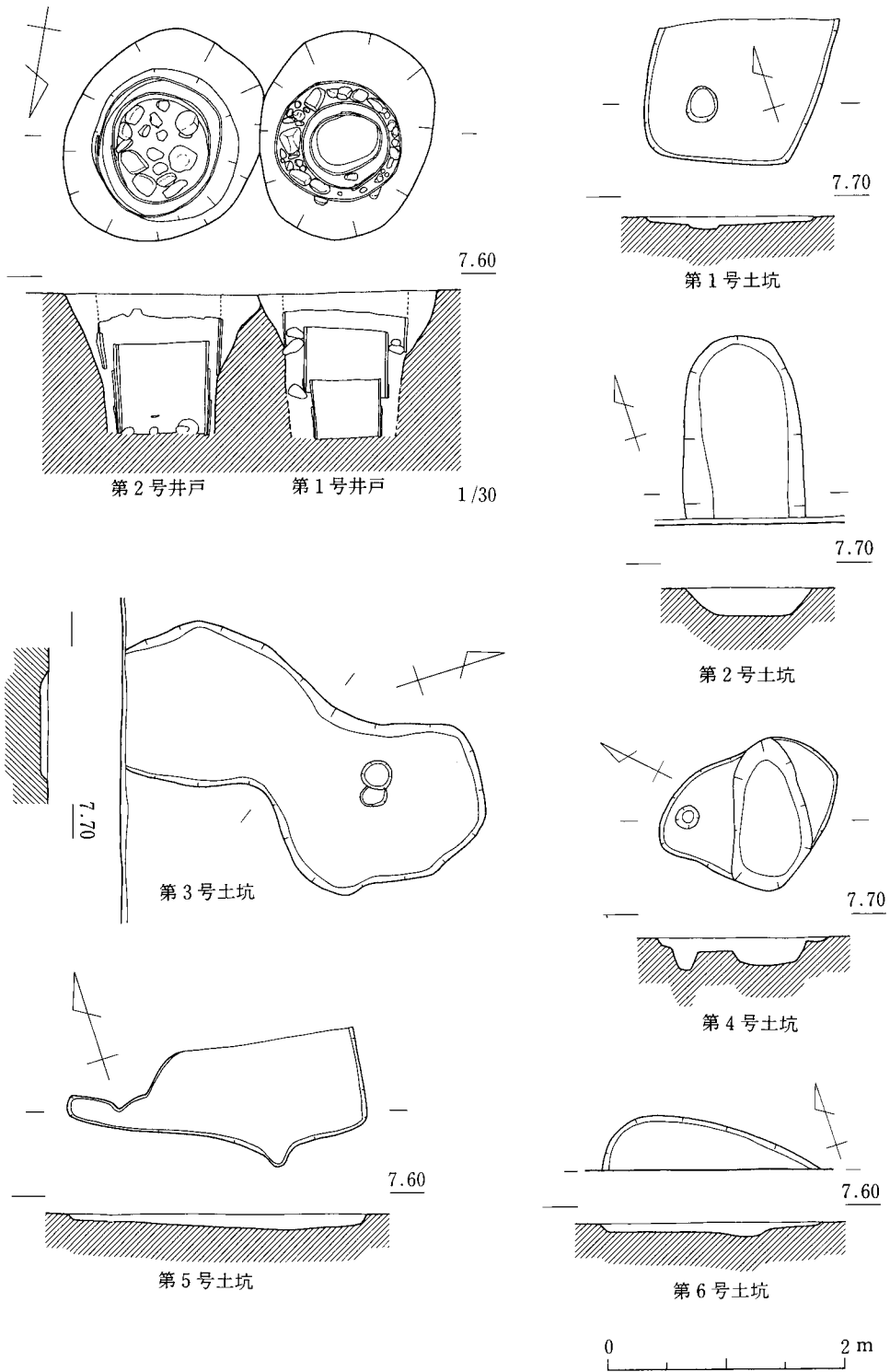
遺構 (第10図、巻首図版第2、図版第7・第8)

F区中央からやや西側に2基検出された。平面プランでの切り合い関係がつかめたために西側を第1号井戸、東側を第2号井戸と呼称したが、断面から判断すると第2号井戸を第1号井戸が切っており、第1号井戸の方が新しくなる。

第1号井戸の平面形は長径91cm、短径75cmの楕円形を呈し、検出面から65cmの深さを有する。検出面から20～30cmに段を有する。井戸側⁽³⁾は3段の曲物からなり、井戸掘方の段中央に内枠⁽⁴⁾を据え、内枠上端から5～10cm下の外側に10cm前後の石数個を配し、その上に中枠を据えている。中枠の上端10cm下で井戸掘方の段の所に外枠を据え、間に5cm～10cmの石を詰めている。発掘時の井戸側の長径×短径は外枠から54×50cm、37×36cm、32×28cmを測る。外枠は腐食が著しく上部を欠いており、取り上げの際に原形を留めなかった。

第2号井戸の平面形は長径94cm、短径81cmを測り、検出面から60cmの深さを有し、深さ15cmと35cmの所に段を有する。井戸側は2段の曲物であり、掘方との間隔を約5cm開けて内枠を据え、内枠上端から12～15cm下の段に外枠を据えている。井戸底には5cm大と10cm大の石が存在している。内枠内上部、内枠と外枠の間には井戸側が破片が投げ込まれており、曲物がもう1段存在したものと思われる。発掘時の井戸側の長径×短径は外枠58×51cm、内枠47×43cmを測る。

両井戸の覆土は井戸側内は黒褐色腐植土、掘方は灰黒色砂質土であり、井戸の底では灰青色砂層である。井戸の深さは60～65cmと比較的浅いが、遺跡の付近は湧水点が高く、8月上旬でも水



第10図 遺構実測図(2)

は枯れることはなかった。

第1号井戸と第2号井戸は規模、構造などの類似点が多いことや切り合い関係により、あまり時間差がないものと思われる。第2号井戸がなんらかの理由で石や外枠の破片などが投げ込まれて廃棄され、まもなく第1号井戸が構築されたものと思われる。

遺物

土師質土器（第12図4、図版第14）

4は第2号井戸底、礫直上から出土した皿である。口径11cm、現存高1.7cmを測る。器高の低いタイプのものである。底部外面と体部下半は指オサエがなされているが、底部のオサエが強いために器厚は一定ではない。口縁部と口唇部には強い横ナデが施され、口唇部内面をつまみ上げている。胎土は0.5mm前後の砂粒をごく少量含む。焼成はあまく、色調は灰白色である。

井戸側（第13図1～4、図版第15～第17）

1は第1号井戸内枠⁽⁴⁾である。釘結合曲物で上下に箍をはめる。底板は井戸側に転用されたために除去されている。箍は2段であり、上段と下段とも2列前上外下内3段後内1段綴じとじ⁽⁵⁾と2列内1段綴じである。側板の綴合せは1箇所、1列内5段綴じであり、内面に縦平行線のケビキをいれる。底板は厚さ約1cmと思われ、木釘は2本残っている。

2は第1号井戸中枠である。釘結合曲物で下縁に箍をもち、底板は除去されている。側板の上縁7cm間が少し荒れているので、側板上縁にも箍が存在した可能性がある。箍は2列前内3段後内1段綴じと1列内2段綴じである。側板の綴合せは一箇所、1列内7段綴じであり、内面に縦平行線のケビキをいれる。底板は厚さ約9mmと思われ、木釘穴は2個1対のものが多い。

3は第2号井戸内枠である。釘結合曲物で中程から下に2段の箍を持ち、底板は除去されている。箍は2段とも2列前上内下外4段後内2段綴じと1列内3段綴じである。側板の綴合せは1ヶ所で、2列前上内下外8段綴じであり、最下段を木釘で止めている。内面に縦平行線のケビキをいれる。側板と箍の間に箍と同じものを縦に入れ、相對する位置にもいれている。底板は厚さ約1.5cmと思われる。

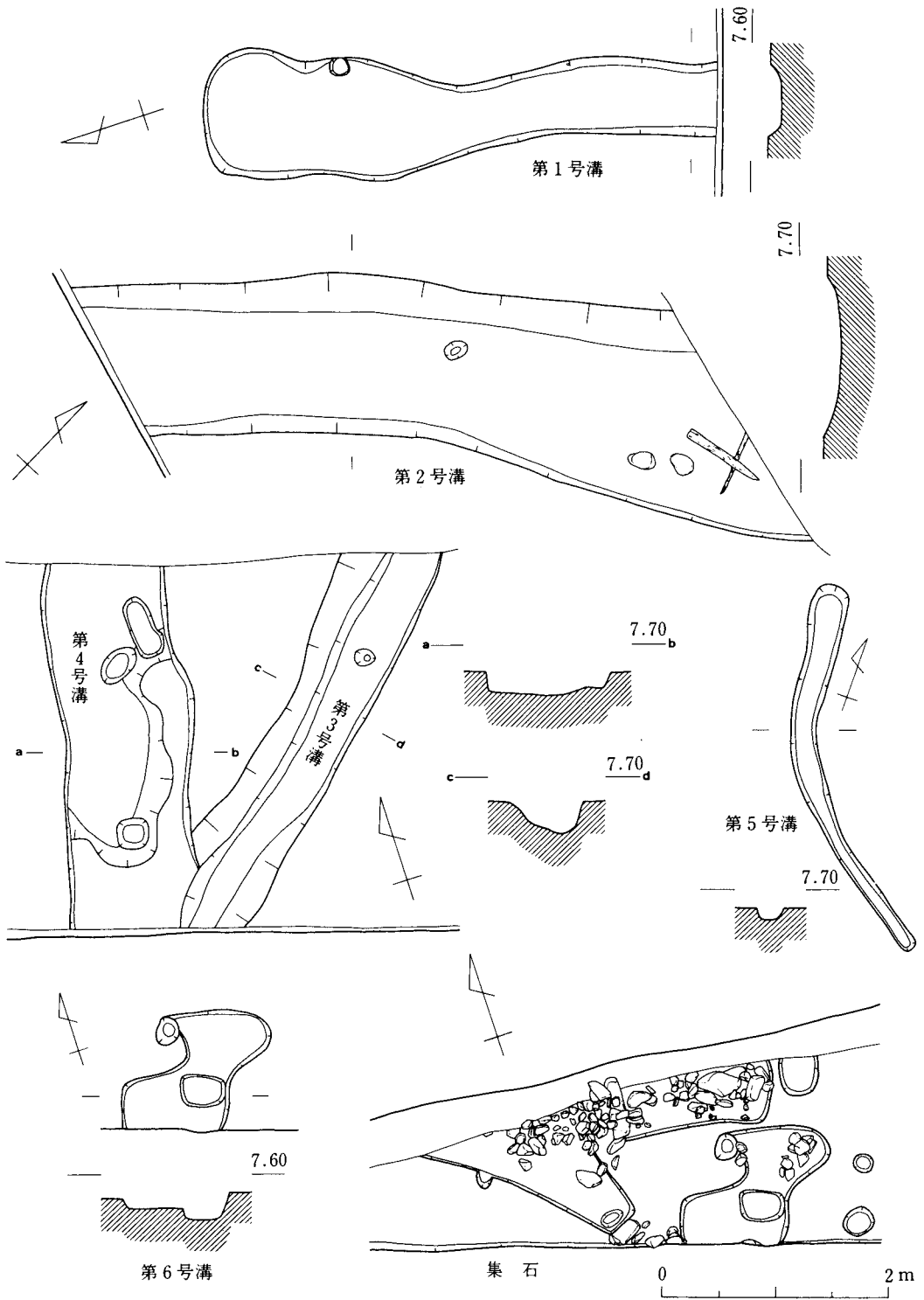
4は第2号井戸外枠である。上半が腐食して欠いているが釘結合曲物で下縁に箍を持ち、底板は除去されている。箍は2本を綴じて1本にしたものを内側にし、その外側を1本の箍で囲み、外側の綴合せは2列前内3段後内2段綴じと1列内2段綴じである。側板の綴合せは1ヶ所であり（1列上内）下外5（以上）段綴じであり、内面に縦平行線と斜平行線のケビキをいれる。底板の厚さは約1cmと思われる。

3 土坑・溝状遺構・ピット・集石

第1号土坑（第10図、図版第9）

D区北西に位置する。北側を攪乱により欠いているが、1.4以上×1.5mの隅田方形を呈する。深さ5～6cmの浅いものであり、中に長径30cm、深さ5cmのピットを持つ。

第2号土坑（第10図、図版第9）



第11図 遺構実測図(3)

D区南西に位置する。南側は調査区外に延びているために検出されなかったが、1.6×1 m、深さ30 cmを呈する。形状や深さから判断すると溝状遺構になる可能性が高い。覆土は濁灰色砂質土であり、粘性が少しあり、礫を含む。

出土遺物には土師質土器の皿（第12図5、図版第14）がある。口径約14 cm、現存高2.2 cmを測る。体部下半を指オサエを、口縁部と口唇部を強い横ナデを施している。口縁部内面のつまみあげはあまり顕著ではない。胎土には0.5～1 mm大の砂粒を多く含む。焼成は良いが、二次加熱を受けたためか、口縁部は剝離や荒れが目立つ。色調は灰白色である。口縁部の歪みが大きいために図示しなかったが、同じ技法でつくられた土器がもう1点出土している。

第3号土坑（第10図、図版第10）

E区中央に位置する不整形な瓢箪形をした土坑である。長さは3.4 m、幅は1.4 mであり、くびれた所で0.95 mを測る。深さは5～10 cmぐらいの浅いもので、底には直径約20 cmで深さ5～10 cmのピットが存在する。

第4号土坑（第10図、図版第10）

E～F区にかけて位置する。長径1.6 m、深さ5～10 cmの段を有し、長径1.3 m、短径0.7 mの不整形な楕円形を呈し、深さ25 cmを測る。覆土は黒灰色土である。出土遺物は石錘（第12図15、図版第14）がある。有頭石錘と呼ばれるものであり、頭部のみ存在する。現存値は長さ5.4 cm、幅5.2 cm、重量130 gである。頭部長3 cm、幅4.6 cmを測る。全面を敲打により、造り出している。石質は石英粗面岩である可能性が高い⁽⁶⁾。

第5号土坑（第10図、図版第11）

G～H区にかけて位置する。長径2.5 m、北側は攪乱を受けており短径（現存長）1 m、深さ15 cmを測る。覆土は黒褐色である。

第6号土坑（第10図）

F区南西隅に位置し、その大部分は南に広がっている。長径1.7 m、短径0.45 m以上を有し、深さ10 cmを測る。覆土は黒灰色土であるが、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には珠洲焼の破片があるが図化できなかった。

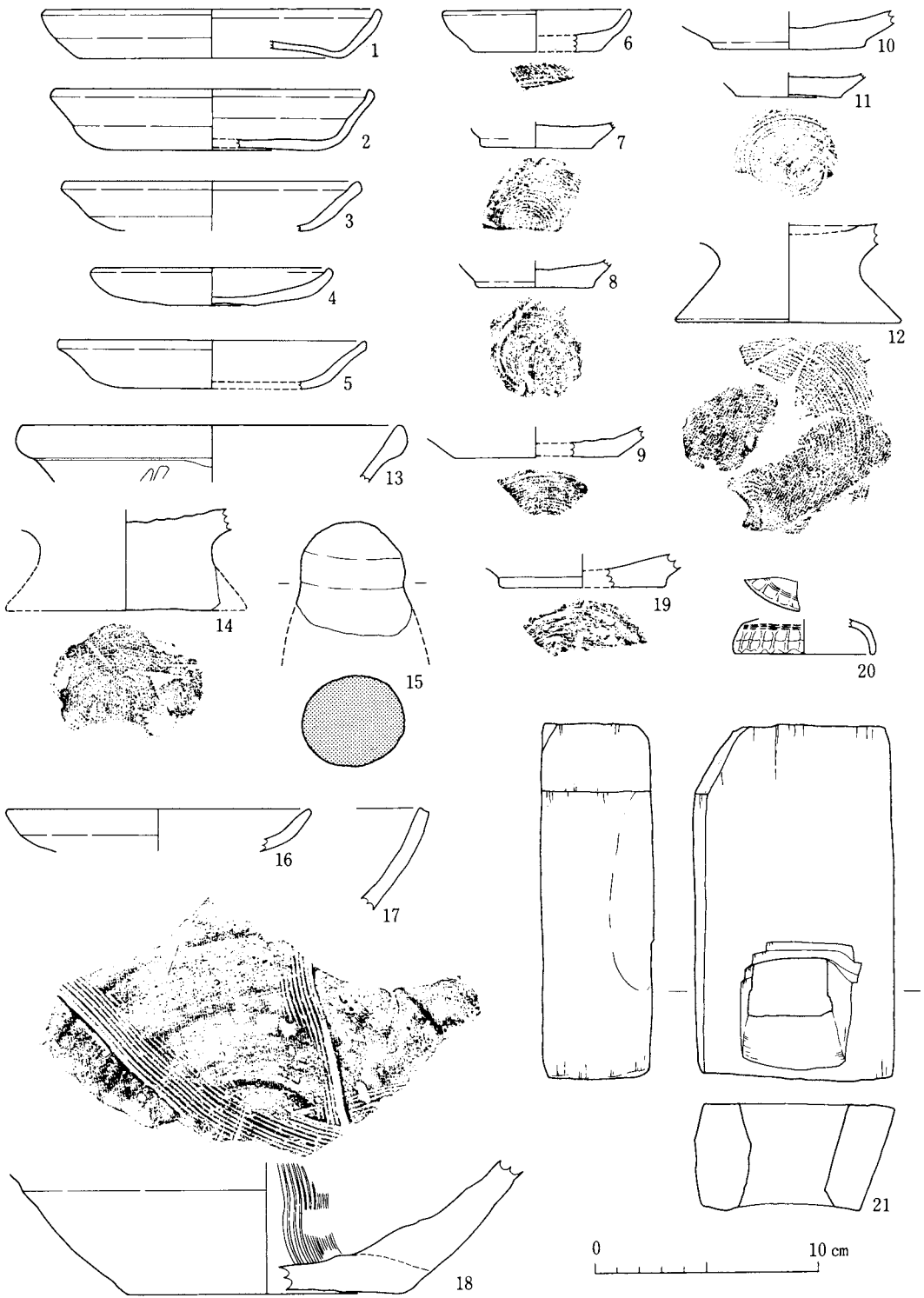
第1号溝（第11図、図版第9）

C～D区境にかけて位置する。南側は調査区外に延びているが、長さ2.4 m最大幅1.2 m最小幅0.6 mを測る。深さは5～10 cmの浅いものである。覆土は黒灰色土である。

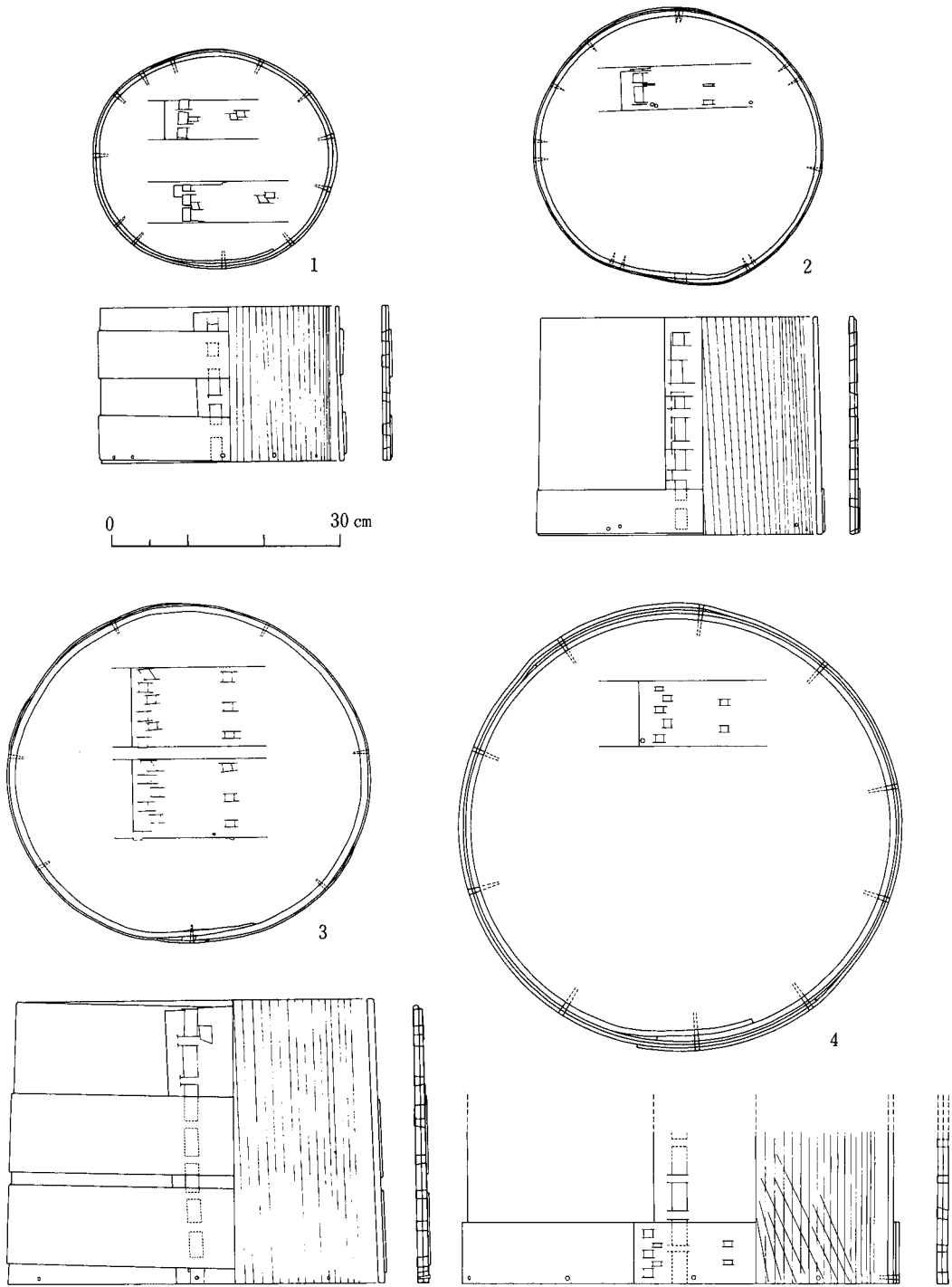
第2号溝（第11図、図版第9）

D区西半に位置する。ほぼ北北東に流れる溝である。長さ6 m以上、最大幅1.8 m、最小幅1.4 mを測り、深さ10～15 cmである。最北部には杭状の板材と石が存在した。

出土遺物には土師質土器の皿と燈明台（第12図6～12、図版第14）と漆器椀（図版第14）がある。6は口径約8.5 cm、底径5.9 cm、器高1.9 cmを測る。底部の厚さは7～8 mmあり、回転糸切り手法により作り出されており、口縁部は横ナデが施され体部下半はやや凹んでいる。胎土は0.5 mm前後の砂粒を少量含み、気泡がやや目立つ。焼成は良く、色調は灰白色である。7は底径5 cm、



第12図 遺構出土遺物実測図



第 13 图 井戸枠実測图

第2表 井戸側曲物法量一覧

部分 井戸番号	径	高さ	側板		ケビキ	樺皮紐		釘穴	箍の幅	箍の厚さ	箍の長さ
			長さ	厚さ	幅	幅	厚さ				
第1号井戸内枠	31.1×29 ^{cm}	20.2 ^{cm}	104.5 ^{cm}	5~7 ^{mm}	5~11 ^{mm}	15 ^{mm}	0.5 ^{mm}	12 ^個	(上)6.1 ^{mm} (下)6.1 ^{mm}	(上)4 ^{mm} (下)4 ^{mm}	(上)112 ^{cm} (下)115 ^{cm}
第1号井戸中枠	37×36	28.5	126.5	6~7	3~13	14~17	0.5	13	5.8	2.5	139
第2号井戸内枠	49×43.5	37.3	154	9	10~15	18	0.5	7	(上)10.5 (下)10.5	(上)3 (下)3	(上)162 (下)162
第2号井戸外枠	56	(20)	189	7	10~15	20	0.5	10	8	(内)3 (外)5	(内)201 (外)204

厚さ1cmを測る。胎土は0.5mmの砂粒を少量と気泡をやや多く含む。焼成は良いが表面が少し荒れている。色調は外面が淡黄色、内面は灰白色である。8は底径約5.4cm、厚さ1cmを測る。底部は回転糸切り手法によるが、やや歪んでいる。胎土は0.5mmの砂粒を少量含む。9は底径約7.4cm、厚さ6~9mmを測る。底部は回転糸切り手法による。胎土は0.5~1mm前後の砂粒と気泡をやや多く含む。焼成はややあまく、色調は外面淡橙色、内面薄灰色である。なお、内面黒色土器の可能性はある。10は底径6.8cm、厚さ1cmを測る。底部は摩滅しているが、回転糸切り手法による。胎土は0.5~1mmの砂粒を気泡をやや多く含む。焼成はあまく、色調はにぶい橙色である。11は底径4.7cm、厚さ9mmを測る。底部は回転糸切り手法によるが、やや歪んでいる。胎土は0.5mm前後の砂粒と気泡を少量含む。焼成は非常に良く、色調は灰白色である。12は台部径約11cm、基部径7.8cm、台高4cmを測る燈明台である。台部は回転糸切り手法による。胎土は0.5~1mm前後の砂粒を多く含む。焼成は良く、色調は灰白色である。6~12ともロクロ土師器である。

漆器碗は横木取りであり、体部厚6mm、口縁部から下15mmの所で厚さを減じ始め、口縁部厚は3mmであり、口唇部は丸くおさめている。内外面に黒漆が均一に塗られている。

第3号溝（第11図、図版第10）

E区中央に位置する。ほぼ北北東に走る溝である。長さ4m以上、幅0.7~0.84m、深さ20~30cmを測る。北側は近世の排水溝で、南側は第4号溝で切られている。覆土は黒灰色砂質土であり、炭化物・黄色土ブロックを含む。

出土遺物は白磁碗と燈明台（第12図13・14、図版第14）がある。13は口径17.4cmを測り、白磁碗の分類ではIV類⁽⁷⁾にあたり、12世紀代に位置づけられよう。玉縁の下端には折り返しがみられる。胎土は灰白色で、黒い砂粒が入っており、気泡を多く含む。釉はオリーブ灰色である。14は台部径約10cm、基部径6.3cm、台高約4cmを測る。台部は回転糸切り手法により、他はロクロによる横ナデにより作り出されている。胎土は0.5~1cm大の砂粒をやや多く含む、気泡は1mm大のものが多い。焼成は良く、色調は灰白色である。燈明台は田嶋明人の編年試案によると11世紀後半ないし末から出現するようであるが、台部が大きく開いているのはやや後出の感があり、12世

紀以降に位置づけられよう。これは白磁碗の年代とも一致する。

第4号溝（第11図、図版第10）

E区中央に位置する。主軸を少し東にふるが、ほぼ南北に走る溝である。長さ3 m以上、幅1.1 m、深さ10~15 cmを測る。南側では第3号溝を切っており、南側と東側に深さ10 cmの段を有し、底には深さ10~15 cmのピットを持つ。覆土は暗灰色砂質土である。

出土遺物は土師質土器の皿と珠洲焼の片口鉢（第12図16・17、図版第14）がある。16は口径13.8 cm、体部はナデ、口縁部は横ナデが施こされており、口唇部は丸くおさめてある。胎土は0.5 mmの砂粒と気泡を少量含み、焼成は良い。色調は外面灰黄褐色、内面は浅黄橙色である。17は口径を復元しえないが、吉岡康暢氏の珠洲焼編年⁹⁾の第I期に該当するものと思われる。

第5号溝（第11図）

F~G区にかけて位置する。北側を近代の排水溝で切られているが、長さ3.5 m、幅14~30 cm、深さ10~15 cmを測る弧状の溝である。覆土は黒灰色砂質土である。

第6号溝（第11図）

H区東半に位置する。長さ1.1 m以上、幅0.4~0.9 m、深さ15 cmを測る不整形な溝である。覆土は黒灰色砂質土である。東隅には10 cm大の石が投げ込まれている。出土遺物は珠洲焼の片口鉢（第12図18、図版第14）がある。底径12.6 cm、おろし目は1.9 cmの間に9本の歯が入っている。底部はへら状の工具と指でなでられている。内面の底部から体部に移行する所までは長く使用されたためか、非常になめらかになっている。胎土は砂粒と気泡を多く含み、なかには5 mm大の石も含む。これは吉岡康暢氏の珠洲焼編年の第II期に該当するものと思われる。

ピット

ピットはB~C区にある掘立柱建物跡付近とE~G区にかけて存在する。B~C区のピットは直径約30~40 cmの円形、深さ約10~15 cmのものが多く、出土遺物は殆どない。E~G区にかけてはやや不整形なものも多く、遺物をもつものも多いが図化できるものは少ない。

P 13はE区西側に位置し、第4号溝とF区の間が存在する。長径1.3 m、短径0.8 mの楕円形を呈する。

出土遺物は土師質土器（第12図19、図版第14）がある。底径7.4 cm、厚さ9 mmを測る。底部は回転糸切り手法、体部はナデにより造り出されている。胎土は0.5 mmの砂粒を少量含み、気泡はやや多い。焼成は良く、色調は灰白色である。

P 18はF区井戸跡の南側に位置する。

出土遺物は青白磁の平型合子（第12図20、図版第14）がある。口縁部から6 mmの所で段を持ち、菊座は一つの幅6 mmであり、上から3 mmまでに三つの段を有す。胎土は白色であり、黒い砂粒を多く含む。釉は明青灰色であり、気泡は多い。年代は12世紀に位置づけられよう⁹⁾。

P 21（図版第12）はG区東側に位置し、長径0.74 m、短径0.2 mを測り、不整形な方形を呈する。深さは20 cm、30 cmの2段掘りになっている。1段目には直径14 cmの柱根が10 cm地山にくいこんで検出された。

P 22(図版第 12)は G 区東側で P 21 の西横に位置する。長径 0.88 m、短径 0.6 m を測り、深さ 15 cm と 30 cm の 2 段掘りになっている。1 段目には長さ 35 cm、現存幅 15 cm の材が検出された。長さ 6 cm、幅 6 cm 以上のほぞ穴が開いていたものと思われ、礎板として転用されたものと思われる。P 21 と P 22 はともに柱穴の可能性が高く、付近に掘立柱建物が存在するものと思われる。

集 石 (第 11 図、図版第 11)

H 区に位置する性格不明の遺構である。深さ約 10 cm の土坑状の落ち込みに 5 cm 大から 40 cm 大の石が多数集まっていた。遺物は出土は認められなかった。

4 包含層出土遺物 (第 14・15・16 図、図版第 18・第 19)

包含層からは土師器、須恵器、中国製磁器、国産陶器、土師質土器、土製品、木製品、石製品が出土している。中国製磁器には青磁、白磁、青白磁、国産陶器には須恵器系の珠洲焼と瓷器系の越前焼と思われるものがある。土製品は土錘、木製品は箸など、石製品には石鍋、砥石がある。

土師器 (第 14 図 1～3)

1 は鍋である。外面に煤の付着が見られる。口径 29.6 cm を測る。2 は厚手の底部をもつ椀で、底径 5.5 cm を測る。3 は底径 7 cm を測る椀である。

須恵器 (第 14 図 4・5)

4 は壺の底部である。底径 14.6 cm を測る。5 は甕の胴部と思われる。内面には同心円状の叩き目を有する。

青 磁 (第 14 図 6～8)

6 は龍泉窯系の劃花文碗である。内面に草花文が描かれている。灰オリーブ色の釉がかかり、口径 16.5 cm を測る。7 は碗で内底面に円圏がみられるが、印花は認められず、外底面のケズリの粗さより同安窯系の製品と考えられる。底径 5.2 cm を測る。8 も同安窯系の製品である。明青灰色の釉がかかるが、外底面は無釉である。底径 5.6 cm を測る。6 は 12 世紀後半から 13 世紀前半、7 は 12 世紀前半から中頃、8 は 12 世紀後半から 13 世紀前半にかけての所産と考えておきたい。

青白磁 (第 14 図 11)

平型合子の蓋である。精良な胎土で焼成も堅緻である。明青白色の釉が施されているが、口縁部内面と口端部外面は無釉である。天井部には双鳳文が浮き出されている。口径 9.4 cm を測る。12 世紀後半から 13 世紀前半にかけての所産としておきたい。

珠洲焼 (第 15 図 29～37)

29～32 は片口鉢である。29 は口径 30 cm、30 は口径 31.5 cm を測る。ともに口縁端部を薄く仕上げ、面をつくる。30 は外面に煤状の炭化物が見られる。31 の口縁端部には波状文が施されている。32 は 10～12 条の単位をもつ櫛目が見られる。33・34・36・37 は甕である。33 の外面の条線タタキは細かく、3 cm の幅で 12 条を数える。36・37 の外面のタタキは、それぞれ 3 cm に 9 条、12 条を数える。35 は壺の底部であり、底径 12.8 cm を測る。これらの珠洲焼のうち、29～31、33・37 は 12 世紀後半と考えられている吉岡康暢氏編年⁽¹⁰⁾の I 期に該当し、他については後出的な様相を窺

うことができる。

珠洲焼の他に無釉系の陶器が1点ある。(第15図38)甕の口縁部で越前焼の可能性を指摘しておきたい。

瀬戸・美濃焼(第14図12)天目茶碗である。内外面ともに鉄釉が施されているが、外面の体部下半には鉄化粧は見られない。

土師質土器(第14図13~23)

すべて手づくねによる皿である。法量よりみると口径8cm前後のもの、10cm前後のもの、そして13cm前後のものに分けられる。最も小さい14は7.7cm、最大の17が14.4cmを測る。13は底部を平らにつくっている。14~16は体部に強い横ナデが見られる。16の底部には指によるオサエのあとが見られる。19は口縁端部をかるくつまみあげる。燈芯油痕が内面にのこる。20は口縁部近くに強い横ナデを施している。22は最も厚手である。時期的には個々にいく分かの差異を認めることができる。最も古相を示すのは19である。田嶋明人氏の編年案⁽¹¹⁾の3段階の新相に類品を認めることができ、13世紀前半代の所産として捉えておきたい。これにつづくものが、13・20・23などである。新相を示すものとして14や16があり15~16世紀代のものと考えたい。

土製品(第14図28)

単孔の管状土錘である。現存長4.2cm、最大胴径1.6cm、孔径4mm、重さ9.65gを測る。

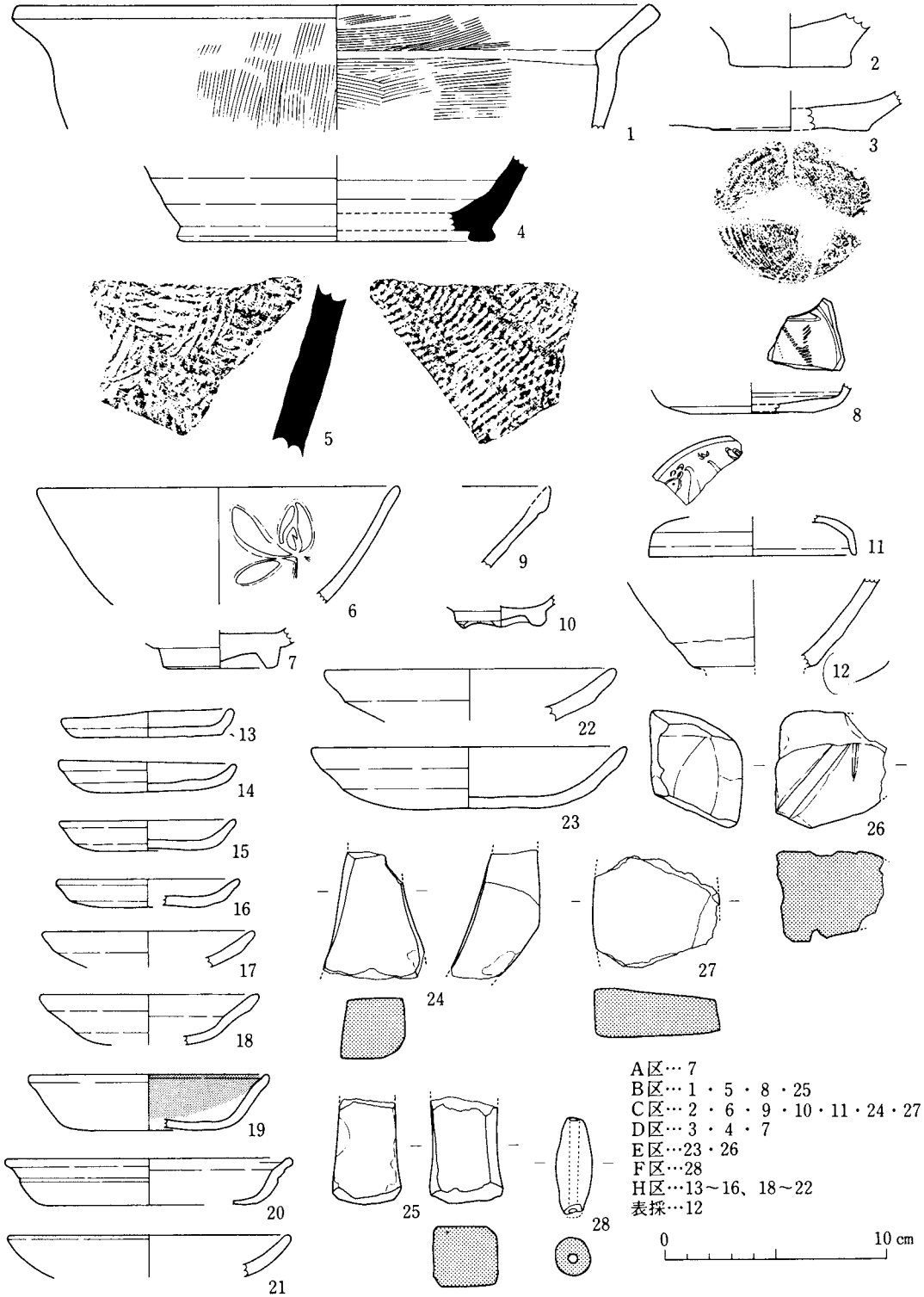
木製品(第16図)

粗く削った棒状の製品が多い。1は最も長く38.2cmを測る。9は箸と考えるのが妥当であろう。長さ22.6cm、最大幅0.6cm、厚さ0.4cmで、ていねいに削り出されている。中央部が太く、両端が細い。その他のものは18を除いて似たような形状を示している。外見的な観察では、端部が炭化したものと炭化の見られないものに分けられるが、本来的には用途を同じくするものと考えられる。炭化したものは焚付用と考えることが可能であるが、その部分が先端のごく一部に限られ、しかも両端にその痕跡の見られるものがあることにより、複次にわたって使用された可能性が考えられる。断面は粗い方形に仕上げたものが多い。この種の棒状木製品のなかには明らかに箸と考えられるものと、本遺跡に多い粗い削りの棒状製品の二者が見られる。用途については、出土状態ともあわせて検討を重ねる必要がある。

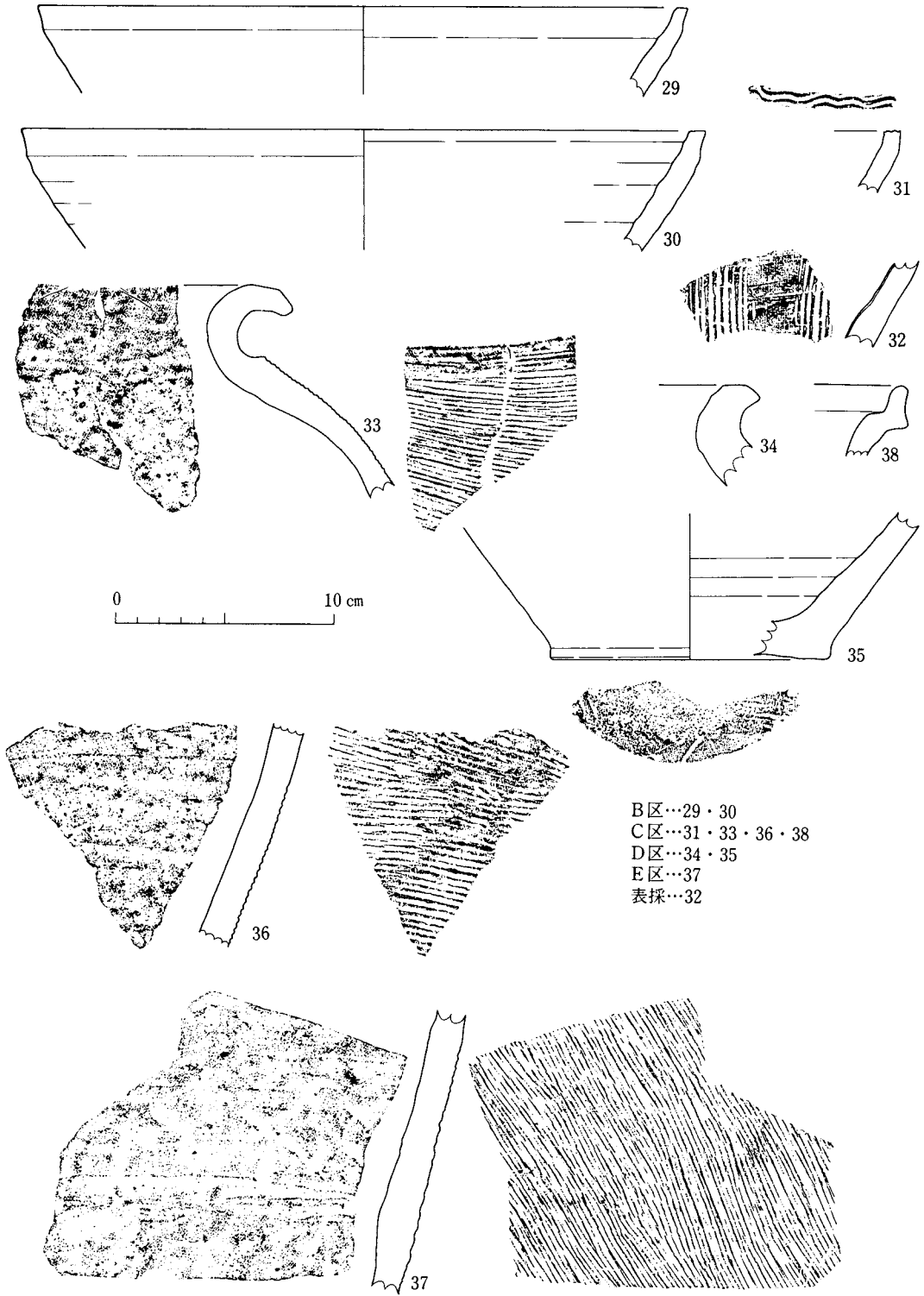
石製品(第16図24~27)

小片のため図化しえなかったが、図版第19に示したのは滑石製の石鍋である。C区より出土したもので、内面の一部のみ旧状を保っている。黒灰色を呈する。石川県は滑石製石鍋の出土地としては日本海側の北限である⁽¹²⁾。垣内光次郎氏のご教示によると羽咋市寺家遺跡、金沢市善正寺遺跡、同桂遺跡、小松市白江梯川遺跡、加賀市勅使館跡で出土が認められているという。白江梯川遺跡と勅使館跡以外は、本遺跡を含めて海に近く立地するのは、石鍋の流通が海運を抜きにして語れないことを示している。

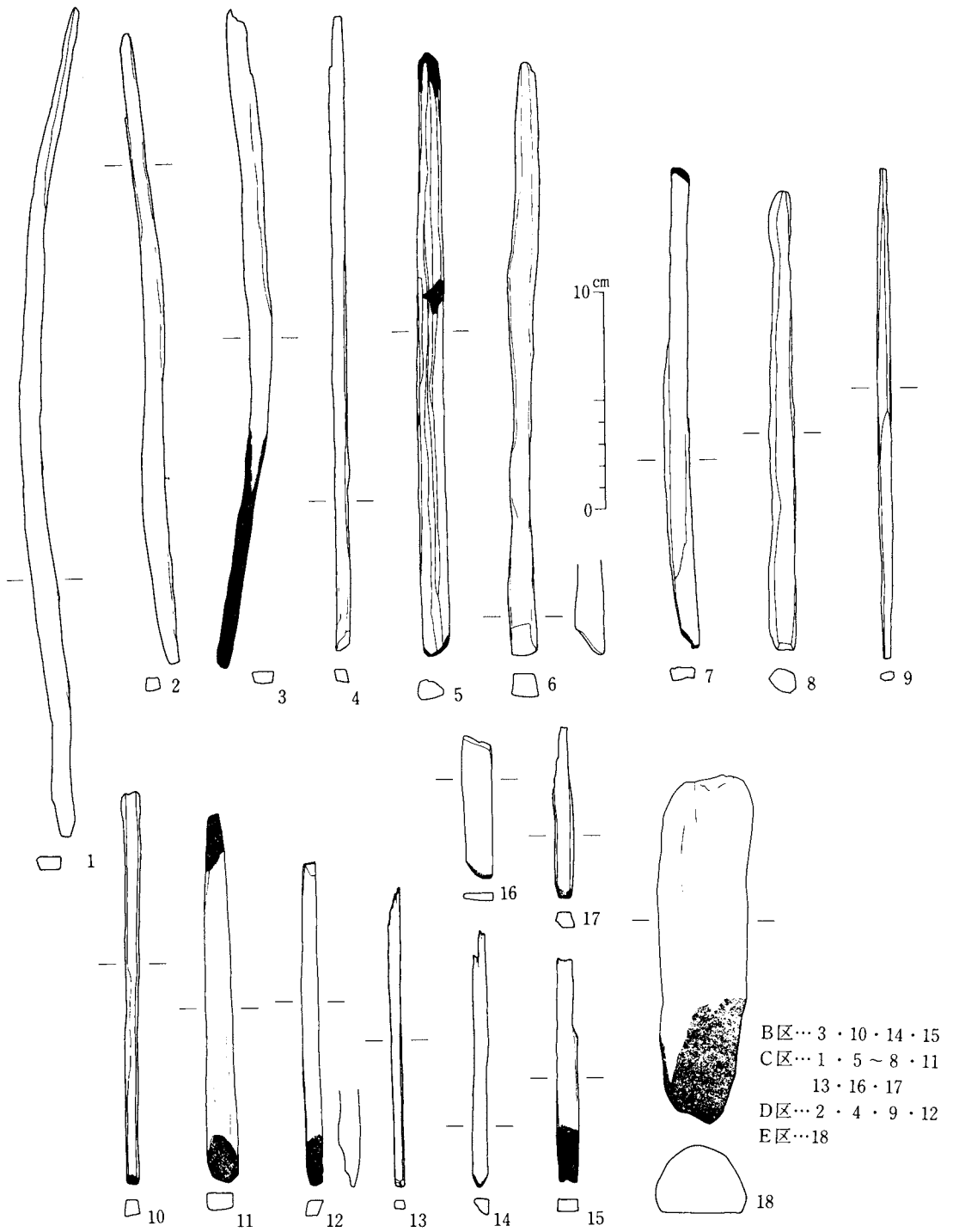
24~27は砥石である。完形品はない。24は端部がバチ状に広がる。四面とも使用しており平滑である。最大幅は4.6cm、最も厚いところで3cmを測る。25は方柱状を呈し、四隅を面取りして



第14図 包含層出土遺物実測図(1)



第 15 图 包含層出土遺物実測図(2)



第16図 包含層出土遺物実測図(3)

いる。3.3×3.2 cm。26は不整な形状を呈し、石材は軟質である。一つの面に幅7 mmの溝が見られる。断面は5×4.1 cmを測る。27はやや薄手で幅5.5 cm、厚さ2.2 cmを測る。

5 テラノヤブ地区採集遺物（第17・18・19図、図版第20・第21）

本資料は昭和59年7月に米光町在住の郷土史研究家室野清氏が採集されたものである。発見および採集の経緯については、本書の付章において同氏が述べられているので、詳細はそれによらねたい。不時発見のため正確な記録は残せなかったが、室野氏の情熱と炯眼によって世に出た本資料は、今後とも、遺跡の性格を考えるうえで欠かせないものといえる。

遺物には、中国製磁器、国産陶器、土師質土器、瓦質土器、石製品がある。中国製磁器は青磁である。国産の無釉陶器には須恵器系の珠洲焼、瓷器系の加賀焼、越前焼がある。また、施釉陶器はすべて瀬戸・美濃焼である。石製品には石硯と石鉢がある。

青磁（第17図1～4）

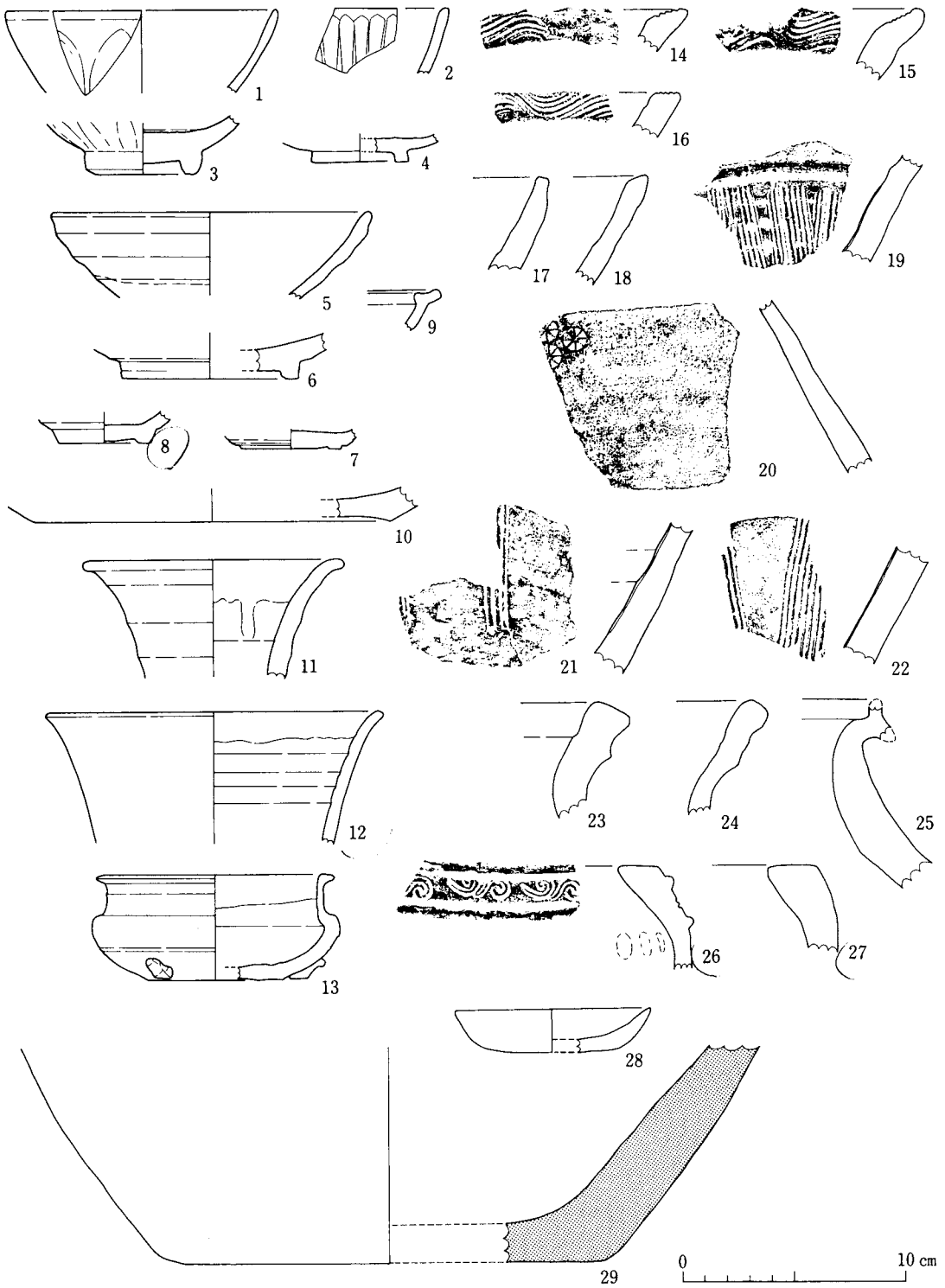
1～3は碗である。1は釉が薄緑色を呈し、口径12.4 cmを測る。2は細蓮弁文を描いており、その頂部は圭頭状を呈している。薄緑色の釉が見られる。3も同じく蓮弁文を描出しており、釉は高台畳付の中ほどまで見られる。高台畳付中ほどから内底面にかけては、釉をかきとった状況が窺える。内底面には半径2.5 cmの円圏が見られる。素地は赤橙色を呈し、釉は薄い青緑色である。底径5.2 cmを測る。4は香炉である。素地は灰白色を呈している。釉は高台にまで及んでいない。底径4.4 cmを測る。1・3は鎬蓮弁文の最終段階のものとして捉えることが可能で、14世紀代の所産としたい。4も同時期のものと考えたい。2は15～16世紀代の所産と思われる。

瀬戸・美濃焼（第17図5～13）

5～7は平碗である。5は精良な胎土で焼成も良い。薄い黄緑色の釉が施されている。口径14.8 cmを測る。6は底径8 cmを測る。7は高台が低く、外底面には糸切り痕が見られる。底径4.6 cmを測る。8は天目茶碗である。内面には黒色の釉が見られる。底径4.2 cmを測る。9・10は盤である。9には薄緑色の釉がかかる。10は釉が見られず、底径16.4 cmを測る。11・12は花瓶である。ともに胴部以下を欠失するが、台脚付のものとなろう。11は胎土・焼成ともに良く、黄オリーブ色の釉が外面の全体と内面の上半にかかる。口径11.8 cmを測る。12も胎土・焼成ともに良い。釉は外面と内面の口縁部上半に見られる。口径15.4 cmを測る。13は香炉である。精良な胎土で焼成も良い。釉は薄緑色で、外面の体部中ほどから内面の口縁部にかけて見られる。体部下半に付された三つの足は底面より高く、退化した形状を見せる。外底面には糸切り痕が見られる。口径10.8 cm、胴部最大径11.4 cm、底径6.2 cmを測る。香炉は他にも1点出土しているが、足の小片のため図示できない。花瓶はともに14世紀末から15世紀初頭にかかる時期と考えたい。香炉は15世紀代のものと考えておきたい。

珠洲焼（第17図14～19）

いずれも片口鉢であるが、小片のため復元できるものはない。14～16の口縁部には櫛描の波状文が見られる。19の櫛目は10条を単位としている。時期は17を吉岡康暢氏編年のI期、他をIV



第17図 テラノヤブ地区採集遺物実測図

期～VI期の所産と考えたい。

加賀焼 (第17図25)

甕の口縁部であるが、小片のため口径は不詳である。胎土は2～3mm大の砂粒を含み、焼成は良い。淡い茶褐色を呈する。13世紀後半の時期と考えたい。

越前焼 (第17図20～24)

21・22は片口鉢である。22の櫛目は7条以上を単位とするが、21は4条と粗い。21の胎土には砂粒が目立つ。20・23・24は甕である。20は肩部で、菊花文が退化したと思われる押印が3個ひとまとまりに見られる。23・24の胎土はいずれも砂粒が目立つ。23・24は15世紀代の所産、20はやや古相を示すと考えたい。

瓦質土器 (第17図26・27)

ともに円火鉢である。26には2条の突帯が見られ、その間に渦巻状の押印が2個1対をなして等間隔に施されている。焼成は堅緻で、黒灰色を呈する。27は焼成良く橙色を呈する。ともに15～16世紀の時期と考えられる。

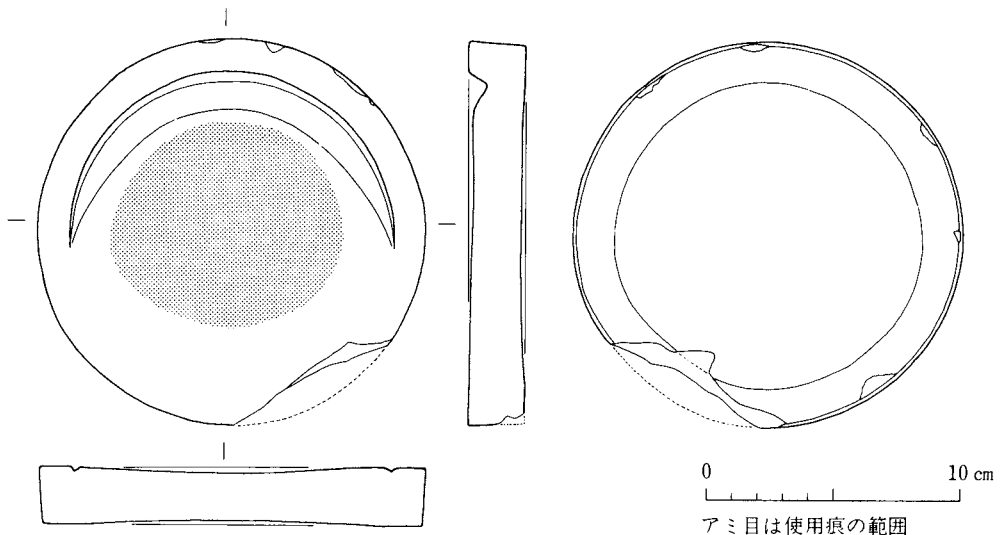
土師質土器 (第17図28)

口径9cmを測る皿である。白桃色を呈し焼成はあまい。

石製品 (第17図29、第18・19図)

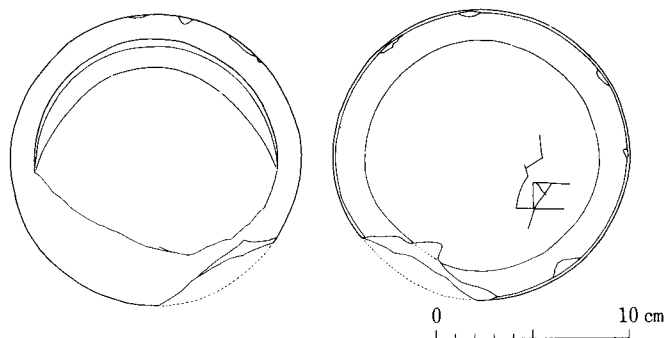
第17図29は石鉢である。凝灰岩製の軟質の石を削り抜いたものである。内面には使用痕が見られる。外底面は平らで、底径20cmを測る。器壁の厚さは最大で3cmを測る。

第18・19図に示したのは石硯である。平面形は正円を呈し、上半部に縁帯をつくる。径15.3cm、厚さ2.3cm、縁帯の幅1.05cmを測る。海部の幅は硯頭部で1.5cm、深さは0.7cmを測る。陸部で



第18図 テラノヤブ地区採集石硯実測図

は使用痕が円形に見られ、その凹みは2mm前後である。かなり使用された形跡が窺える。第19図に示したのは硯面および底面に見られる線刻である。ともに、針状の工具を使用したと思われる細い線よりなる。硯面のは海部の端と端をつないだものである。底面では右下に意味不明のものが見られる。硯の使用者に



第19図 石硯の線刻 1/4

よって刻まれた線と考えるのが妥当であろう。色は黒色で、石質は黒色粘板岩である。重さは990gを測る。産地については松本義博氏より中国の歙州石の可能性が高いとのご教示を得ている。

石製の円硯の出土例は、水野和雄氏の研究⁽¹³⁾によると、福岡県大宰府鴻臚館跡、福井県朝倉氏館跡で見られるという。同氏の型式分類にはめると、本資料は、側面が傾斜し、裏面が平坦であるI Acタイプに属し、大宰府鴻臚館出土のものと同じ型式となる。鴻臚館の資料は、裏面にある刻銘より、中国製ではないかと考えられている。その銘文については、935年頃のものとする見方がある。水野和雄氏はI Acタイプの下限を12世紀前半頃まで下げることが可能であると考えられている。本資料の年代についても、採集品であるため明確な決定材料はない。テラノヤブ地区の土器の時期をみると、14～16世紀と考えられるものが多い。しかしながら、石硯の変遷をみると同時期の形状は台形ないし長方形が主体的である。そして、ランドウ地区の土器をみると11～13世紀代のもが多く、その中心は12世紀代である。本資料については、その形状よりランドウ地区と並行する時期と考えたほうが妥当性を帯びるように思われる。

第3節 調査の成果と課題

1 掘立柱建物跡

当遺跡の掘立柱建物（以下、建物と呼称する）は4間×3間以上の総柱の建物である。梁行ないし桁行が3間以上になる可能性がある中世の総柱の建物で報告されている例は石川県内では鳳至郡穴水町西川島遺跡群の10例⁽¹⁴⁾、鹿島郡中島町外遺跡の1例⁽¹⁵⁾、羽咋市気多社僧坊跡群の5例⁽¹⁶⁾、寺家遺跡の21例⁽¹⁷⁾、能美郡辰口町辰口西部遺跡群⁽¹⁸⁾、小松市佐々木ノテウラ遺跡の3例⁽¹⁹⁾、漆町遺跡の5例⁽²⁰⁾、加賀市勅使館跡11例⁽²¹⁾、三木だいまん遺跡の3例⁽²²⁾、永町ガマノマガリ遺跡の5例⁽²³⁾、大島遺跡の1例⁽²⁴⁾、田尻シンペイダン遺跡の3例⁽²⁵⁾などがある。

西川島遺跡群は崇徳院御影堂領大屋庄内穴水保にあたり、大型建物は開発領主の居住地ないし荘園管理事務所と想定されている。気多社僧坊は気多神宮寺の社僧坊、寺家遺跡は気多大社の社家と想定されている。辰口西部遺跡群は東大寺幡生庄の一部と想定されている。三木だいまん遺

跡は右庄の政所跡と推定されている。永町ガマノマカリ遺跡は福田庄地頭職・菅生社神職を世襲した狩野氏ないしその一党の居館と想定されている。

県内の3間以上の総柱の建物は荘園や寺社関係、武士の居館と推定される遺跡で検出されている。梁行・桁行共に3間を越える建物は上記68例中17例(第3表)あるが、一方が4間を越える建物は11例と少なく、かなりの勢力を持った者の居住地と考えられる。米光地内は16世紀初頭には萬福寺の管理下にあったことが明らかであり⁽²⁶⁾、それ以前は浅香山木氏の研究⁽²⁷⁾によれば白山比咩神社の神主の上道氏が12世紀～13世紀初頭にかけて宮保・宮丸を中心として、柏野・笠間(米光町も含まれる)などに領主化し始めるという。当遺跡の建物の居住者は上道氏の在地領主化の動きとの関連の中で考えることも可能であろう。

第3表 石川県内における中世の総柱建物 (梁行3間、桁行3間以上)

遺跡・遺構名		柱間数 (梁行×桁行+庇)	梁行長×桁行長	柱間法量		桁行 方位	報告された 時期	備考
				梁行	桁行			
西川島遺跡群	縄手遺跡SB01	5×7+北東	12.2×17.6 ^m	2.5 ^m	2.5 ^m	N-80°-E	13c中項	井戸を伴う
	桜町遺跡	5×7	12.6×19.3					小型建物・井戸を併う
	美奈奈比古神社前遺跡SB01	4×4	9.8×10.3	2.5	2.6	N-82°-E	13c前半	
	御館遺跡	6×7	12.0×18.9					小型建物・倉庫・井戸を併う
外遺跡第2号建物		3×3+北+南	9.0×9.7			N-6°20'-E	12c末～13c初	
気社僧坊群多跡	オバタケ地区1号建物	3×3	5.2×6.9	2.5	2.3	N-1°-E	15c	2～5・7号と重複 1・3・4・7号と重複
	" 2号建物	3×3	6.75×6.75	2.25	2.25	N-6°-E	15c	
	寺家ブタイ地区5号建物	3×3	4.5×5.4	1.5	1.8		15c後半～16c後半	
寺家遺跡SB64		3×8	5.4×10.4	1.8	1.3	N-34°-W	鎌倉	第2郭の中で最大
佐々木ノテウラ遺跡2号建物		3+東×4	6.7×9.3	2.4	2.5	N-1°-W	12c	2×3間の三面庇ないし、2×2間の四面庇を想定可能
勅使館跡 B1-2		3+南×4+東	10.1×12.3	2.7	2.4	N-0°-E	14c後半	南面する東西棟 北面する南北棟 三面庇で西面する南北棟
" B1-4		4×4+北	7.8×9.6	1.95	2.1	N-3°-E	14c中葉	
" B2-1		3+西×4+北+南	7.2×11.7	1.8	2.1	N-2°-E	13c後半	
" B3-9		3+北×5	9.15×11.25	2.4	2.25	N-3°-E	13c末	
三木だいもん遺跡、1次、A区建物		3×4						
大島遺跡		4×4						
田尻シンペイダシ遺跡01建物		4×5	10.4×14.1	3.0	3.2	N-5°-W	11c後半～12c中	2×3間の四面庇

2 井戸跡

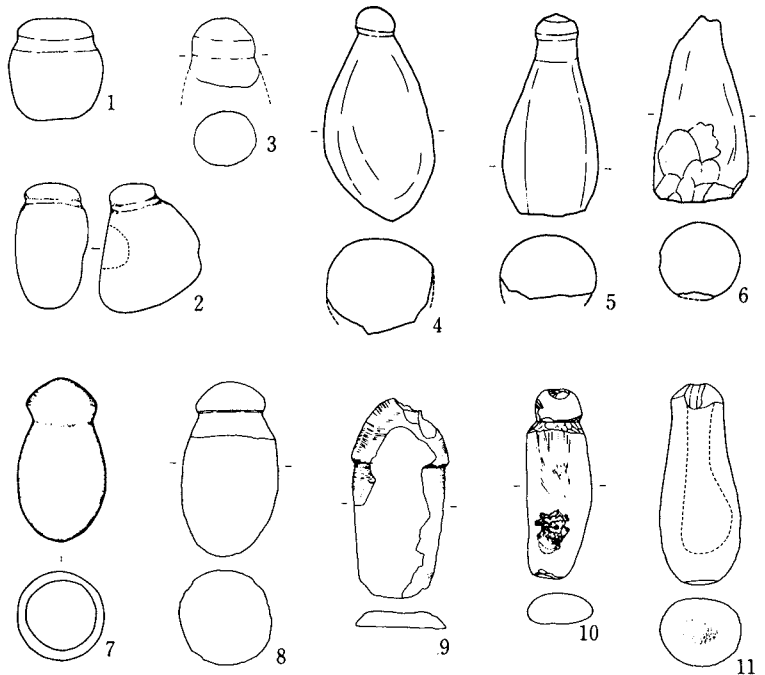
当遺跡の井戸は曲物枠で多段に積上げられている。同じ構造の井戸は加賀市勅使館跡⁽²⁸⁾(3次、13世紀前半～14世紀初頭)、漆町遺跡金屋サンバンワリ地区169号井戸、211号井戸ほか⁽²⁹⁾、金沢市松村町⁽³⁰⁾(南北朝～室町か)等がある。第2号井戸出土土器は特徴から掘立柱建物とほぼ同時期と思われる。

3 有頭石錘

第2号土坑から1点出土している。石錘は県内では縄文時代前期初頭の佐波式期に礫石錘が多く、切目石錘は中期後葉に出現、盛行し、後・晩期には減少する。そして新たに有溝石錘A種が現れるという⁽³¹⁾。有頭石錘は沼田啓太郎氏が縄文時代の石冠の一種とされた⁽³²⁾が、永町ガマノマカリ遺跡の例から古墳時代の石錘と考えたほうが妥当という意見もある⁽³³⁾。

管見した県内の有頭石錘は8遺跡13例である。第20図1は穴水町前波出土である⁽³⁴⁾。写真から作図し

たために詳細は不明であるが、長さ約8cm、幅約7.4cm、頭部約1.7cmのようである。所属時期は不明である。2は尾口村女原出土である⁽³⁵⁾。沼田氏が「おいねずみ」(北陸における異形石器の一例)として報告された資料であるが、有頭石錘の可能性が指摘されている。長さ10.1cm、厚さ8cm、頭部長約1.4cmを測る。3は当遺跡から出土したものである。11世紀後半から15世紀の遺物が出土している。4～6は門前町道下元町遺跡⁽³⁶⁾から出土している。4は長さ約17cm、幅約9cm、頭部長約1.8cmを測る。5は長さ約16cm、幅約7.4cm、頭部長約1.8cmを測る。6は現存長14.4cm、幅7.3cmを測る。道下元町遺跡では縄文時代の福浦上層式・朝日下層式・古府式、後期～晩期、弥生時代の柴山出村式、奈良時代～中世にかけての遺物が出土している。石錘は中世の遺物とされている。7は金沢市無量寺遺跡⁽³⁷⁾から出土している。長さ12.8cm、幅7cm、頭部長約2.4cm、重量800gを測る。石質は砂岩である。無量寺遺跡は弥生時代の月影式、中世～近世の遺物が出土している。なお、管状石錘が出土している。8～11は加賀市永町ガマノマカリ遺跡⁽³⁸⁾から出土している。8は長さ13.2cm、幅7.2cm、頭部長2.1cm、重量818gを測り、9は長さ14.9cm、幅6.7cm、頭部長5.1cm、重量118gを測る。10・11は包含層からの出土であり、10は長さ14.3cm、幅4.7cm、頭部長2.4cm、重量248gを測る。11は長さ15.1cm、幅5.9cm、頭部長2.1cm、重量586gを測る。永町ガマノマカリ遺跡は縄文時代中期、弥生時代中期～古墳時代後期、中世



第20図 石川県内出土の有頭石錘

(16世紀初頭まで)の遺物が出土しており、8・9は古墳時代後期の土坑から出土しており、球状土錘が共伴している。他に羽咋市吉崎・次場遺跡に1例⁽³⁹⁾、松任市内に1例⁽⁴⁰⁾存在するという。

有頭土錘の頭部長と全長の比率は1は1:4.7、2は1:7.2、4は1:9.9、5は1:8.8、7は1:5.2、8は1:6.3、9は1:2.9、10は1:6、11は1:7.2である。10例の資料は頭部長と全長の比率が1:5、1:6~7、1:9~10の3グループに分けられそうである。永町ガマノマガリ遺跡では1:6~7のグループのものが4例中3例をしめ、道下元町遺跡では1:9~10のグループで占められており、両遺跡の差は地域差ないし時間差と考えられるが、比較資料が少ないために不確定要素が高いが、時間差の可能性が高いと思われる。

4 出土土器について

本遺跡はランドウ地区とテラノヤブ地区より構成されることは既に述べた。テラノヤブ地区は資料の採集のみであるから遺構の検討はできないが、遺物について比較してみると、時期および組成に相違を見出しうる。時期についてはさきに、個々について述べてきたが、再びまとめておこう。

ランドウ地区は、11世紀後半から13世紀の前半ないし中頃にかけての土器が多く、とりわけ12世紀が主体となる。掘立柱建物跡や井戸跡もこの時期に包括されよう。これより下るものとしては白磁の皿と瀬戸・美濃焼の天目茶碗、そして、土師質土器の皿の一部があげられるのみである。これに対してテラノヤブ地区の土器は14世紀から16世紀にかけてのものが多く、わずかに珠洲焼の片口鉢に12世紀後半のものを認めることができる。

第3表に両地区出土土器の器種別一覧表を掲げた。ランドウ地区は破片点数、テラノヤブ地区は実測対象点数でしかも採集資料であるから同等に扱うことはできないが、概略的な傾向は知ることができると思う。ランドウ地区の、器種別にみた組成比率は、土師器が14.4%、須恵器が4%、中国製品が18.3%で、うち青磁が10.5%、白磁が5.2%、青白磁が2.6%、国産陶器では珠洲が23.7%、加賀、瀬戸がともに1.3%、土師質土器が37%である。これらの土器群のうち、舟運に

第4表 米光萬福寺遺跡出土土器器種別一覧

器種	土師器		須恵器		中国製品						珠洲			加賀			越前			瀬戸・美濃					瓦質土器	土師質土器	合計
	碗	鍋	壺	甕	碗	香炉	碗	皿	合子	片口鉢	壺	甕	甕	片口鉢	壺	甕	平碗	天目	盤	花瓶	香炉	火鉢	鉢	皿			
																									青磁	白磁	
ランドウ地区	11	1	1	2	8		3	1	2	10	2	6	1												27	76	
テラノヤブ地区					3	1				9			2	2	1	2	3	1	1	2	2	3	1		33		
合計	11	1	1	2	11	1	3	1	2	19	2	6	3	2	1	2	3	2	1	2	2	3	3	28	109		

よってもたらされたと思われるものは、中国製品、珠洲、加賀、瀬戸・美濃であり、全体のなかで45%を占める。テラノヤブ地区の採集品にいたっては、土師質土器の1点以外はすべて舟運によっていると思われる。舟運の中核を担ったと推定されるものは古代における比楽湊であり、中世における今湊である。ともに要津として殷賑を誇ったのであるが、現在では、その位置を知るすべもない。ただ、ともに、その位置が現在の美川町中心部に近い、手取川の支流ないし本流の河口域にあったことは推定できる。遺跡から、現在の手取川河口まで約2.5 km、最も近い海岸線まで約1.5 kmを測る。また、現在遺跡の中央を流れる堂尻川は明治初年においては舟の漕上する河川であったことが『皇國地誌』によって知られる。これは、遺跡存続時の水系ではないが、同様の小河川が存在していたことは十分に考えられる。本遺跡の存在そのものが、今湊にかなりの部分を負っていたであろうことは、出土土器より想定できるのである。

註

- (1) 田嶋明人「9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター 1986 金沢。
- (2) 金原正明・嶋倉巳三郎『出土木器の樹種と木取りⅠ・Ⅱ』 布留遺跡天理教発掘調査団 1981 奈良。
- (3) 井戸の部分名称は次の文献による。宇野隆夫「井戸考」『史林』第63巻5号 史学研究会 1982 京都。
- (4) 井戸側の内枠・中枠・外枠の名称は取上げの際に便宜的に付けた名称である。
- (5) 曲物の綴方の分類は次の文献による。奈良国立文化財研究所編『木器集成図録』近畿古代篇 奈良国立文化財研究所 1984 奈良。
- (6) 石川県立埋蔵文化財センターの石質標本での比較であり、山本直人氏の教示を得た。
- (7) 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978 福岡県太宰府町。
- (8) 吉岡康暢「中世陶器の生産と流通」『考古学研究』第27巻第4号 考古学研究会 1981 岡山。
- (9) 亀井明德「平安・鎌倉時代の輸入陶磁器」『日本貿易陶磁史の研究』 同朋舎 1986 京都。
- (10) 註(8)文献に同じ。
- (11) 註(1)文献に同じ。
- (12) 下川達彌編「滑石製石鍋出土地名表(九州・沖縄)」『九州文化史研究所紀要』第二十九号 九州大学九州文化研究施設 1984 福岡。
- (13) 水野和雄「日本石硯考—出土品を中心として—」『考古学雑誌』第70巻第4号 日本考古学会 1985 東京。
- (14) 四柳嘉章・辻本 馨『西川島・Ⅰ』 穴水町教育委員会 1980 石川県穴水町。
四柳嘉章・辻本 馨・藤 則雄『西川島・Ⅱ』 穴水町教育委員会 1981 石川県穴水町。
四柳嘉章「奥能登・穴水盆地における中世遺跡群の調査」『信濃』第33巻第4号 信濃史学会 1981 長野。
四柳嘉章「能登の中世荘園村落における信仰—穴水町西川島遺跡群の調査から—」『石川考古学研究会々誌』第27号 石川考古学研究会 1984 金沢。
- (15) 浜野伸雄・谷内尾晋司・米沢義光他「中島町小牧・外遺跡」 中島町教育委員会 1981 石川県中島町。
- (16) 湯尻修平・越坂一也「羽咋市気多社僧坊跡群」 石川県立埋蔵文化財センター 1984 金沢。
- (17) 小嶋芳孝・木立雅朗・藤 則雄『寺家遺跡発掘調査報告書』Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター 1986 金沢。
- (18) 北野博司「徳久・荒屋遺跡」『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』 石川県立埋蔵文化財センター 1985 金沢。北野博司氏から教示を得た。
- (19) 北野博司・新城えり子・本田秀生『佐々木ノテウラ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1986 金沢。
- (20) 田嶋明人編『漆町遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1982 金沢。
- (21) 田嶋正和・小森秀三・中村準一『勅使館跡発掘調査報告』 加賀市教育委員会 1981 加賀。
田嶋正和・小森秀三・中村準一『勅使館跡』 加賀市教育委員会 1986 加賀。

- (22) 田嶋正和編『三木だいまん遺跡』 加賀市教育委員会 1986 加賀。
- (23) 越坂一也・田嶋明人・山本直人『永町ガマノマガリ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1984 金沢。
- (24) 四柳嘉章・高橋 裕『加賀市千崎・大畠遺跡』 石川県教育委員会 1972 金沢。
- (25) 田嶋明人『加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書』 石川県教育委員会 1979 金沢。
- (26) 『守光公記』による。
- (27) 浅香年木「平安期における手取扇状地の開発と領主」『加賀三浦遺跡の研究』 石川県教育委員会・松任町教育委員会 1967 金沢。
- (28) 註(21)の田嶋・小森・中村 1986文献による。
- (29) 註(20)に同じ。
- (30) 福田弘光・荒木繁行・米沢義直「金沢市松村町発見の井戸枠について」『石川考古学研究会々誌』第11号 石川考古学研究会 1968 金沢。
- (31) 山本直人「加賀における縄文時代の網漁について」『北陸の考古学』 石川考古学研究会 1983 金沢。
- (32) 沼田啓太郎「おいねずみについて—北陸における異形石器の1例—」『石川考古学研究会々誌』第10号 石川考古学研究会 1966 金沢。
- (33) 註(23)に同じ。
- (34) 長谷 進『穴水町の石器と土器』 穴水町文化財保護専門委員会 1967 石川県穴水町。
- (35) 註(32)に同じ。
- (36) 平田天秋・西野秀和他『門前町道下元町遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1985 金沢。
- (37) 南 久和編『金沢市無量寺遺跡』 金沢市教育委員会 1983 金沢。
- (38) 註(23)に同じ。
- (39) 調査担当者の福島正実氏から教示を得た。
- (40) 戸潤幹夫氏から教示を得た。

第4章 考 察

第1節 石川県内出土の井戸について

1 はじめに

井戸については、多くの先学による井戸型式⁽¹⁾、祭祀⁽²⁾、系統的な流れ、地域色等の優れた研究⁽³⁾があるが、ここでは石川県内の井戸の紹介と集成を主眼としながら地域色について言及してみたいと思う。なお、井戸型式は基本的に宇野隆夫氏の分類⁽⁴⁾を使用する。

2 弥生時代の井戸

金沢市西念・南新保遺跡⁽⁵⁾の井戸（第21図1）

手取川扇状地の北端に位置し、犀川と浅野川にはさまれた沖積平野に立地する。2段掘りの掘方の底に2枚の板を平行に敷き、その上に口縁を下にした楕円形の桶を据え、底から60cm上に桶の長軸と平行に板を左右に2枚ずつ敷いている。桶は口縁部61×41cm、高さ70cmである。井戸側の中は後期後半～終末の土器が廃棄されていた。

羽咋市吉崎・次場遺跡⁽⁶⁾の井戸

古邑知瀨に接した弥生時代の大集落である。I-1号井戸は2段掘りの掘方に楕円形の桶を転用して、井戸側を据えている。時期は後期（後半）であるという。I区2号井戸は2枚板の上に桶を転用して据えている。

金沢市戸水C遺跡⁽⁷⁾の井戸

手取川扇状地の北端にあたり、大野川左岸の河口付近に立地する。D区1号井戸は不整楕円形の掘方に弧状にくり抜いた板材2枚を組合わせている。底に5～15cmの角礫が層をなし、井戸側内に井戸側の破片が入っていた。時期は月影式前後と思われる。

志雄町杉野屋ろくばわり遺跡⁽⁸⁾の井戸（第21図2）

碁石ヶ峰から派生した丘陵の下の平野部に位置する。井戸側は長辺約50cm、短辺約40cmの長方形で、深さ現存70cmの井戸側を有する。縦板を四方から立て、外側の隅に短い杭を打っている。また、内側の東側と西側には2本の横棧が渡してあった。時期は後期後半である。

小結 宇野隆夫氏によると弥生時代後期は素掘り井戸（A I類）が主体をなし、木組井戸（丸太くり抜き井戸・縦板組無支持井戸・縦板組横棧どめ井戸）も広く用いられるという。石川県内では、弥生時代の素掘り井戸と認定できるものは確認されていない。戸水C遺跡D区1号井戸は丸太分割くり抜き井戸（B I b類）であり、西念・南新保遺跡、吉崎・次場遺跡などの例は丸太くり抜き井戸（B I類）の垂流となろう。杉野屋ろくばわり遺跡の井戸は縦板組横棧どめ井戸（B III類）の一種であろう。石川県の弥生時代後期の井戸は桶を転用した例が多いという特色がある。

3 古墳時代の井戸

古墳時代の井戸と認定できるものは確認されていない。

4 奈良・平安時代の井戸

奈良・平安時代の井戸は同じ遺跡内に存在することも多いので、遺跡毎ないし、同じ構造の井戸毎に紹介していきたい。

金沢市戸水⁽⁹⁾C遺跡の井戸

大野川河口に位置し、発掘調査面積約18,400㎡において弥生時代終末前後の井戸1基、奈良・平安時代の井戸10基、鎌倉時代末の井戸1基が検出された。

A区1号井戸(第21図3)は一辺110cmのほぼ正方形な掘方を有し、四辺を河原石で区画している。縦板組無支持井戸であり、水溜は直径約40cmの曲物である。遺物は桜の表皮・小枝、ウリ科の種子がある。時期は奈良時代後半である。

F区2号井戸(第21図4)は内法約50cm、深さ75cmの井戸側であり縦板と隅柱を打ち込んでいる。横棧は存在せず、縦板組隅柱横棧どめ井戸ではない。時期は奈良時代前半である。

F区4号井戸(第23図13)は横板組井籠組で下段に内法60×40cmの2段組の井籠を据え、上段には縦板を多角形に組み合わせている。下段の外側には数枚の板が、上段の内側には桜の表皮によって曲物状の板があてがわれている。時期は9世紀末～10世紀初頭である。

E区2号井戸(第23図14)も横板井籠組で内法は50cm前後、2段である。時期は不明である。

羽咋市深江⁽¹⁰⁾遺跡の井戸(第22図11)

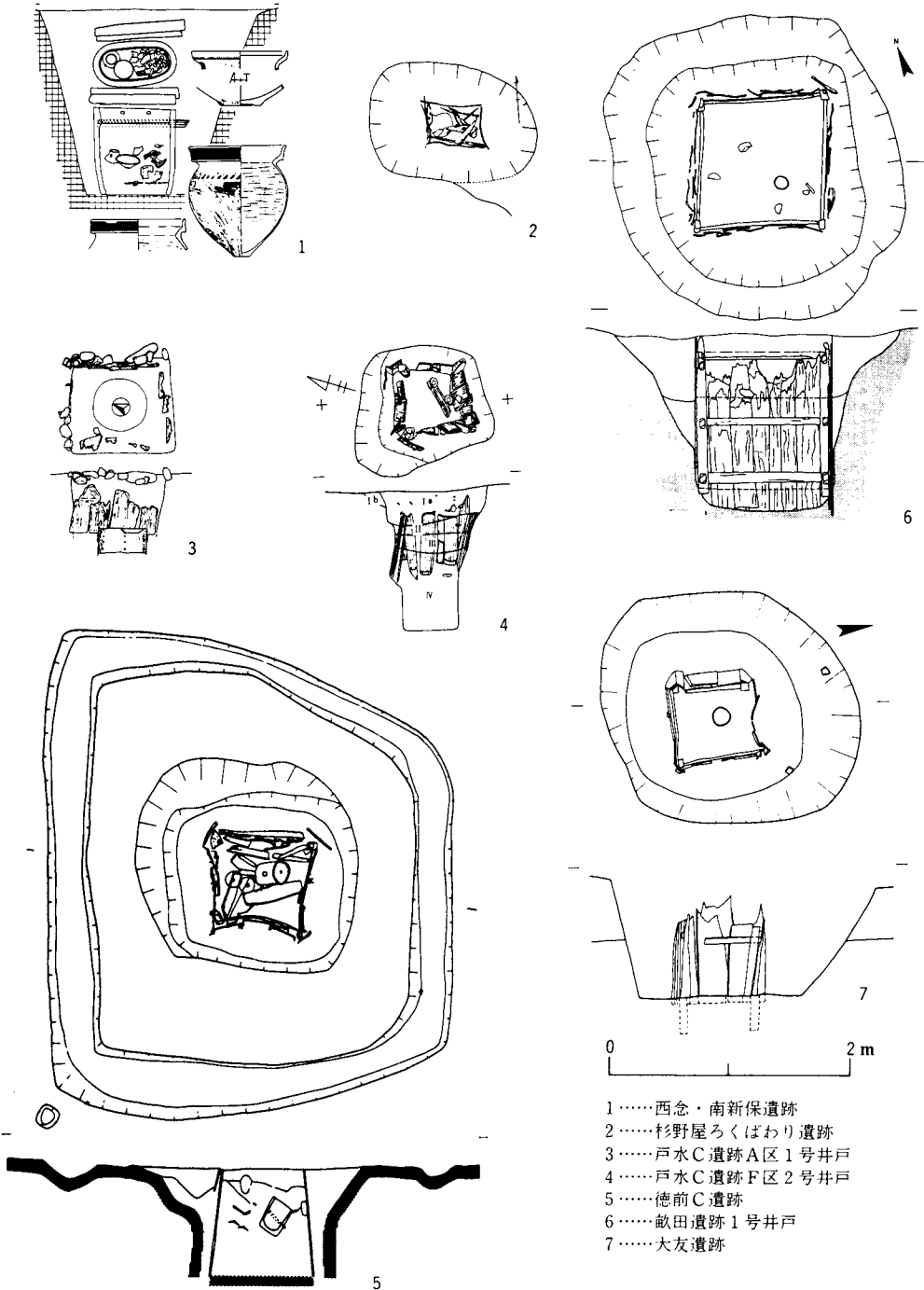
邑知潟に注ぐ吉崎川の右岸に広がる邑知地溝帯上に位置する。井戸側は横板井籠組で内法106cmの正方形、深さ90cmを測る。1段目は板を正方形に組み、2～4段目は井籠状に組み合わせ、1段目と2段目の間に板をはさんでいる。井戸側の周囲を矢板で二重に囲んでいる。底には小礫が敷き詰められており、ハマグリとシジミの貝殻が10～15cm堆積していた。遺物は土錘、下駄、有孔石製品、獣角がある。時期は平安時代中期である。

羽咋市寺家⁽¹¹⁾遺跡の井戸(第23図12)

日本海によって形成された羽咋砂丘の北端に位置する。砂田地区の第2層ないし第2層下層に伴う井戸11基、第4層に伴う井戸1基(SEO2)検出された。SEO2は横板井籠組で内法140×100cmを測る。3段の井籠組で、井戸側の外側には桶の底・板材が補強のために二重に多数打ち込まれていた。水溜も2段の井籠組で内法44×54cmを測り、底には7cm前後の白色石が敷き詰められ、水溜の中から隆平永宝1枚、齋串1枚、円盤形木製品1点、ヒョウタン1個体分等が出土した。時期は9世紀代であるという。

鹿島町徳前⁽¹²⁾C遺跡⁽¹³⁾の井戸(第21図5)

邑知地溝帯内に位置し、二宮川・長曾川によって形成された複合扇状地のほぼ中央部に立地する。掘方の周囲には70cmの距離をおいて台形プラン(上底250cm、下底400cm、高さ240cm)で幅24～40



第21図 石川県内出土の井戸(1)

cm、深さ10cmの溝が巡っている。溝の西側南北隅には2個の円形ピットが存在し、東側でも痕跡が認められ、覆屋の存在が推定されている。井戸側は一辺90cmの縦板組隅柱横棧どめであり、上位に1段の横棧がある。底には白色の卵大の礫が敷かれ、遺物は杓、種子、加工痕のあるヒョウタン1個体がある。時期は奈良時代初頭である。

金沢市畝田遺跡⁽¹⁴⁾の井戸

手取川扇状地の北端に位置し、犀川と浅野川に囲まれた所に立地する。井戸は4基検出された。

1号井戸(第21図6)は縦板組隅柱横棧どめで、内法112×104cmを測り、横棧は2段(南側)と3段(南側以外)、縦板は37枚で二重に囲っている。遺物は箸状木製品がある。時期は奈良時代末である。5間以上×2間の建物が伴う。

2号井戸は縦板組の井戸(曲物の水溜、平安時代前期前葉、7間×3間の建物)である。3号井戸は縦板組の井戸(隅柱打ち込み式、横棧不明、平安時代前期初頭、5間×2間の建物)である。4号井戸は水溜に曲物を持つ井戸(平安時代前期後葉)である。3・4号井戸は造り替えがなされている。

遺構は4期の変遷が考えられ、井戸は1号→(3号)→2号→4号の順に構築され、4号井戸の所属する時期(IV期)以外は掘立柱建物が伴うとのことである。

金沢市大友遺跡⁽¹⁵⁾の井戸(第21図7)

手取川扇状地の北端で、大野川下流南岸に位置し、戸水C遺跡より約500m内陸に立地する。井戸側は縦板組隅柱横棧どめで、内法75×68cmを測り、打ち込み式である。底には須恵器の破片が敷き詰められ、その上にシジミらしき貝殻の層が存在した。掘方底から箸状木製品が出土した。時期は9世紀代である。

金沢市畝田ナベタ遺跡⁽¹⁶⁾の井戸(第22図8)

上記の畝田遺跡より700m内陸に位置する。井戸側は縦板組横棧どめで、内法約85×64cmであり、四辺に上・中・下段の横棧がある。なお、井桁が存在する。遺物は管状土錘、斎串、箸状木製品がある。口縁端部のみを丁寧に打ち欠いた須恵器瓶3点と斎串が1点あり、井戸祭祀の可能性が指摘されている。時期は9世紀後半～10世紀第3四半期頃である。

小松市漆町遺跡⁽¹⁷⁾の井戸

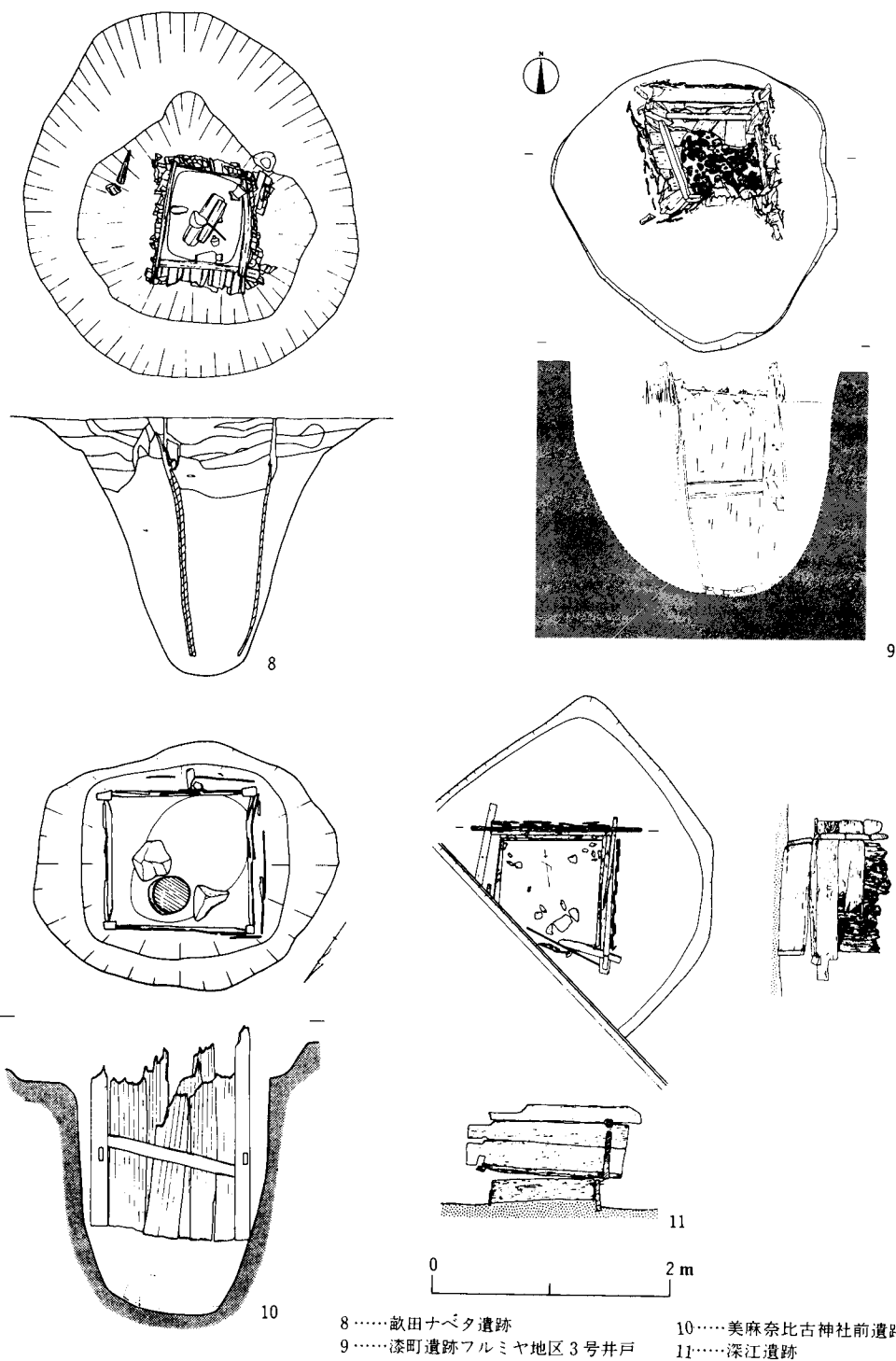
梯川の中流域の左岸に位置し、標高約3mに立地する。金屋サンパワリ地区1号井戸は丸太くり抜き井戸であり、縦板による方形の井桁を有する。時期は10世紀後半である。

フルミヤ地区3号井戸(第22図9)は縦板組隅柱横棧どめで、内法1mである。底には3～16cm程度の礫が敷き詰められていた。時期は11世紀中葉～後半である。

小結 金沢北西部は9世紀前半～10世紀前葉の井戸が多く、縦板組隅柱横棧どめ井戸が多い。大型建物の伴う井戸が多く、墨書土器・斎串などの出土も多い。

小松市梯川中流域では詳細は不明であるが、10世紀以降の井戸が多いと思われる。

金沢市畝田遺跡では平安時代前半に、小松市漆町遺跡では12世紀になると井戸は一定範囲に集中する傾向が見られ、井戸を中心にして建物が建替られるという。



第22図 石川県内出土の井戸(2)

5 中世の井戸

遺跡毎に紹介したい。

穴水町西川島遺跡群⁽¹⁸⁾の井戸

能登半島の内浦に面した穴水盆地の奥部に位置し、小又川と山王川によって形成された微高地に立地する。西川島遺跡群は四柳嘉章氏の報告があるので参照されたい。

美麻奈比古神社前遺跡では1基(第22図10)検出され、縦板組隅柱横棧どめ井戸の据え置式である。遺物は箸状木製品、柄杓がある。時期は13世紀前半である。

桜町遺跡では、1号井戸は縦板組隅柱横棧どめ井戸(下駄、杓子、曲物、漆器椀、トチの実、骨片。底に人頭大の石の上に珠洲焼の水注が納置。12世紀末～13世紀初頭)、2号井戸は縦板組隅柱横棧どめ井戸(人形の頭部、トチの実。13世紀前半～中頃)である。

御館遺跡では、1号井戸は縦板組隅柱横棧どめ井戸(13世紀前半)、3号井戸は構造は不明(鳥形木製品・箸状木製品、13世紀後半)である。

白山橋遺跡の1号井戸は縦板組隅柱横棧どめ井戸(刀子、13世紀後半～14世紀前半)である。

小松市佐々木A遺跡⁽¹⁹⁾の井戸

梯川の中流域左岸に位置し、標高4m前後の自然堤防上に立地する。2ヶ年の調査で54基の井戸が検出された。構造が確実な井戸は縦板組横棧どめ井戸1基、縦板組隅柱横棧どめ井戸5基、曲物積上げ井戸が2基存在する。

小松市漆町遺跡⁽²⁰⁾の井戸

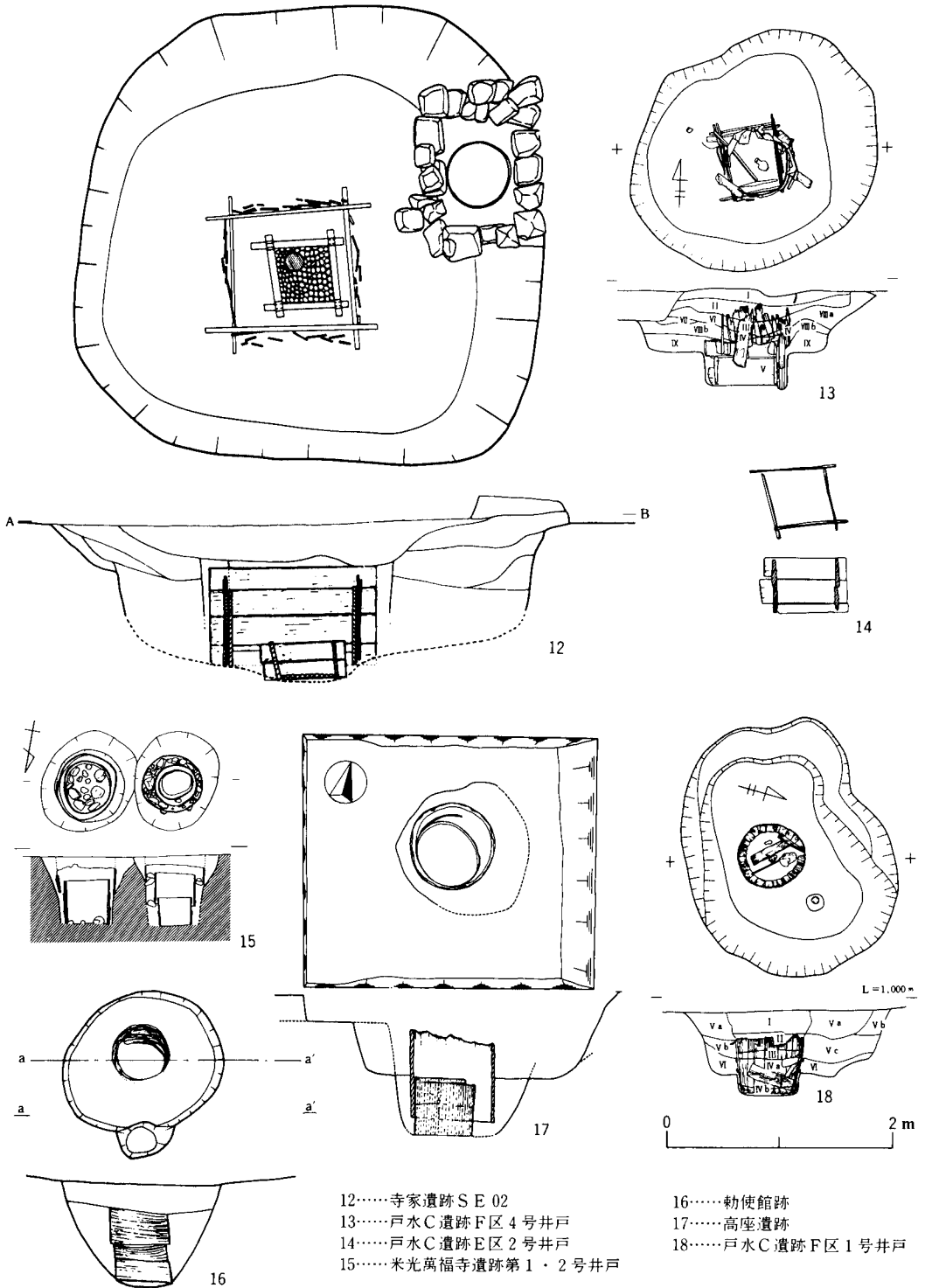
3ヶ年の調査で井戸と推定される遺構は38例検出された。時期は弥生時代後期の1例を除き、平安時代～室町時代に属するという。井戸側は木によるものだけであり、くり抜き形4基、方形横棧形どめ3基、方形横棧支柱形5基、方形隅柱横棧形4基、曲物有段形2基の5形態が認められたという。漆町遺跡ではくり抜き形は9～10世紀代、方形横棧支柱形と方形隅柱横棧形で井筒を持つものは12世紀代に出現し、鎌倉時代以降に盛行し、曲物有段形は鎌倉時代以降に盛行するという。方形横棧支柱形は横棧間に支柱を入れて補強したものである。漆町遺跡では溜め井戸的な井戸が存在し、その機能・用途などの検討課題が残るといふ。

小松市白江梯川遺跡⁽²¹⁾の井戸

梯川の中流域から下流域にさしかかる左岸で漆町遺跡の縁辺部から約800m下流に位置する。2ヶ年6300㎡の調査により平安時代後期から室町時代後期にかけての62基の井戸が検出された。構造の明らかな井戸は縦板組横棧どめ(支柱で補強)3基、縦板組隅柱横棧どめ4基、丸太くり抜き形2基、桶転用1基、曲物積上げ10基、方形横切石組1基がある。建物の数に対して井戸の数が多すぎるといふ。

加賀市勅使館跡⁽²²⁾の井戸(第23図16)

加賀平野の東南端に位置し、動橋川が平野に出る谷口部付近に立地する。井戸側は曲物積上げで3段現存し、直径50cm、深さ70cmを測る。遺物は曲物底板、はさみ竹、桃などの種子がある。



第23図 石川県内出土の井戸(3)

時期は13世紀前半に構築され、14世紀初頭に廃絶した。なお、人為的に埋められ、民俗儀礼の「息抜き」が行われたという。

⁽²³⁾
辰口町高座遺跡の井戸（第23図17）

手取川扇状地の西側扇側部に位置する。旧耕地整理の用排水路掘削の際に発見され、曲物1点が掘り出されていた。不整円形の掘方に、直径約80cm、現存高約100cm、厚さ2cmのくり抜き丸太と、その中に直径約60cm、高さ約58cmの曲物が据えられていた。よって、井戸側はくり抜き材の中に2段の曲物を据えた構造であったようである。遺物は漆器椀、籬、箸状木製品、杓、種子等がある。時期は13世紀後半頃と思われる。

⁽²⁴⁾
金沢市戸水C遺跡の井戸（第23図18）

F区1号井戸の井戸側は内法58cm、残存長50cm前後、板24枚による正円の桶を転用しており、深さ75cmを測る。時期は鎌倉時代末期である。

⁽²⁵⁾
辰口町辰口西部遺跡群の井戸

手取川扇状地の西端扇側部に位置し、標高20～25m前後に立地する。辰口西部遺跡群とは下開発遺跡、徳久・荒屋遺跡、上開発遺跡などの総称である。30基以上の井戸が出土している。特筆すべきは、下開発遺跡G(南)区の石敷施設を持つ石組井戸である。石敷の下に12世紀後半と思われる中世陶器・灰釉陶器が埋納されており、14世紀代に再利用された。なお、この井戸を中心にして掘立柱建物が4回以上建て替えられたことが確認される。

⁽²⁶⁾
門前町道下元町遺跡の井戸（第24図19）

八ヶ川の河口近くに位置し、八ヶ川に合流する小河川の鉄川左岸に立地する。14世紀後半～16世紀初頭にかけての9基の石組井戸が検出されている。石組井戸は河原石を利用し、直径約1m前後の円形のものが多く、断面は垂直に落ちるものとややしりすぼみになるものがある。

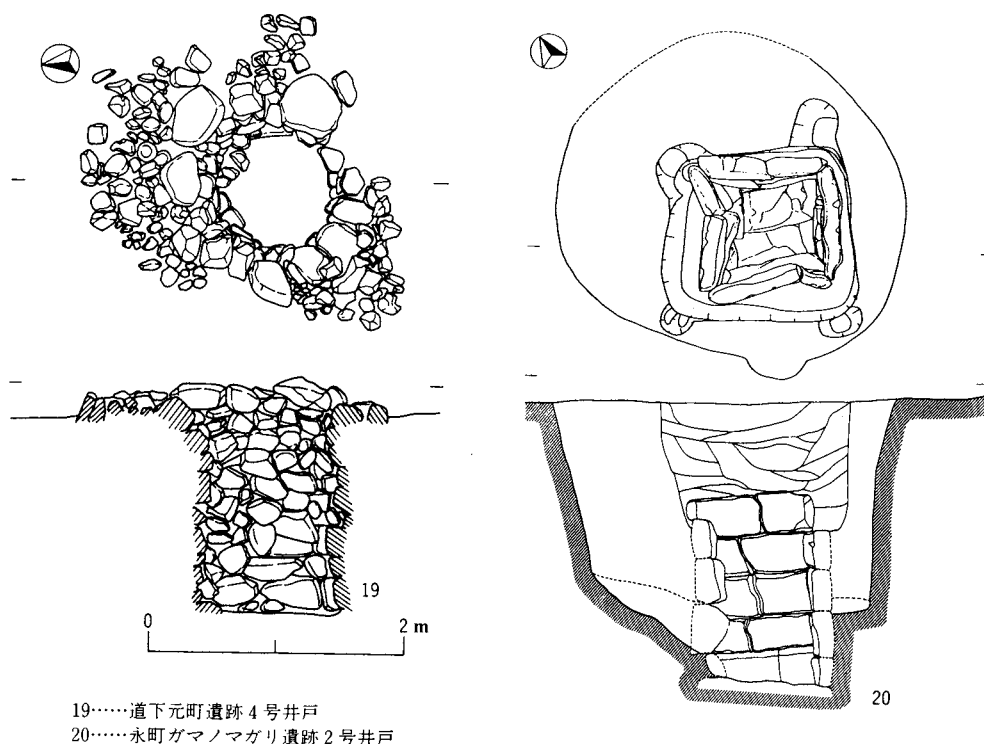
4号井戸は上端径110cm、底部径110cm、深さ180cmを測る。

⁽²⁷⁾
加賀市永町ガマノマガリ遺跡の井戸（第24図20）

加賀平野南西端に位置し、大聖寺川の蛇行によって形成された微高地上に立地する。井戸2基と井戸状遺構が18基検出されている。

2号井戸は長さ約100cm、幅約30cm、厚さ約15cmの板石を底に敷き、その上に方形に積上げている。井戸側の四隅に直径30cm程の柱穴が検出されており、4本の柱を持つ上部施設の存在が想定される。遺物は桶の底板、籬、加工木があり、時期は15世紀末であるという。板石組方形井戸という名称が与えられよう。

小結 中世の遺跡では西川島遺跡群、漆町遺跡、佐々木A遺跡では全て木組井戸、白江梯川遺跡では1基以外は木組井戸である。西川島遺跡群では13世紀代の縦板組隅柱横棧どめ井戸が多く、珠洲焼の壺や水注を井戸底に納置する井戸祭祀に特徴がある。漆町遺跡・白江梯川遺跡には支柱で補強した縦板組横棧どめ井戸(BIII2類)が多く見られ、梯川中流域の特色である。曲物積上げ井戸で時期の確定されているものは13世紀代にある。石組井戸は河原石の乱石積みの井戸と板石組で方形の井戸が存在する。石組井戸の出現は辰口町西部遺跡群の12世紀後半代から見られるが、



19……道下元町遺跡4号井戸
20……永町ガマノマガリ遺跡2号井戸

第24図 石川県内出土の井戸(4)

1/60

一般的に採用されるのは14世紀代(後半)以降のようである。板石組方形井戸は永町ガマノマガリ遺跡と白江梯川遺跡に1基ずつ存在する。

6 おわりに

石川県内は素掘り井戸(A I類)は8例と多くない。これは弥生時代以降の遺跡が1万年以内の完新世の堆積物によって出来た平野部に多く立地するという、地質的な理由による。木組井戸は弥生時代後期から存在し、以後主要な位置を占める。縦板組隅柱横棧どめ井戸が圧倒的に多く、梯川中流域にはほかに支柱で補強した縦板組横棧どめ井戸(B III 2類)と曲物積上げ井戸も多い。井戸は金沢西部(9~10世紀前半代)と梯川中流域(10世紀~中世)に多く、両地域とも発掘調査が多いという原因はあるが、加賀国の国府所在地と推定されている地域であることは興味深い。梯川中流域の遺跡群には石川県内の井戸の半数以上(150基以上)が存在するので詳細な報告が待たれる。

石川県内の井戸の集成と地域性を明らかにすることが本節の目的であったが、筆者の力量不足のため不十分なままで終わることになってしまった。今後の研究の糧になれば幸いである。

第5表 石川県内出土の井戸一覧

遺 跡 名	遺 構 名	井戸側型式	時 期	備 考
三井小泉遺跡		不明	9世紀	縦板と隅柱と水溜が存在した可能性あり。 註(28)
美麻奈比古神社前遺跡	1号井戸	BIV類	13世紀前半	据置式。2個の石の間に倒置状の柄杓。箸
縄手遺跡	1号井戸	BIV類	13世紀中葉	建物(5×7間)共伴。珠洲焼の水注納置。 トチ
桜町遺跡	2号井戸	不明	13世紀前～中	隅柱のみ存在
	1号井戸	BIII類	13世紀初頭	珠洲焼の水注納置。下駄・杓子・漆器椀・ 曲物底板・トチ・骨片。横棧3段
御館遺跡	2号井戸	BIV類	13世紀前～中	人形の頭部・トチ
	1号井戸	BIV類	13世紀前半	珠洲焼の壺納置。
	2号井戸 3号井戸	不明	13世紀後半	鳥形木製品が箸に包含、上に石と土器が廃 棄
白山橋遺跡	1号井戸	BIV類	13世紀後半～14 世紀後半	刀子
道下元町遺跡	1号井戸	不明	不明	土塁・溜槽に付属する溝あり。土坑か。
	2号井戸	BIV類	不明	出土遺物なし。平安時代か。
	3号井戸～ 11号井戸	CI類	14世紀後半～16 世紀初頭	
外遺跡	第1号井戸	AI類	不明	遺物なし。註(29)
徳前C遺跡	井戸状遺構	縦板組か	不明	須恵器・土師器・製塩土器・桃・くるみ
		BVI類	奈良時代初頭	台形の溝。覆屋存在の可能性大。白石の石 敷き。杓、桃・梅・くるみ等の種子
谷内ブンガヤチ遺跡	1号井戸	CI類	中世	註(30)
	2号井戸	不明	中世	
	3号井戸	CI類	中世	覆屋が存在する可能性大
	4号井戸	CI類	中世	
寺家遺跡 砂田地区	SE01	縦板か		方形の石組の井桁あり。80cm下に曲物あ り
	SE02	BVI類	9世紀	横板井籠組の水溜、白石の石敷。齋串・隆 平永宝・ヒョウタン・木器
	SE03	BVIII類		1m下に2段の曲物。
	SE04	BVIII類か		約80cm下に曲物。溜水のため詳細不明。
	SE05	不明		抜き取りか。
	SE06	BVI類		曲物の水溜。最下段の横板のみ存在。
	SE07	不明		SE06より古い。井戸側は木材使用。
	SE08	不明		井戸側は木材使用。
	SE09～ SE12	不明		
寺家チョウエイジ遺跡		AI類	不明	円形石組の井桁。陶器片・砥石出土。他に 桶の入った土が多数存在。註(31)

遺 跡 名	遺 構 名	井戸側型式	時 期	備 考	
気多社僧坊跡群寺家ブ タイ地区	1号井戸	A I 類	中世	底に板石。20ケース以上の貝殻。漆器椀。 註(32)	
	2号井戸	A I 類	中世	漆器椀。	
	3号井戸	"	中世		
	4号井戸	"	中世	漆器椀・砧	
吉崎・次場遺跡	I-1号井戸	桶転用	弥生時代後期	楕円形の桶	
	I-2号井戸	桶転用	"	礎板2枚の上に桶が据えられている。	
		桶転用 BIV類	"	正円の桶	
深江遺跡		BVI類	10世紀代	小礫敷き、上にハマグリ・シジミの層。土 錘・下駄・獣骨・有孔石製品。	
杉野屋ろくばわり遺跡		BIII類か	弥生時代後期	縦板組で横棧あり。外側の隅に杭あり。	
西念・南新保遺跡 F区		桶転用	弥生時代後期後 半～終末	平行な2枚の板に楕円形の桶、桶の長軸に 平行して左右に2枚ずつ板が存在。	
	G区	P-216 土坑	不明	8世紀末	斎串2点。桶底板2枚。
金石東遺跡		桶転用	弥生時代	註(33)	
戸水C遺跡	A区	1号井戸	BII b類	奈良時代後半	井桁あり。曲物の水溜。桜の表皮・ウリの 種子。
		2号井戸	BIV類	9世紀後半	
	B区		A I 類か		下位に段を有する。
	D区	1号井戸	B I b類	月影式前後	底に5～15cm大の角礫が層をなす。
		2号井戸	BIV類	9世紀後半以前	打ち込み式
	E区	1号井戸	不明	9世紀後半～10 世紀初頭	横棧のみ。斎串11本・獣骨。12号建物に隣 接。
		2号井戸	BVI類	不明	遺物なし。溜水のため詳細不明
	F区	1号井戸	桶転用	鎌倉時代末	
		2号井戸	縦板組	奈良時代前半	隅柱あり。打ち込み式。
		3号井戸	BIV類	11世紀	
	4号井戸	BVI類	9世紀末～10世 紀初頭	2段の横板の上に縦板を多角形の組合せ	
戸水B遺跡	5号井戸	不明	11世紀頃	抜き取り。	
		BIII類か	弥生	杉野屋ろくばわり遺跡の井戸と同じ。註 (34)	
下安原海岸遺跡		BIII類か	弥生	" 註(35)	
畝田遺跡	1号井戸	BIV類	奈良時代末	縦板の二重囲い。箸。建物が伴う。	
	2号井戸	縦板組か	9世紀前半	曲物の水溜。土錘。建物が伴う。	
	3号井戸	縦板か	9世紀前後	隅柱。打ち込み式。造り替え。建物が伴う。	
	4号井戸	不明	9世紀後半	曲物の水溜。抜き取り。造り替え。	
畝田ナベタ遺跡		BIV類	9世紀後半～10 世紀後半	井桁あり。管伏土錘・箸・斎串	

遺 跡 名	遺 構 名	井戸側型式	時 期	備 考
大友遺跡		BIV類	9～10世紀前半	打ち込み式。須恵器破片敷き、上にシジミ層。箸
近岡ナカシマ遺跡		縦板と隅柱	9世紀後半	底に墨書土器5点重ね。箸・曲物 註(36)
黒田遺跡		BIII類	平安時代後期	井桁あり。註(37)
無量寺遺跡		不明	不明	曲物が存在。
千木イワスクリ遺跡		BIV類	9世紀前半	斎串・曲物底板・棒状木製品 註(38)
松村遺跡		BVIII類	不明	4段。箸・果実。南北朝～室町時代か。註(39)
米光萬福寺遺跡	第1号井戸	BVIII類	13世紀前半	3段。第2号井戸より新しい。
	第2号井戸	BVIII類	13世紀前後	2段以上。石と曲物破片が投入。
高座遺跡		B I類とB IV類の併用	13世紀後半	曲物2段。櫛・箸・漆器椀・杓文字・種子
下開発遺跡G南区		石組	12世紀後半と14世紀	石敷施設を持つ。14世紀に再利用。周囲で4回以上の建物建て替え確認。
徳久・荒屋遺跡 L区				21基存在。
M区				7基存在。
N区		C I類	中世	1～3号井戸
佐々木ノテウラ遺跡	1号井戸	A I類	12世紀(中)	棒状木製品・曲物断片・トチ
	2号井戸	BIV類	10世紀前半	140×130cmの小砂利敷き、上に炭化した桜の枝と角材。5点の墨書土器・曲物底板 註(40)
佐々木A遺跡	54基	SE04	BIV類	
		SE05	BVIII類か	現存2段、曲物内石敷き(水溜か)
		SE08	BIII類	
		SE15	BVI類	現存2段
		SE29	BIV類	打ち込み式
		SE31	縦板	曲物の水溜
		SE35	BVIII類か	曲物1段のみ
		SE48	BIV類	曲物2段の水溜
		SE50	BIV類	
		SE53	BVIII類	曲物1段のみ
		SE54	BIV類	
漆町遺跡	38基			
白江ネンブツドウ地区	1号井戸	BIV類		
金屋ヤシキダ地区	2号井戸	BIV類	13世紀後半	
	514号井戸	B I類	9世紀末	刀子・櫛・箸。
漆フルミヤ地区	1号井戸	不明	10世紀前半～11世紀前後	2段の井籠組の水溜、石敷きあり。墨書土器・砧
	2号井戸	B I類		
	3号井戸	BIV類	11世紀中～後半	石敷きあり。

遺 跡 名	遺 構 名	井戸側型式	時 期	備 考
漆町遺跡金屋サンバワ り地区	1号井戸	B I 類	10世紀後半	矢板による方形の木組、井桁か。櫛・木器
	14号井戸	B III 2 類		曲物の水溜
	89号井戸	B IV 類		
	100号井戸	B VIII 類	12世紀後半	材抜き取りの可能性大か。下駄・箸
	127号井戸	B III 2 類	14世紀前後	曲物の水溜
	153号井戸	B III 類		板敷きあり、井桁残存
	169号井戸	B VIII 類		現存4段
	173号井戸	B III 類	13世紀前後	曲物の水溜
	211号井戸	B VIII 類		現存2段
	215号井戸	B III 2 類		曲物の水溜
	260号井戸	B III 2 類		
261号井戸	B I 類		石敷きあり。	
白江梯川遺跡	2次			
	1号井戸	B VIII 類か		
	2号井戸	B VIII 類		残存2段
	6号井戸	B VIII 類		残存1段
	9号井戸	B VIII 類		残存1段
	11号井戸	B III 2 類		
	15号井戸	B I b 類		底は板敷き
	3次			
	1号井戸	桶転用		桶1段、漆器椀2点
	4号井戸	B III 2 類		箸多数
	5号井戸	板石組方形		板石2段まで確認
	7号井戸	B VIII 類か		曲物1段
	8号井戸	B IV 類		箸多数
	14号井戸	B VIII 類		曲物1段
	16号井戸	B IV 類		
	19号井戸	B VIII 類		曲物2段以上
	20号井戸	B I b 類		4枚のくり抜き板。曲物の水溜
	21号井戸	B VIII 類		曲物1段
	23号井戸	B III 2 類		
	24号井戸	B VIII 類		曲物2段以上
26号井戸	B III 2 類		杓1点、箸多数	
32号井戸	縦板組		縦板断片のみ確認	
33号井戸	B VIII 類		曲物2段	
38号井戸	B IV 類			
勅使館跡		B VIII 類	13世紀前半～14 世紀初頭	3段以上。曲物底板・はさみ竹・桃・トチ・柿
敷地町後方遺跡		C I 類	15世紀前～後	やや外開き。註(41)
永町ガマノマガリ遺跡	1号井戸	不明	15世紀末	底板付き桶の水溜。漆器椀・バンドコ
	2号井戸	板石組方形	15世紀末	柱による井桁か覆屋の存在の可能性大。

第2節 石川県内出土の石硯について

硯が識字層の存在を裏付けることはいうまでもない。いま、石川県内の石硯をみると、管見の限り、18遺跡39点を数える。1遺跡平均2点である。これは、遺跡の調査面積にもよるが、相当広い調査面積をもつ遺跡でも極めて点数が少ない場合がある。例えば、穴水町の3遺跡、これは西川島遺跡群と総称され、数ヶ年にわたって調査がなされている。ここで7点である。また、小松の白江梯川遺跡では約6,400㎡の調査面積に対して2点の出土である。

このことは、石硯のもつ材質的な特性にもよるが、やはり識字層の少なさを反映しているのではないと思われる。表に掲げた硯のほとんどは中世に属するものと考えられる。中世村落到ける硯の普及はほぼ名主層以上に限られていたとみるのが妥当であろう。

石硯の全国的な研究としては、近年の水野和雄氏の成果がある。また、材質的な検討を進めて中世における石硯の産地と流通を明らかにしようとした重要な報告もなされている。⁽⁴²⁾⁽⁴³⁾この視点における検討は、遺跡の評価に大きく関わるので、積極的に進める必要がある。

第6表 石川県内出土の石硯一覧

遺跡名	所在地	形状	点数	文献等
道下元町	鳳至郡門前町道下	長方形	7	『道下元町遺跡』1985
大町・縄手	鳳至郡穴水町字大町	長方形	2	『西川島・I』1980
白山橋	鳳至郡穴水町字龍山寺	長方形	1	『穴水町・白山橋遺跡調査報告』1977
白山橋	鳳至郡穴水町字大町	長方形	1	辻本馨氏のご教示
御館	鳳至郡穴水町字川島	長方形	3	『西川島・I』1980
石動山	鹿島郡鹿島町石動山	長方形	3	平田天秋氏のご教示
戸水C	金沢市戸水町	長方形	1	『金沢市戸水C遺跡』1986
無量寺	金沢市無量寺町	長方形	1	『金沢市無量寺遺跡』1983
普正寺	金沢市普正寺町	長方形	7	『普正寺遺跡』1984
金沢城跡	金沢市丸の内	長方形	1	『金沢城址の発掘』1969
宮保光明寺	松任市宮保町	長方形	1	石川県立埋文センター調査 1986
米光萬福寺	松任市米光町	円	1	本書
白山	石川郡鶴来町白山町	五角形	1	『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡』1985
鳥越城跡	石川郡鳥越村釜清水	長方形	2	『鳥越城跡発掘調査概報』1979
古府	小松市古府町	長方形	1	米沢義光氏のご教示
白江梯川	小松市白江町	長方形	2	中島俊一・湯尻修平氏のご教示
漆町	小松市漆町	長方形	1	『漆町遺跡』I 1986
浄水寺跡	小松市八幡	長方形	1	垣内光次郎氏のご教示
敷地町後方	加賀市大聖寺敷地町	長方形	2	『敷地町後方遺跡発掘調査報告』1981

第3節 中世米光の検証

1 はじめに

手取川扇状地扇端部における古代・中世遺跡の調査例は少ない。文献史学における研究も稀少である。したがってここでは、周辺地域の状況をより確実に把握することにより、本遺跡の評価に言及したいと思う。第一に数少ない周辺遺跡の検証、第二に中世の要津であった今湊の評価、第三に文献史料の援用による評価、この三点を柱として小稿を進めたい。

本遺跡は11世紀後半より営まれる。礫質土壌の多い手取川扇状地であって立地を可能にしたのは、その扇端部であって、中・上流域よりは氾濫の度合いが小さかったことによろう。藤則雄氏の研究⁽⁴⁴⁾によると、本遺跡周辺は灰色ないし灰褐色土壌の分布地域で、表土も31~60cmと厚い。このような自然的条件も再度確認しておきたい。

2 周辺地域の様相

周辺の遺跡としては鹿島町遺跡と石立の立石があげられるのみである。考古学的な実体は不明であるが、今湊はしばしば中世史のなかにあらわれる。今湊については、『遊行上人縁起絵』⁽⁴⁵⁾や『時衆過去帳』⁽⁴⁶⁾を手がかりにしてその実像に迫ってみたい。また、本遺跡のテラノヤブ地区より出土したと伝えられる石造遺物があるので、周辺の遺跡とあわせてここで紹介しておきたい。

(1) 遺 跡

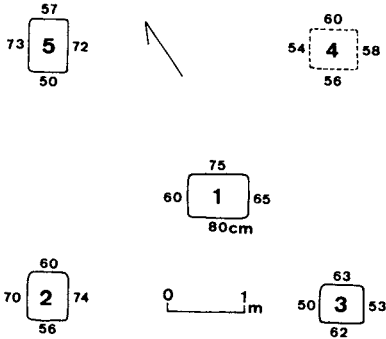
鹿島町遺跡 本遺跡の北約1kmの所にある。石川県立埋蔵文化財センターが昭和58年度に実施した詳細分布調査によって発見されたものである。現在の鹿島町をはさんで南北に3ヶ所遺物の散布が見られる。採集遺物には十数点の珠洲焼(片口鉢含む)と管状土錘がある。ともに詳細な時期は不明であるが、珠洲焼は中世のものである。

石立の立石 (第25・26図、図版第23・24) 本遺跡の北約2kmに存在する。古くから奇石としてその存在が知られており、『遊行上人縁起絵』の詞書にも正応4年(1291)の記述に石立の名が見えている。絵巻の原本の製作時期が嘉元2、3年(1304、1305)頃と考えられていることより、鎌倉時代後期にはすでに存在していたものと考えられる。その後は、文安5年(1448)の石清水八幡宮あての寄進状に笠間とならんで石立村の名が見える。このように、遺跡がすなわち村名となっているほどの象徴的な造形物であるが、その実体についてはほとんどわからない。

遺跡は、本遺跡と同じく手取川扇状地の扇端部に位置し、西は海岸線に近接している。現在の集落に対しては西北部に占地し、北側は水田および畑地となっている。

立石は5基の石柱より構成される。中央に1基、その周囲に4基が配置されている。これらの名称については、説明の便をはかるため第25図のとおり仮称したい。

中央の第1号立石は旧状を保っていると思われる。現高174cmを測り、上部はやや細くなる。南面する上部幅は53cm、東面の幅は36cmを測る。そして、南面に縦87cm、横37cm、深さ10cmの長方



第25図 立石の立石配置図 (略図)
数字は基底部の法量



第26図 第3号立石の刳り込み

形の刳り込みが見られる。立石の断面は長方形で、四面をつくり、各面とも平滑に面取りを施している。他の立石も同様に四方に面取りを施している。

第2号立石はやや東に傾いているが、基部はほぼ原位置にあると思われる。上部を欠失し、現高は136cmを測る。

第3号立石は直立し、四面ともきれいに面取りされている。上部を欠失している。現高は117cmを測る。東・西の側面には亀裂が見られる。この石でも第1号立石と同様、南面に刳り込みが見られる。(第26図) 幅28cm、深さ4cmを測る。第1号立石に比べて不整なことより、後世に模倣して造られたものと考えるのが妥当であろう。津田鳳卿の『笠間郷游記』(1841)は立石について法量や形状の詳しい記録を残している。ここでは第1号立石の刳り込みについて「陥面三尺許」と記述しているが、他の立石についての同様の記述はない。したがって第3号立石に見られる刳り込みは1841年以降の所産と考えて差しつかえなからう。

第4号立石は現状では最も低い。上部を欠失し、現高103cmを測る。引き抜こうとした形跡があり、西に大きく傾き原位置を失っている。

第5号立石は直立しており、原位置を保っていると思われる。四方とも面取りを施すのは他と同様であるが、西側の面がとりわけ整美な平坦面をなしている。

以上が立石個々の観察事項であるが、若干整理しておこう。

- ① 立石は鎌倉時代の後期には樹立されていたものと考えられる。
- ② 立石は5基の凝灰岩製の方形石柱よりなり、中央の一石を中心として規格性をもって方形に配置されている。
- ③ 中央の立石は断面でみる限り最も大きい。また、現高も最も大きい。その高さは、明治初年には八尺を測ったことが『皇國地誌』によって知られる。頂部に欠失したと思われる形跡がないので、基部は現在より70cm下位にあったと思われる。地表面はある時期に盛土されたものと考えられる。
- ④ 第1号、第3号立石の南面に方形の刳り込みがある。第3号のものは第1号に比べて粗いづくりで、後世の造作である可能性が大きい。

⑤ 中心をなす第1号立石の樹立状況より、立石は南側を意識して樹てられたものと考えられる。

この遺跡については考古学的な調査がなされたことはない。ただ、その名は相当に著名であったとみえ、古くは近世初頭に加賀藩第三代藩主の前田利常が家臣に命じて調査させたことが『微妙院夜話』にみられる。また、同藩の藩士津田鳳卿も19世紀の前半に村人を使って掘ったことが先述の『笠間郷遊記』に明らかである。そして、大正12年には東京から考古学者が来て、立石の1本を引き倒したとの記述が『笠間郷土史』にあるが、詳細は明らかでない。第4号立石のことであろうか。ともかく、いずれの「調査」においても、性格の解明に役立つものは出土しなかったようである。

立石は、「石の木宮」「石の木塚」「石の木」「石の柱」などとも呼ばれており、「石の木宮」という呼称からは、崇拝の対象となっていたことも知られる。また、戦前までは11月23日に石の木祭りという民間信仰が存在していたという。

立石の性格の解明にはまず測量調査が要求される。そして、考古学的、民俗学的に類例を検討することも必要である。本遺跡との関連を含めて、立石は古代末期から中世前期にかけての当地域の歴史解明の鍵を握っているといえよう。

テラノヤブ地区出土の石造遺物 (図版第22)

大正初期の耕地整理のさいテラノヤブ地区より出土したと伝えられる石造遺物は、現在米光町の佛屋敷に保管されている。合計9点あり、その内訳は五輪塔の空風輪1点、水輪4点、寶篋印塔の笠と相輪が各1点、笠塔婆型墓碑の寶珠が1点、板碑が1点である。

1と4～7は五輪塔である。1の空風輪は、高さ33cm、空輪の高さ14cm、最大幅17cm、風輪の高さ11cm、ほぞの高さ8cmを測る。4の水輪は、高さ13.5cm、最大幅20cmを測る。正面に円相が彫られ、そのなかには金剛界大日如来の種子「*v a m*」が刻まれている。5の水輪は、高さ22cm、最大幅30cmを測る。剝落が著しく、信仰標識の有無は確認できない。6の水輪は高さ22cmで、一部欠失する。円相を彫り、そのなかに「*v a m*」が刻まれている。5・6とも砂岩系のもろい石質である。7の水輪は、高さ16cm、最大幅23cmを測る。剝落が著しく、信仰標識の有無は確認できない。

8は寶篋印塔の笠である。高さ24cm、最大幅26cmを測る。隅飾突起はやや外開きに立ち上り、上端を欠失する。軒部より上に4段、下に2段の段型をつくっている。段型の高さは3.5cm、ほぞ穴の深さは11cmを測る。最上部には蓮弁が彫出されている。類例は、金沢市に2例、鶴来町と河内村に各1例あるという。⁽⁴⁸⁾ 3は寶篋印塔の相輪頂部である。現高26cm、寶珠の高さ11.5cm、最大幅12cmを測る。上より寶珠、請花がのこり、以下欠失する。

2は笠塔婆型墓碑の笠上部にのる寶珠である。寶珠の高さ36cm、最大幅23cm、方形台部の厚さ7cmを測る。

9は地藏像を陰刻した板碑である。下部には蓮弁の彫出しが見られる。高さ39cm、下端部の幅20.5cm、厚さ7.5cmを測る。蓮弁は下端より7.5cmの高さまで見られる。地藏像板碑の類例として

は鶴来町一閑院の天正14年銘がある⁽⁴⁹⁾。

遺物の時期は、1～3を近世、他のものについては室町時代後期として捉えておきたい。

(2) 『遊行上人縁起絵』より

『遊行上人縁起絵』は時宗の開祖一遍上人と二祖他阿上人の事蹟を絵巻にしたものである。全10巻よりなり、前半の4巻17段を一遍上人に、後半の6巻36段を他阿上人の伝記にあてている。いまこの絵巻をとりあげるのは、このなかの第5巻第4段および第5段に本遺跡周辺の状況が描かれているからである。

絵画史料をどう読むか 絵巻物の研究は従来、主として古筆学や美術史学の分野であった。しかし、歴史学の分野でも、民俗学的方法論を援用して絵巻物のなかに歴史の生々しい側面を読みとろうとする試みが、網野善彦氏や黒田日出男氏によって始められている⁽⁵⁰⁾。黒田氏は、絵巻物を「絵画史料」として捉えたうえで、これを歴史学に生かす、「絵画史料学」ないし「絵画史料論」を提唱されている⁽⁵¹⁾。考古学の分野においては、絵巻物に立脚したいくつかの研究があるが、まだその門前に立ったばかりである。生き生きと眼前に展開される多くの描景をどう検証するか、そしてどのように取り入れて行くかが今後の課題である。

さて、『遊行上人縁起絵』⁽⁵³⁾には、本遺跡周辺の状況として次の4景が描かれている。各景の主題を列記しよう。

第5巻第4段の1 加賀国今湊の悪事をはばからぬ小山律師の邸宅

第5巻第4段の2 正応4年8月、小山律師道場に來たり、他阿、律師に昼食を与う

第5巻第4段の3 小山律師改心して往生を遂ぐ

第5巻第5段 藤塚より宮腰へ移る時、住人の争いをさけて洪水の河を徒歩で渡るに、不動、毘沙門の加護をうく

各景は次のように読みとることができる。

第5巻第4段の1 時期は正応4年8月、場所は加賀国今湊の小山律師邸である。風景の中心は小山律師で、着物の前をはだけてだらしなくすわり鷹を見ている。登場人物は、律師の他に、従者が縁側に2人、庭に1人見られる。人物以外では、縁側に犬が一匹、庭のとまり木の上に鷹が描かれている。その他には、庭に木を格子状に組んだ施設があり、中に人の顔が見える。

第5巻第4段の2 時期は正応4年、場所は今湊の時宗道場である。風景の中心は他阿上人で、小山律師に昼食を与えている。登場人物はこの2人の他に、他阿上人側に僧が8人(主屋内)尼僧が5人(縁側)、女性が1人(縁側)、庭に女性が4人描かれており、律師側に僧が8人(主屋内)、折烏帽子の男性が4人(主屋内に1人と縁側に3人)、庭に折烏帽子の男性が3人描かれている。そして、中央には男が4人描かれている。やや離れて、馬をひく男と3人の男が見える。

第5巻第4段の3 時期は正応4年8月、場所は小山律師邸か。風景の中心は2名の僧で、亡くなった律師の供養をしているものと思われる。登場人物は他に男性が3人(縁側)描かれている。庭には松の木があり、築山、小川、橋も描かれている。

第5巻第5段 正応4年、場所は洪水の大河である。風景の中心は、他阿上人一行で、洪水の

第四段

同四月八日、加賀国今湊と云所に、小山律師なにかしとかやいへる人、僮僕あまた引具して、道場へ詣ぬ。この人ハ罪業を、それす、悪事には、からす、破戒無慚にして、邪見放逸なり、いか、ふるまはんすらんと、諸人目もあやに思あへるに、日來の気色にはいとかはりて、詞も出さ、りけれハ、こハいかにとみえけるに、中食の折節なりけれハ、聖飯を捧て、あの御房、これなれといはれけるを、かしこまり恐たる躰にて、うけとりて喰たりけるを始なりける。十念うけ、法門聴聞して後ハ、悪行ことくくと、めて、一向專修の行者と成けるか、齡すてにたけて、所勞つき侍ぬ、明医湯薬をほとこせとも、生死の業病ハいやしかたく、徒類筋力をつくせとも、無常の殺鬼ハふせきかたし。つるに臨終正念にして、往生の素懷をそとにける。紅蓮の冬の氷ハ、心水より結といへとも、名号の智火これを消し、劔樹の秋の霜ハ、罪根より積といへとも、撰取の光明是を滅す。如此の類、聖の教化にあつかりて往生しける人、其数をしらすとぞ。

或人の返事によみてつかハさ
れる、

南無阿弥陀ほとけの身とハ極

樂のはちすの花のひらけてそなる

(絵)

第五段

さて藤塚といふ所に暫逗留ありて、たち給はむとしける。其日の夕より、雲くもり風あれて、雨よもすからふりて、朝ハ空さりけなく晴にけれハ、宮腰へこえ給に、小河といふ名のミして、岩高く、瀬早き大河あり。水のおもおひた、しくまさりて、かちよりハこゆへうもあらぬ気色也。疥癩の類、種々の方便を廻して、旅人をわたさむとしけるに、其辺の住人等、船をかまへて、我わたさむといひあらせふ程に、旅人等、兩岸にそ徒に立りける。さて一方より聖を渡したてまつらんといひけるに、聖曰、あらせひいまたしつもらざらんハ、渡さるへきに非ず、爰にて又日を暮すへきにあらねハ、是こそ最後にて侍らめとて、聖の腰に縄つけつ、道俗時衆をのく取つきてそ渡りける。上人をはしめて、同音に念佛する声、空にひき、浪にと、ろく斗也。而に青天たかく晴て、紫雲斜にたなひけり。不動尊、多門天、碧落の雲に透て、蒼溟の波にうつろひ給とみえし程に、洪水すみやかに浅瀬になりて、安かにそ渡

つき給にける。即藤塚、石立など云所々の人、おほく耳目をおとろかしけるとなん。昔仁寿年中、智證大師入唐の時、龍頭の船を蟻ひ、鼈波に纜をときて、万里の煙浪を陵給しに、暴風にはなたれて、はからざるに流球国にうちよせられ給へり。異類むらかりあつまりて、同朋伴侶たちまちにあやまたれなんとす。爰和尚密印に住して、懇祈をこらし給によりて、黄色明王、白髮老翁新羅大明神の軸に現して、悪風をと、むとみえたり。彼ハ上古の事なれハいふに及す、代末にくたりて、かゝる奇瑞をあらはし給事、ありかたくそ覺侍る。

ある時結給頌曰、

願力道不嫌余念西方信無有雜乱
名号外不求臨終稱念内即遂往生
応无所住而其心

またてみるすかたはかりやあり
あけの月にわかれぬなこりなる
へき

又よみたまひける、

山の端にこ、ろの月を

さきたて、おいのすかたそ

西にかたふく

(絵)

河を歩いて渡っている。登場人物は、河の中に他阿上人をはじめ僧が20人見られる。陸では今湊側に武装した兵士が9人と旅人が3人描かれている。宮腰側には武装した兵士が11人と旅人が2人描かれている。ここで対照的なのは、今湊側の兵士が折烏帽子を被っているのに対し、宮腰側の兵士は頭巾を被っていることである。その他に、他阿上人一行を加護する不動と毘沙門が中央上部に描かれている。

さて、次に、以上の観察をもとに検証に入ろう。まず第4段の1景であるが、ここに登場する小山律師なる人物は文献の上では見出すことができない。この絵のなかで読みとることができるのは、小山律師が出家の身でありながら、狩猟を行なう「罪業」を恐れない人物であるということである。このこと自体は歴史的事実と関わらないと思われるが、次の絵において、律師が時宗に結縁するための効果的な場面である。見逃すことができないのは、黒田日出男氏が注目されているこの絵の中の木組みの施設である。施設のなかには人物(男性か)の顔が描かれており、その人物は烏帽子をつけていない。黒田氏は、中世の在地領主が籠かごのような拘禁施設を屋敷のなか(54)に有していたことを検証できる有力な資料であると評価されている。

第4段2景は今湊の道場である。ここでは僧とともに尼僧も描かれている。そして法話を聞く女性たちは尼僧の背後に描かれている。黒田日出男氏は、絵のなかにおける男女の描出方法や位置の違いは、時衆教団が規律を確立するために、男女間に厳しい区別を設けていたことを示すのではないかと推察されている。(55)男女ともに今湊に時衆がいたことは『時衆過去帳』により検証できる。第7表に掲げたのは今湊および元吉の時衆一覧である。絵の時期よりやや下るものの、加賀の時衆のなかでは有数の密集地であったことがわかる。(56)今湊西念寺、今湊本誓寺とあるのは時宗寺院の存在を裏付けるものである。また、元吉にも聖号寺という寺院があったことが『時衆末寺帳』によって知られる。

最後に第5段の場面を見てみよう。ここでは他阿上人以下約20名の一行が洪水の河を徒渡るのであるが、兩岸に描かれた兵士の被りものの違いが何を意味するのか不明である。一行の目的地は宮腰である。ここはいうまでもなく今湊に劣らない中世の要津であり、流通の拠点であった。『時衆過去帳』には往生僧尼の名を見ることができる。

今湊の評価 絵巻において今湊が3景、手取川扇状地の大河が1景描かれているのは、時宗にとって重要な地であったことを示している。第8表は、本遺跡の存続時期と周辺の遺跡や集落等を比較したものである。今湊、藤塚という、中世のなかで長期にわたって存続した中核的集落が、いずれも16世紀前半で消滅している。文献によると前者は享祿4年(1531)にその名を見ることができるが、天正19年には湊浦という名が見えている。後者は天文5年(1536)まで確認できる。『天文日記』に「藤塚之内河原」が「昔ハ過分の所」であったが、今は30石ばかりの地となってしまったと見えるのは、藤塚の衰退を明白に物語っている。藤塚を元吉の旧名とみる考え方もあるが、元吉は藤塚と並行して存在する。

今湊、藤塚の消滅した原因は、その立地に求められる。ともに現在の小松砂丘のなかであり、中世に日本海沿岸を席捲した大規模な砂丘の移動によるものと考えられる。似たような状況を看

第7表 今湊・元吉の時衆一覧

遊行上人	在位年代	往 生 僧 衆	総数	往 生 尼 衆	総数
開祖智真	~1289		0		0
2世真教	1289~1304		1		0
3世智得	1304~1319		0		0
4世吞海	1319~1325		0		0
5世安国	1325~1326		0		0
6世一鎮	1326~1338		3		0
7世託阿	1338~1354		2		1
8世渡松	1354~1356	漢阿(今湊、文和4・正・7)	1		0
9世白木	1356~1367		2		0
10世元愚	1367~1381	漢阿(今湊、永和4・10・27)	8		0
11世自空	1381~1387	哀阿(元吉、至徳3・2・12)	7		0
12世尊親	1387~1401	漢阿(今湊、嘉慶3) 漢阿(今湊、応永3・9・22)	5		0
13世尊明	1401~1412		0		0
14世太空	1412~1417		4	大一房(今湊)	7
15世尊恵	1417~1429	弥阿(元吉) 宣阿(今湊) 漢阿(今湊) 漢阿(賀州今湊) 眼阿(元吉) 漢阿(今湊)	42	三一房(今湊西念寺) 見一房(元吉) 忍一房(今湊)	20
16世南要	1429~1440		12	為一房(今湊)	5
17世暉幽	1440~1467	哀阿(元吉住持) 漢阿(今湊)	14		3
18世如衆	1467~1471		1		0
19世尊皓	1471~1495		0		0
20世一峰	1495~1497		0		0
21世知蓮	1497~1513	其阿(今湊本誓寺) 漢阿(賀州本誓寺)	4		0
22世意楽	1513~1514		0		0
23世称愚	1514~1518		0		0
24世不外	1518~1520		0		0
25世仏天	1520~1528		2		1
21世空達	1528~1536	弥阿(賀州本誓寺)	1		0
27世真寂	1536~1549		3		0

芝田 悟『多太神社境内遺跡』の加賀時衆一覧表より抜粋

取できる遺跡に、県内では⁽⁵⁷⁾普正寺、⁽⁵⁸⁾道下元町、⁽⁵⁹⁾寺家の各遺跡がある。各遺跡は、表に示したように少しずつ廃絶時期が異なる。寺家遺跡、普正寺遺跡はともに早い。このうち普正寺遺跡については⁽⁶⁰⁾詳細な記録が残されており、⁽⁶¹⁾その研究も明らかにされている。

今湊の位置については、現在の美川町南部とみてよからう。藤塚は手取川をはさんで北側に求められる。手取川扇状地を流れる川は、中世には少なくとも三筋あったと考えられる。それは今湊を河口とする流れ、石立の南に注ぐ流れ、劔崎の南を通り小河の南に注ぐ流れである。第27図に示した河道は、明治42年作製の20,000分の1地形図と昭和22年撮影の空中写真をもとに復元したものである。これら三筋の他に、現在の手取川近くに一筋想定されるが、その位置は復元しがたい。いずれにせよ、三筋のうちいずれが本流ということはなく、いずれも大雨のさいには大河となつてたびたび耕地の荒廃を招いたと思われる。

『遊行上人縁起絵』や『時衆過去帳』『時衆末寺帳』によって今湊が時宗布教の重要な拠点であったことを知りうる。時宗の二世他阿上人は、開祖一遍上人が果たしえなかった北陸の遊行賦算を

第8表 遺跡と集落の変遷

時代 世紀		平 安		鎌 倉		室 室		町		安土 桃山	江 戸
		11	12	13	14	15	16	17			
遺 跡	米光 萬福寺		■		■	■	■	■	■		
	徳光 ヨノキヤマ		■		■	■	■	■	■		
	石立の立石			---	■						
集 落	今 湊		---	■	■	■	■	■	■		
	藤 塚			■	■	■	■	■	■		
	元 吉					■	■	■	■		
	蓮 池							■	■		
	長 屋					■	■	■	■		
	鹿 島								■	■	
	北 島			■	■	■	■	■	■	■	
砂 丘 遺 跡	普正寺					■	■	■	■		
	寺 家		■	■	■	■	■	■	■		
	道下元町					■	■	■	■		

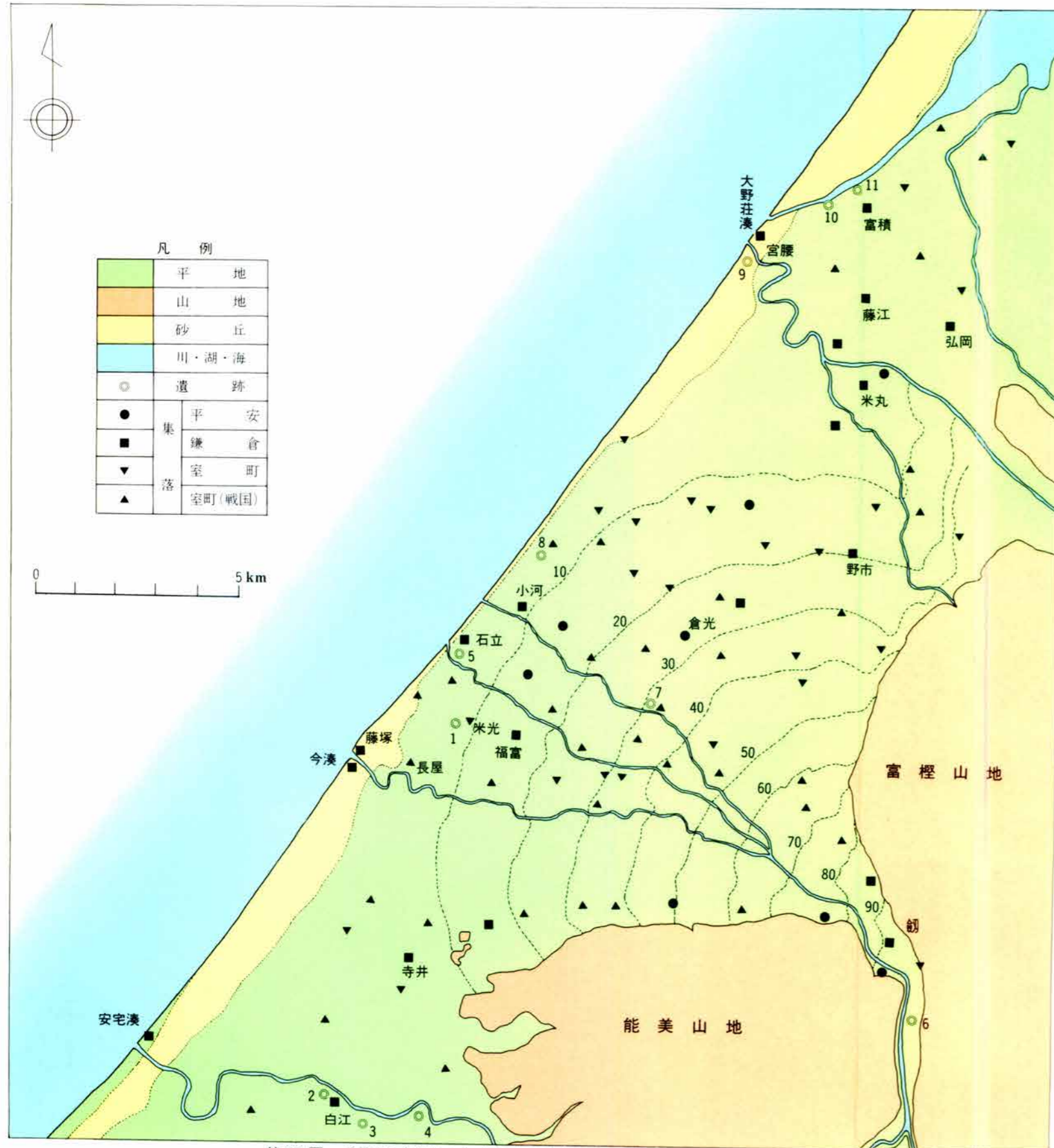
正応三年に越前から始めた。そして、翌正応四年には加賀に入り、今湊の地に橋頭堡を築き、賦算の拠点としたのである。その理由のひとつには、今湊が交通・経済の拠点として確固たる地位にあったことがあげられよう。しかし、その今湊も16世紀前半には砂丘の被覆するところとなり、二度と歴史に名前を見せることはない。本遺跡の終焉も、時期をほぼ同じくしており、両者の間に少なからぬ連関を求めることは十分可能なことである。

3 文献史料からみた米光萬福寺遺跡

米光および萬福寺に関してはいくつかの文献史料がある。文献史料第2にその主なものを掲げた。本項では、両者に関する記録を編年的に見て、その果たしてきた役割を明らかにしたい。

まず、『加能郷土辞彙』によると、蔭涼軒日録長禄4年(1460)8月19日に「加賀国萬福寺祖傑云々。御判被遊」、文明18年(1486)5月20日に「加賀国萬福寺入院円怒首座云々」とある。それ以降は第8表に示したとおり、『兼頭卿記』『宣秀卿記』『守光公記』『御府記録』『賀州本家領謂付日記』『天文日記』にその名を散見できる。

萬福寺については、文明9年(1477)には皇室の日食料所であったことがわかり、所在地は加賀



番号	遺跡名
1	米光萬福寺遺跡
2	白江梯川遺跡
3	漆町遺跡群
4	佐々木遺跡群
5	石立の立石
6	白山町遺跡
7	劔崎遺跡
8	徳光ヨノキヤマ遺跡
9	普正寺遺跡
10	無量寺遺跡
11	戸水C遺跡

第27図 手取川扇状地を中心とする中世の主要遺跡および集落分布図

1/140,000

『宣秀卿記』

日蝕料所加賀国石河郡米光村内西方事、為御療治之賞、所被預下法印定盛也、沙汰本役、於下地者、永可被全領知者、天氣如此、悉之以狀、

延徳二年十二月廿八日

(竹田) 定盛法印房初ハ不書宛所也、

(中御門宣秀) 左少弁判、表同判也、

右綸旨、同三年二月十四日伯卿以使佞仰送案、任彼案不書宛行、定盛ハ医師竹田也、

右綸旨書進之處、伯卿云、宛所可為本人如御承知、被成綸旨、為其准擬不可為過分之由、都督卿申之云々、此上者書改不猶可謂過分歟、殊御房字為之如何、仍御ノ字ハ如無ニ書了、

『守光公記』(永正十六年二月二十九日の条)

(飯尾貞運) 月蝕料事、近江方へ申遣之、

月しよくれうたひくおほせつけられ候へとも、うけこたへ申候物も候ハす候、一かう寺うち正たいなく、寺もたいてん、御ちきむにせられ候て、寺をもこうりうし候へと、ほん寺へもおほせいたされ候、御ちきむのほうしよまいらせられ候やうに申され候へく候、このうちしゆこわりやう候ほとに、かさねて御下知を申され候へく候、このやう御心之候て、むろまちとのへ申され候へく候よし、申とて候 かしく、

松岡寺 光教寺 本泉寺 願得寺 玉鉾 米光御百姓中
三月十一日(中略)月蝕賀州御下知六通、近江守以使者、相送者也、

『守光公記』

加州米光内日月蝕御料所事、近年萬福寺公用一向無沙汰之由、

先度雖被成御下知、猶以同篇之条、為御直務被差下上使上者、如先々巖蜜年貢以下可致沙汰之旨、可相触被百姓等之由、所被仰出之狀如件、

(巻) 永正十六年三月三日

(飯尾) 貞運
(齋藤) 基雄

石河郡御中

『御府記録』甲百十五

月蝕料所萬福寺事、今度依国之錯乱、彼在所買得之由、掠申之族依有之、卒爾被出女房奉書了、雖然沽却儀不実云々、早知先々致再興、弥可奉祈 宝祚長久旨、為本寺禪加下知之由、天氣候所也、悉之以狀、

天文五年七月九日

東福寺法幢院(○奉者の記載はない)

『天文日記』(天文八年十一月十一日の条)

東福寺末寺加州萬福寺領石川郡米光事、從郡中無紛之由連署候間、任其旨、遣折幣者也、

『東山御文庫記録』甲百七

加賀国萬福寺領所之事、帶勅裁当知行云々、殊月蝕料、守先例、至去々年致其沙汰候之處、東福寺法幢院、以本末号、始指下俗代官、競望候之条、太以無其謂、所詮、任武家下知之旨、退彼妨、弥令全領知、宜奉祈宝祚長久之由、天氣所候也、仍執如件、

天文廿二年六月三日

(高岳金松) 當時住持

(市原為忠) 右中将在判

第9表 萬福寺および米光関係主要年表

日付		萬福寺 (文献)	米光 (文献)
年号	西暦		
文明9年7月1日	1477	この日の日食に加賀萬福寺からの日食料をあて御所を裹む (『兼頭卿記』)	
延徳2年12月28日	1490		竹田法印定盛が後土御門天皇を祈禱によって治療した恩賞として皇室領日食料所「米光村西方」の代官職に任命される (『宣秀卿記』)
永正14年	1517	萬福寺が石河那米光村の代官を務める (『守光公記』)	
永正16年3月3日	1519	米光の日月食料所代官を務めていた萬福寺に公用無沙汰が続いていたため、これを解任し直務とする旨が伝えられる (『守光公記』)	
永正16年3月27日	1519	直務はとりやめになる (『守光公記』)	
天文5年7月9日	1536	萬福寺領のうちを買得したと奏上した者に、安堵の女房奉書を与えたが、萬福寺は売却しないと申し立てたので、寺領を再興するよう、本寺である山城東福寺法幢院に繪旨を下した (『御府記録』)	
天文6年	1537		延暦寺無動寺領米光で石黒孫左衛門尉の横領がある (『賀州本家領謂付日記』)
天文8年11月11日	1539		本願寺が、石川郡米光が東福寺末寺の加州萬福寺領に間違いないかを石川郡中に確かめ、間違いないとの連署状を得る (『天文日記』)
天文22年1月25日	1553	本寺法幢院が本願寺に物を進めて、末寺の萬福寺に俗代官を派遣することを依頼する (『天文日記』)	
天文22年4月26日	1553	法幢院長老が本願寺に証如上人を訪ね、同日萬福寺からも本願寺に一束一本を進めて法幢院の無法を訴える (『天文日記』)	
天文22年6月3日	1553	萬福寺に対し繪旨が発給され、將軍の裁決により法幢院の代官派遣が中止される (『天文日記』)	

とある。日食料所とは、日食にあたって、穢れの光線を遮蔽するため御所を包むための庭などを負担する料所のことであるという。これについては奥野高広氏の研究⁽⁶³⁾があり、小稿でもこれに少なからず依拠している。

米光の名は延徳2年(1490)にはじめて知られる。この年、竹田法印定盛が皇室領日食料所「米光村西方」の代官職に任命されている。そして、永正14年(1517)から同16年(1519)の史料によると萬福寺が米光村の代官を務め、米光が日月食料所であったことがわかる。

天文5年(1536)の史料では萬福寺が山城東福寺法幢院^{ほうとういん}の末寺であることがわかる。したがって、萬福寺は臨濟宗の寺院であることが明らかになる。翌天文6年(1537)には米光が延暦寺無動寺領であるとの記録がある。しかし、同8年(1539)には、石川郡米光が萬福寺領に間違いないとの記

録がある。その後、萬福寺は本寺法幢院と俗代官の派遣をめぐって紛糾する。

ここで主要な記録を整理して編年的にみてみよう。

- 1477 (文明9年) 加賀萬福寺は皇室領日食料所を支配していた。
- 1490 (延徳2年) 皇室領日食料所は米光村西方である。
- 1517 (永正14年) 萬福寺は石河郡米光村の代官である。
- 1519 (永正16年) 萬福寺は米光の日月食料所の代官である。
- 1519 (永正16年) 米光の百姓は松岡寺、光教寺、本泉寺、願得寺、玉鉾の百姓らとともに月食料を進める。
- 1536 (天文5年) 萬福寺の本寺は山城東福寺の法幢院である。
- 1537 (天文6年) 延暦寺無動寺は米光に領地を所有している。
- 1539 (天文8年) 賀州萬福寺は東福寺の末寺で、石川郡米光に領地をもつ。

さて、萬福寺は15世紀の後半には皇室領日月食料所を支配する立場にあったことがわかる。そして、16世紀の前半に再び同料所の代官職にあることが明らかである。しかし、この間に、竹田法印定盛が米光村西方の代官職に任命されているのはいかなる事情によるものか不明である。東福寺法幢院と萬福寺との本末関係は、16世紀前半にいたるも続いており、日月食料所の代官職も依然務めている。注目すべきは、萬福寺と並んで、真宗の大坊主であった波佐谷松岡寺、山田光教寺、若松本泉寺、清沢願得寺が日月食料を進めていることである。真宗寺院が日月食料を皇室に進めるようになった理由として、奥野高広氏は、皇室と結ぶことによって教線の拡大をはかろうとした蓮如の見通しがあったのではないかと推論されている⁽⁶⁴⁾。15世紀後半より抬頭した一向一揆勢力と萬福寺との関係は詳細に検討する余地がある。永正16年、萬福寺領内において一向宗門徒農民による年貢の滞留がみられるのは、両者の関係を知るうえで興味深い。

史料による限り、萬福寺は少なくとも天文22年まで日月食料所の代官職にある。ただし、天文6年に、延暦寺無動寺が米光に領地をもつという記録があるのは、萬福寺領とどう関わるのか検討を要する。

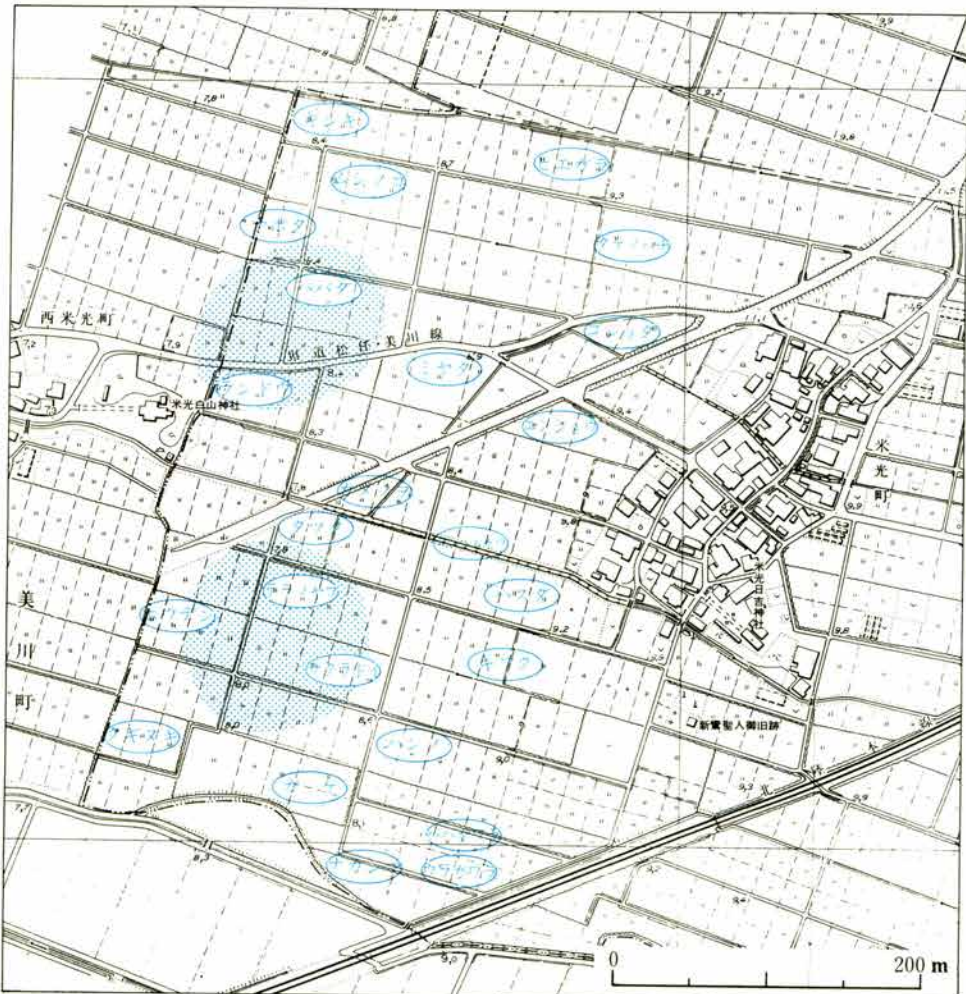
最後に考究すべき課題は萬福寺と米光の関係、すなわち萬福寺の所在地である。本遺跡は、現在の行政区画でいう石川郡美川町西米光に接しており、これを現在でも「西方」と呼ぶことはすでに述べた。そして、この「西方」が萬福寺の治める皇室領日月食料所にあたることは、『宣秀卿記』に明らかである。文献より知りうる萬福寺の存続時期は、15世紀後半から16世紀中葉である。2ヶ所に分かれた本遺跡のうちテラノヤブ地区は、14世紀から16世紀前半にかかる資料を出土している。したがって、その後半部分は、文献上の萬福寺の時期に重なり合う。同地区における遺跡の広がり、約10,000㎡に及ぶ。手取川扇状地扇端部における中世遺跡としては稀有の規模である。このまぎれもない萬福寺領内において、中世後半期を通じて営まれた大規模な遺跡については、同寺と極めて深い関係を有する施設の存在を認めないわけにはいかない。可能性のあるもののひとつに、皇室領日月食料所を中心とする所領の管理施設、もうひとつに萬福寺そのものをあげることができよう。

現段階で、積極的な資料のないまま結論を披歴することは避けなければならないが、ひとつの推論として、萬福寺跡が米光にあり、本遺跡に包括される可能性を指摘しておきたい。上述の遺跡の存続時期や規模のほか、「テラノヤブ」という小字名もこの推論を支えるひとつの証左として確認しておく必要がある。

第28図に示したのは室野清氏の調査にかかる遺跡周辺の小字名である。「テラノヤブ」は「寺の藪」であろうか。北陸本線の北側では「ババガワラ」「ウラガワラ」「ナカシマ」「ガケ」「サクラドイ」などの名が復元され、かつては河道であったことを知りうる。北側にみえる「ランドウ」「ミヤタ」などの名も注意を要しよう。

最後に、消化しきれなかった二、三の課題を提示しておこう。

まず、萬福寺の創建と廃絶の問題である。文献史料からは15世紀後半から16世紀中葉の存続を確認でき、遺跡の存続時期は11世紀後半から13世紀前半代と14世紀初頭から16世紀前半の2時期



第28図 遺跡周辺の小字名（室野 清氏の調査による）

1/5,000

が明らかになっている。上述の推論に立脚して両者を考え合わせると、少なくとも15世紀の後半に存在したことは明白である。加賀に鎌倉新仏教が伝わったのは、13世紀末～14世紀初頭の頃と言われる。⁽⁶⁵⁾このことと、遺跡の時期を重ねて考えると、14世紀代のうちに萬福寺が臨濟宗寺院としての存在を確立していた可能性は十分に考えられる。

そして、廃絶の時期については、考古学資料、文献史料ともに16世紀前半に姿を消すことより、ほぼこの時期とみて大過ないと思われる。その理由については、最も大きなものとして、一向一揆勢力の抬頭を指摘しておきたい。一向宗門徒の領民による年貢の滞留はその一端を示すものである。天文8年以降の『天文日記』は本願寺の役割を明らかにしている。萬福寺が本寺法幢院と俗代官の派遣をめぐって軋轢を惹起したさい、本願寺に贈り物をして解決を依頼しているのは、本願寺＝一向一揆勢力がすでに看過しえないほど大きな存在となっていたことを如実に物語っている。臨濟宗の寺院が、増加する一向宗勢力のなかで命脈を保つのは容易なことではなく、一揆の成立以来程なく姿を消したようである。また、これとほぼ軌を一にして、交易の中核として機能した今湊や藤塚が廃絶するのも、留意しておく必要があろう。

11世紀から13世紀の遺跡をどう把握するか。これは、ひとつにはすでに第3章第3節において述べられているように、白山本宮の神主職にあった上道氏の手取川扇状地扇端部南半の開発階梯を示すものとしての理解が可能である。もうひとつには、萬福寺につながる信仰の対象としての施設、すなわち鎌倉仏教以前の草堂や真言・天台系の密教寺院の存在を想定する考え方⁽⁶⁶⁾である。もちろん、両者は相反するものではないから複合した形を考えることは十分に可能である。ここではともに可能性を指摘するにとどめておきたい。

小稿では、考古資料より、絵巻や文献史料に立脚するところが大きかった。したがって、十分な咀嚼を経ないまま、いくつかの推論を提示してきた。これらについては、考古学的にも文献史的にも十分な批判をうけることを希求しているが、とりわけ、文献史学分野から宗教的な展開を中心にした本遺跡をとりまく様相が明らかにされることを期待してやまない。

註

- (1) 山本 博『井戸の研究』綜芸社 1970 京都。小都 隆「草戸千軒の井戸」『考古学研究』第26巻第3号 考古学研究会 1979 岡山。など。
- (2) 水野正好「竹筒をのこした一井とその秘呪」『草戸千軒』No.36 広島県草戸千軒町調査研究所 1976 福山。など。
- (3) 宇野隆夫「井戸考」『史林』第65巻第5号 史学研究会 1982 京都。
- (4) 註(3)に同じ。
- (5) 宮本哲郎編『金沢市西念・南新保遺跡』金沢市教育委員会 1983 金沢。
- (6) 福島正実氏の教示を得た。
- (7) 平田天秋・河村好光・戸潤幹夫・芝田 悟・東四柳史明『金沢市戸水C遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1986 金沢。
- (8) 湯尻修平・左古 隆『志雄町杉野屋ろくばわり遺跡』石川県教育委員会 1975 金沢。
- (9) 註(7)に同じ。
- (10) 高橋 裕『羽咋市深江遺跡(第1・2次)』石川県教育委員会 1975 金沢。

- (11) 小嶋芳孝編『寺家遺跡発掘調査報告書』Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター 1986 金沢。
- (12) 小嶋芳孝氏の教示を得た。
- (13) 湯尻修平『鹿島町徳前C遺跡調査報告(Ⅰ)』 石川県教育委員会 1978 金沢。
- (14) 出越茂和編『金沢市畝田・無量寺遺跡』 金沢市教育委員会 1983 金沢。
- (15) 楠 正勝・宮本哲郎『金沢市大友・近岡遺跡』 金沢市教育委員会 1984 金沢。楠 正勝氏は井戸の型式も掘立柱建物同様に遺跡の性格を規定するとし、律令期の集落に伴う井戸を規定された。
- (16) 増山 仁『金沢市畝田ナベタ遺跡』 金沢市教育委員会 1986 金沢。
- (17) 田嶋明人編『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター 1986 金沢。
- (18) 四柳嘉章「能登の中世荘園村落における信仰一穴水町西川島遺跡群の調査から一」『石川考古学研究会々誌』第27号 1984 金沢。など。
- (19) 米沢義光「佐々木A遺跡」『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』 石川県立埋蔵文化財センター 1985 金沢。垣内光次郎氏の教示を得た。
- (20) 註(17)に同じ。
- (21) 註(19)文献に同じ。
- (22) 田嶋正和他『勅使館跡』 加賀市教育委員会 1986 加賀。
- (23) 中島俊一『辰口町・高座遺跡発掘調査報告』 石川県教育委員会 1978 金沢。
- (24) 註(7)に同じ。
- (25) 北野博司氏、辰口町教育委員会滝上秀明氏の教示を受けた。
- (26) 平田天秋・西野秀和他『門前町道下元町遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1985 金沢。
- (27) 越坂一也編『永町ガマノマガリ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1985 金沢。なお、今年度本報告が刊行されるので詳細は報告書で確認されたい。
- (28) 平田天秋・西野秀和・越坂一也『三井小泉遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1986 金沢。
- (29) 浜野伸雄他『中島町小牧・外遺跡』中島町教育委員会 1981 石川県中島町。
- (30) 栃木英道氏の教示を得た。
- (31) 高 一男『羽咋市寺家チョウエイジ遺跡』 羽咋市教育委員会 1978 羽咋。
- (32) 湯尻修平・越坂一也『羽咋市気多社僧坊跡群』 石川県立埋蔵文化財センター 1985 金沢。
- (33) 註(5)による。
- (34) 湯尻修平氏の教示を得た。
- (35) 湯尻修平氏の教示を得た。
- (36) 楠 正勝・出越茂和『金沢市近岡ナカシマ遺跡』 金沢市教育委員会 1986 金沢。
- (37) 南 久和・高堀勝喜『金沢市黒田町遺跡発掘調査報告書』 金沢市教育委員会 1975 金沢。
- (38) 増山 仁『金沢市千木イワスクリ遺跡』 金沢市教育委員会 1985 金沢。
- (39) 福田弘光・荒木繁行・米沢義直「金沢市松村町発見の井戸枠について」『石川考古学研究会々誌』第11号 石川考古学研究会 1968 金沢。
- (40) 北野博司他『佐々木ノテウラ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1986 金沢。
- (41) 田嶋正和他『敷地町後方遺跡発掘調査報告』 加賀市教育委員会 1982 加賀。
- (42) 水野和雄「日本石硯考—出土品を中心として—」『考古学雑誌』第70巻第7号 日本考古学会 1985 東京。
- (43) 西口陽一「人・硯・石剣」『考古学研究』第32巻第4号 考古学研究会 1986 岡山。
- (44) 藤 則雄「位置、地形、地質」『松任市史』現代編・上巻 松任市役所 1981 松任。
- (45) 宮 次男・角川源義編『遊行上人縁起絵』新修日本絵巻物全集 第23巻 角川書店 1979 東京。
- (46) 次の二文献による。芝田 悟『多太神社境内遺跡』多太神社 1984 小松。大桑 斉「百姓の持たる国」『加賀市史』通史上巻 加賀市役所 1978 加賀。
- (47) 宮 次男『遊行上人縁起絵の成立と諸本をめぐって』『遊行上人縁起絵』新修日本絵巻物全集 第23巻 角川書店 1979 東京。
- (48) 櫻井甚一「中世墓地の石造遺物」『普正寺』 石川考古学研究会 1970 金沢。
- (49) 櫻井甚一『能登と加賀の板碑文化』 石川県図書館協会 1958 金沢。

- (50) 神奈川大学日本常民文化研究所編『新版絵巻物による日本常民生活絵引』 平凡社 1984 東京。黒田日出男『姿としぐさの中世史』 平凡社 1986 東京。網野善彦『異形の王権』 平凡社 1986 東京。
- (51) 註(50)の黒田1986文献。
- (52) 安田龍太郎「絵巻物にみえる器類と考古資料との比較研究序論」『文化財論叢』 同朋舎 1982 京都。奈良国立文化財研究所編『木器集成図録』近畿古代篇 奈良国立文化財研究所 1985 奈良。
- (53) 註(45)文献所載の光明寺本による。
- (54) 註(50)の黒田1986文献123頁～127頁。
- (55) 註(50)の黒田1986文献22頁。
- (56) 註(46)文献。
- (57) 芝田 悟・垣内光次郎『普正寺遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1984 金沢。
- (58) 平田天秋・西野秀和編『門前町道下元町遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1985 金沢。
- (59) 註(11)文献。
- (60) 天龍寺文書の大野莊年貢算用状。
- (61) 浅香年木「一向一揆の展開と加賀国大野庄」『北陸史学』第三十号 北陸史学会 1981 金沢。
- (62) 註(46)大桑1978文献。
- (63) 奥野高広「日月食料所」『日本歴史』第426号 日本歴史学会 1983 東京。奥野氏によると日食料所とか日月食料所という記載があるが、月食料所というのが正確であるという。
- (64) 註(63)文献。
- (65) 東四柳史明「中世加賀・能登の争乱」『加賀能登の歴史』 講談社 1978 東京。
- (66) 東四柳史明氏のご教示による。

参考文献（五十音順）

- 浅香年木・田川捷一他『角川日本地名大辞典』17 石川県 角川書店 1981 東京。
- 川北村史編さん委員会編『川北村史』 川北村役場 1970 石川県川北村。
- 高堀勝喜・櫻井甚一他『普正寺』 石川考古学研究会 1970 金沢。
- 中井安治『笠間郷土史』 松任市笠間公民館 1986 松任。
- 藤 則雄「日本海沿岸の海岸砂丘」『日本海域研究所報告』第5号 金沢大学日本海域研究所 1969 金沢。
- 松任市史編さん委員会『松任市史』現代編・上巻 松任市役所 1981 松任。

圖 版



米光萬福寺遺跡の位置 (○印)



米光萬福寺遺跡（○印）と周辺地域



(1) 遺跡遠景（南から）



(2) 遺跡遠景（東から）



(1) 調査前の遺跡（東から）



(2) 表土除去中の遺跡（西から）



(1) 調査風景（東から）



(2) 調査風景（西から）



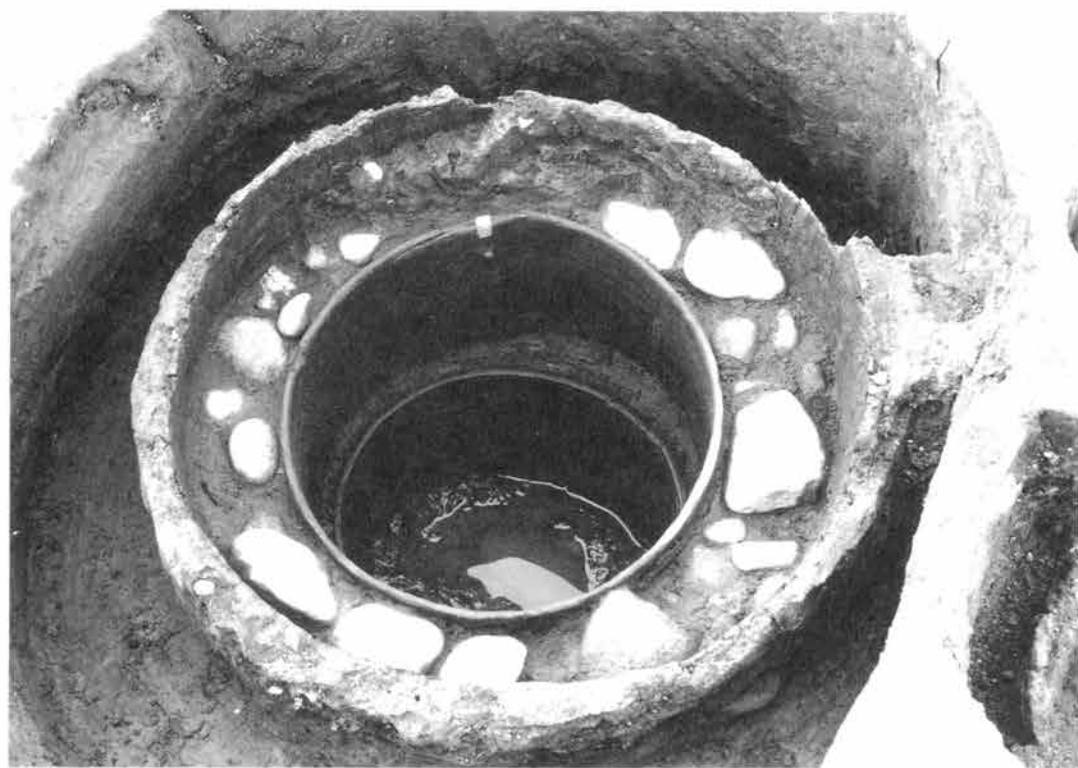
(1) 掘立柱建物跡（東から）



(2) 掘立柱建物跡（西から）



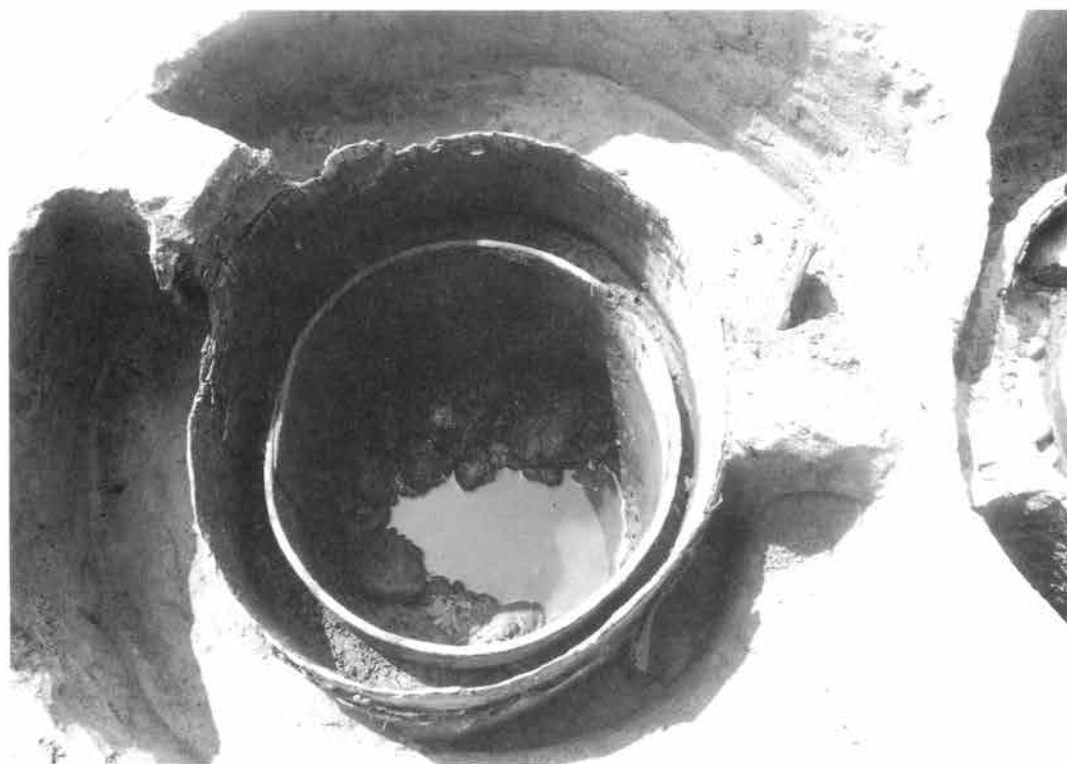
(1) 井戸跡



(2) 第1号井戸跡



(1) 第2号井戸跡



(2) 第2号井戸跡完掘状況



(1) 第1号溝と第1号・第2号土坑（北から）



(2) 第2号溝（北から）



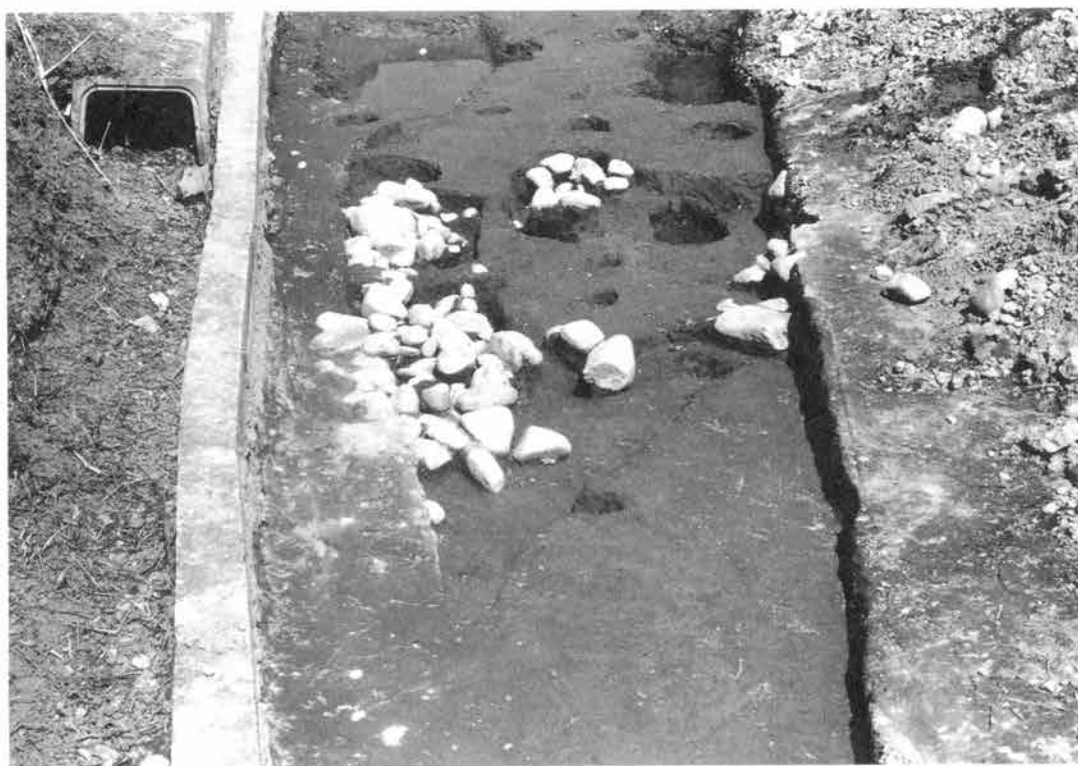
(1) 第3号土坑・第3号溝(北から)



(2) 第4号溝・第4号土坑(北から)



(1) 第5号土坑（東から）



(2) 集石（西から）



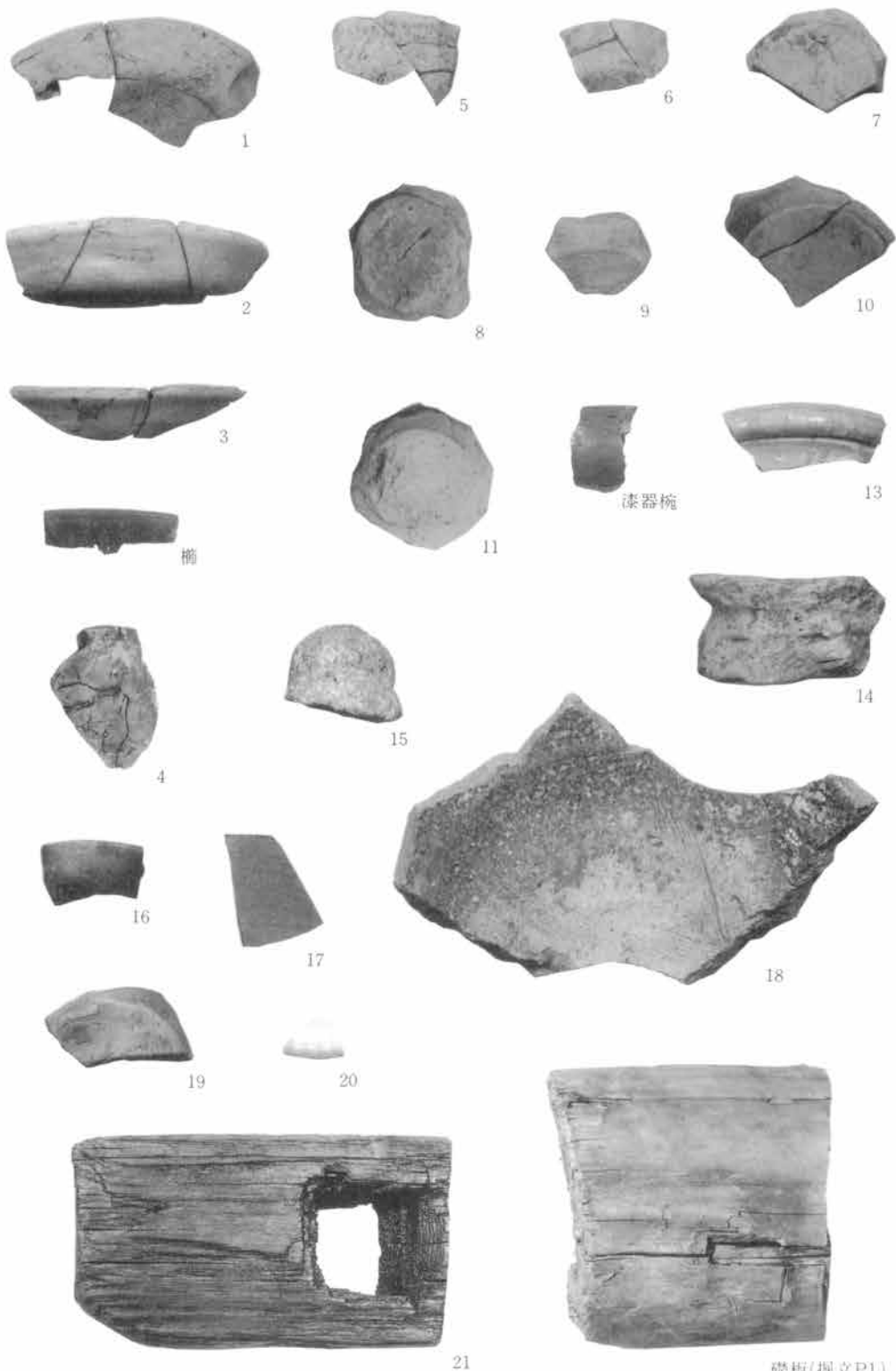
(1) P21の柱根（左）とP22の礎板



(2) 掘立柱建物跡P9の礎板



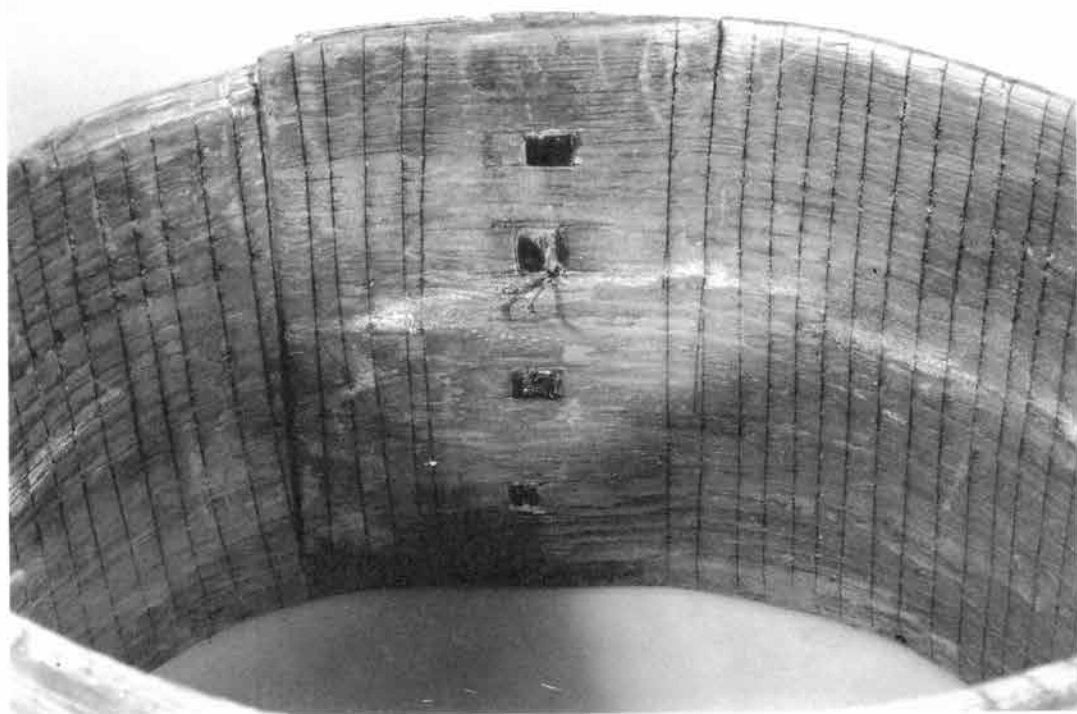
遺跡全景（東から）



遺構内出土遺物



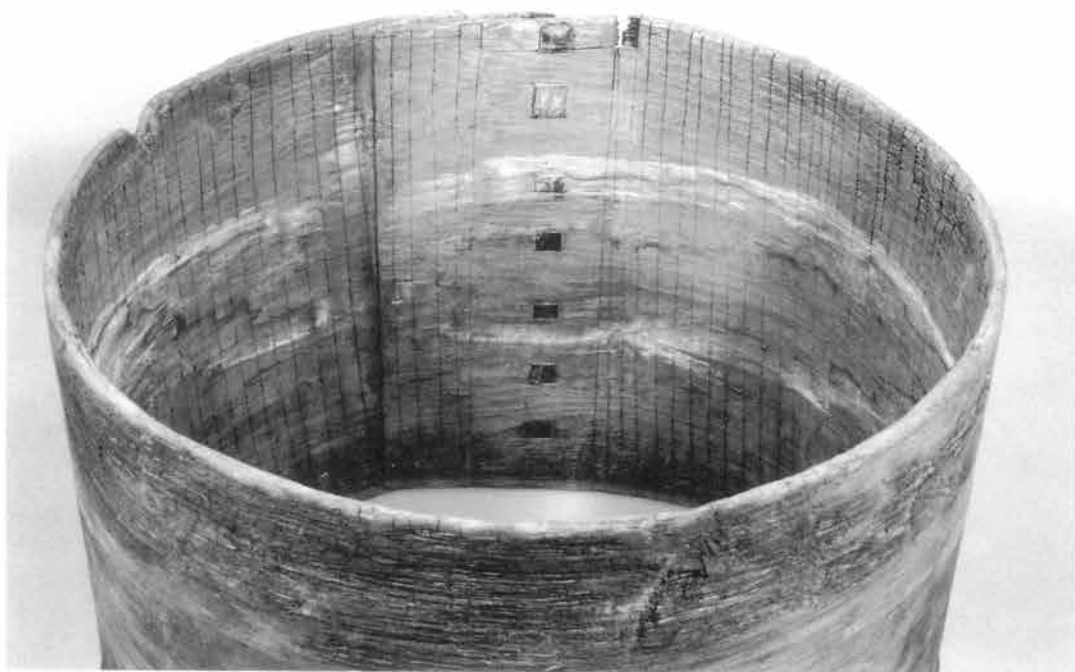
(1) 第1号井戸内梓



(2) 第1号井戸内梓内面



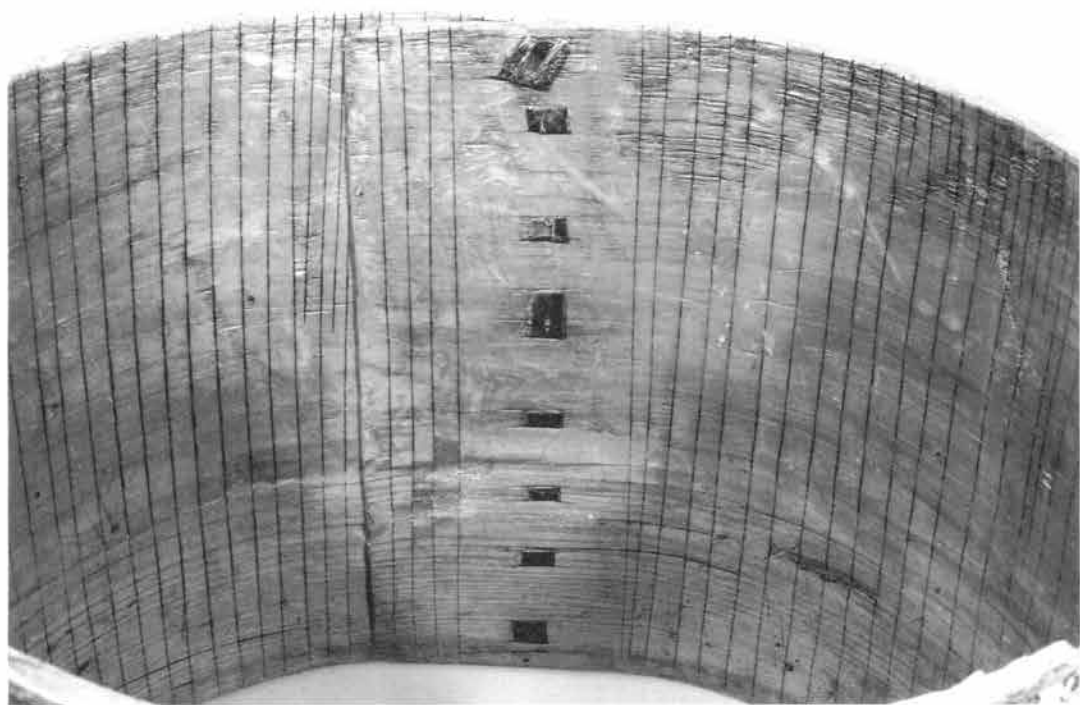
(1) 第1号井戸中棹



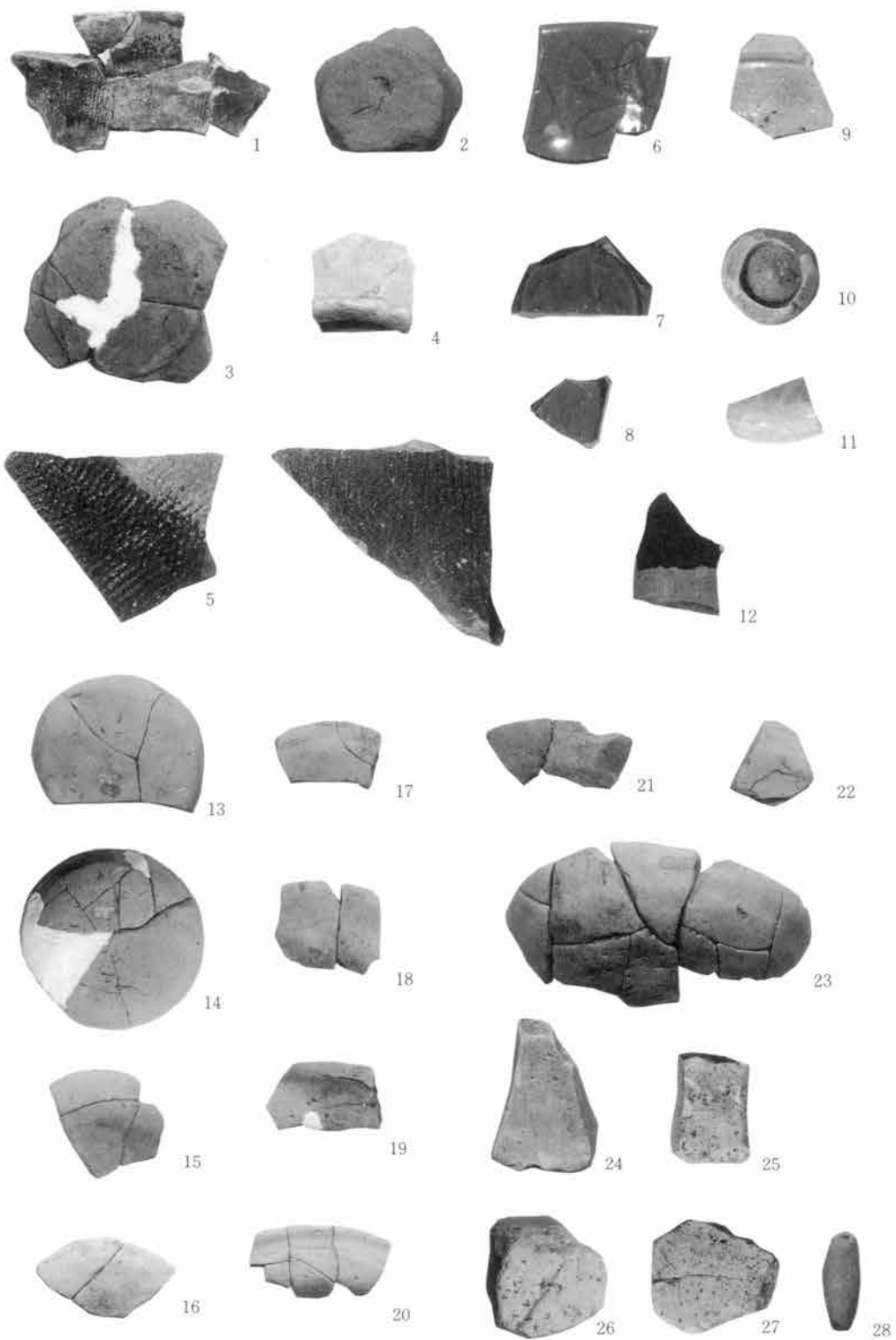
(2) 第1号井戸中棹内面



(1) 第2号井戸内枠



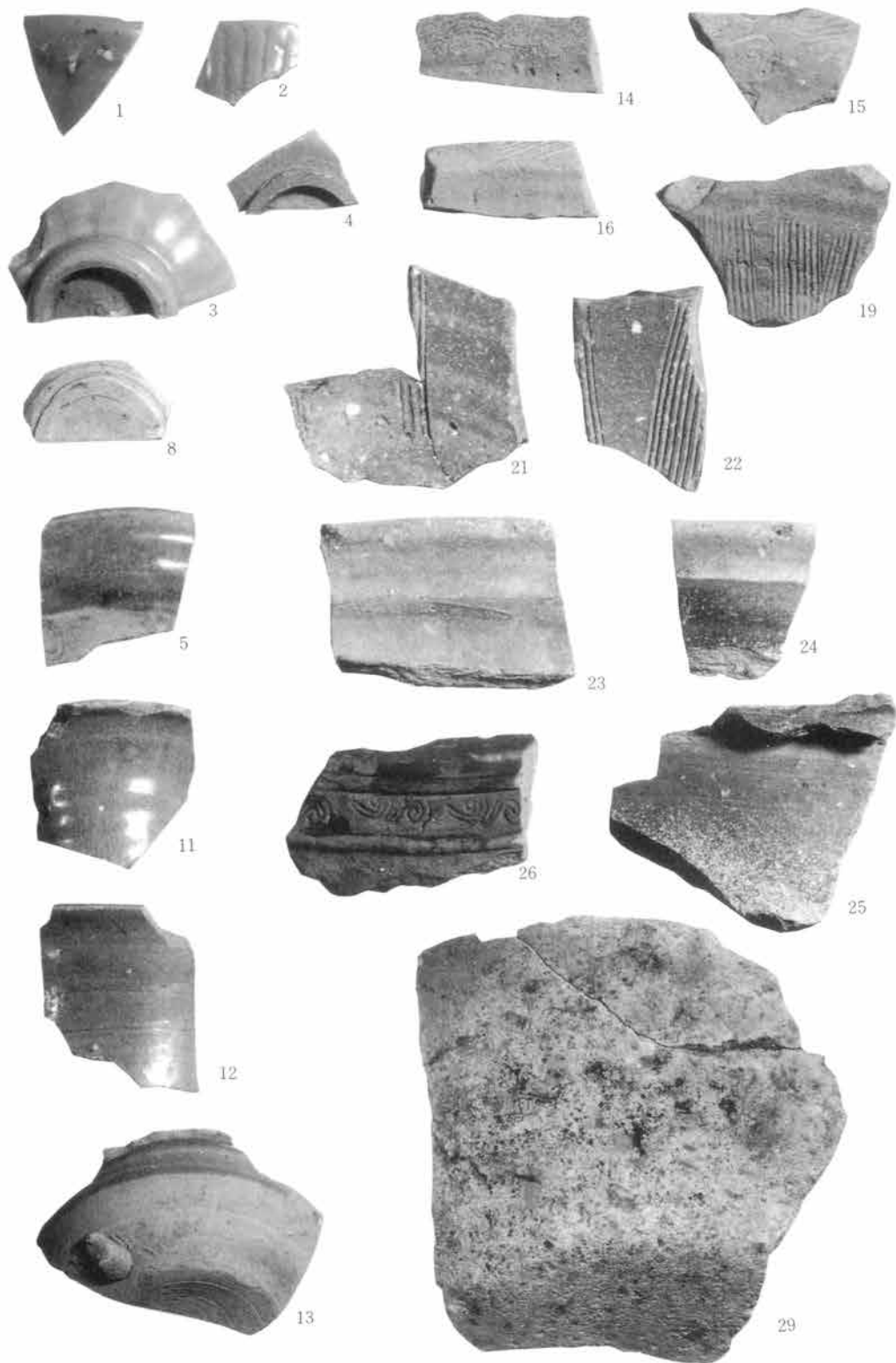
(2) 第2号井戸内枠内面



包含層出土遺物 (1)



包含層出土遺物 (2)



テラノヤブ地区採集遺物



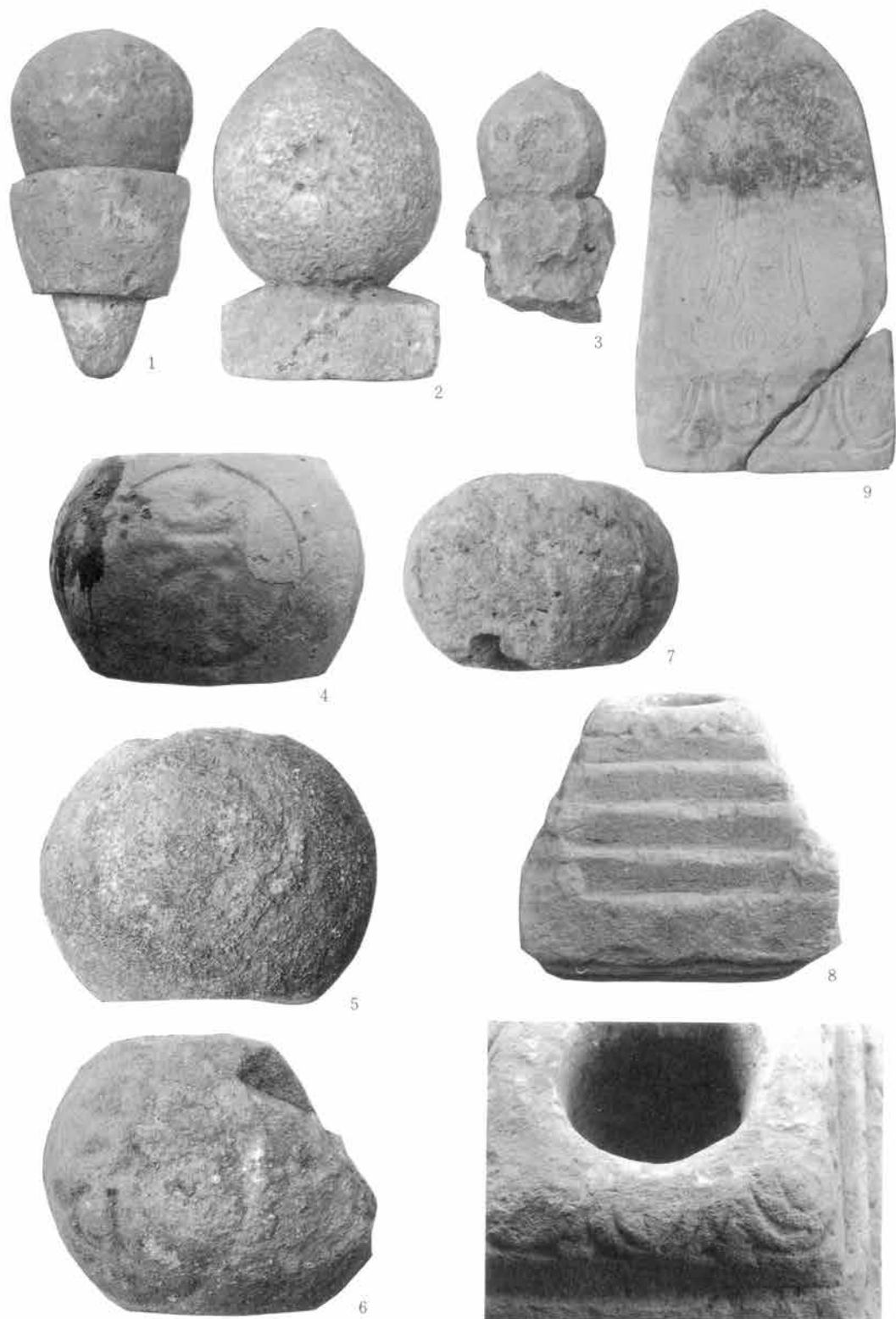
(1) テラノヤブ地区採集石硯の硯面



(2) 石硯の底面



(3) 石硯の硯面および側面



8の上部

テラノヤブ地区採集石造遺物



(1) 立石全景 (南から)



(2) 立石全景 (東から)



第1号立石

第2号立石

第3号立石

第4号立石

第5号立石

YONEMITSU - MANPUKUZI SITE

The report of the excavation of the site at Yonemitsu, Mattō City
Ishikawa Prefecture

Kanazawa, 1987

Edited and Published by the Archaeological Research Center of
Ishikawa Prefecture, JAPAN

米光萬福寺遺跡

昭和 62 年 3 月 20 日 印刷

昭和 62 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉町 4 丁目 133 番地
〒921 電話 (0762) 43-7692 番代

印刷 株式会社 橋本確文堂

石川県金沢市大手町 2-35

©石川県立埋蔵文化財センター 1987

本文用紙：書籍用紙イエロー（中性紙）72kg